目次

巻頭言
ミュージアムの社会的使命・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北海学園大学教授　手塚　　薫　1

≪特集≫　奥尻島での学び
奥尻島での研修を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・経済学部地域経済学科３年　伊藤　　赳　3
奥尻島研修での学び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・工学部生命工学科１年　楠本　玲来　9
奥尻研修を通して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科２年　岩崎　彩雲　15
奥尻島の避難路調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科２年　中村　美月　21
奥尻島における例祭の経年調査を通じた博物館展示の実践
・・・・・・・・・・・・・・・・文学研究科博士（後期）課程・小樽市総合博物館学芸員　蟬塚　咲衣　29

学生課外活動報告
卒業論文執筆に向けた事前調査・・・・・・・・・・・・・・・・経済学部地域経済学科３年　伊藤　　赳　35

2023 年度課程科目学生レポート
ミニミュージアムのねらいと講評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北海学園大学教授　手塚　　薫　41
博物館経営論　ミニミュージアム制作を終えて・・・・・・・・経済学部経済学科４年　榊原　大輝　43
博物館経営論　ミニミュージアム制作を振り返って・・・・人文学部日本文化学科３年　藤原　悠生　51
博物館経営論　ミニミュージアム制作を終えて・・・・・・・・経営学部経営学科３年　渡辺　彩花　58
博物館概論/博物館資料論 講評『学芸員課程の転換期』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北海学園大学講師　水崎　　禎　64
博物館資料ドキュメント 『1972 年札幌冬季オリンピック貯金箱』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科１年　東田　純奈　66
博物館資料ドキュメント 『フックピアス』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科２年　伊藤　乃葵　74
博物館資料ドキュメント 『タオル（ツアーグッズ）』・・・・・・工学部生命工学科１年　楠本　玲来　80
博物館資料ドキュメント 『つげ櫛』・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科１年　田口こずえ　87
博物館資料ドキュメント 『ミニチュア三味線』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科１年　只石　桃花　92
博物館資料ドキュメント 『ハリーポッター　TM ローブ（スリザリン TM）』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科１年　中山　穂乃　97
博物館資料ドキュメント『ぬいぐるみ（伊野尾慧）』・・・・人文学部日本文化学科１年　安岡　彩奈　103
編集後記・・109

＊学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。

巻頭言

ミュージアムの社会的使命

北海学園大学教授　手塚　薫

2024 年 2 月に久しぶりにニューヨークを再訪することができた。日本学術振興会の科学研究費による調査の一環で、アッパー・ウエストサイドに位置するアメリカ自然史博物館でコレクション調査を行うことが目的であった（写真 1)。この博物館は、2006 年制作のアドベンチャー映画「ナイトミュージアム」の舞台になったことでも知られるが、人気が高く来館者が非常に多い。中でも小・中学生などの団体客が恒常的に教育プログラムを受講する場ともなっている。

今回常設展示を見てあらためて思ったのは、博物館と社会との関係および博物館の存在意義を、一般観覧者向けの展示で明確に主張していることであった。こういう姿勢は日本の博物館では必ずしも一般的とはいえない。例えば、自然史博のギャラリー間をつなぐ回廊の解説パネルには 4 つの基本的な問いが回答とともに表示されており、誰もが自然に足を止めて眺められるようになっている。その問いとは、1）なぜ資料を集めるのか、2）どのように資料を研究するのか、3）誰が資料を使うのか、4）何を集めるのか、である。そこから垣間見えるのは、著名な博物館であろうとも、価値があるから、あるいは、収集するのが当然だからという発想とは異なり、目的・手法・便益享受者・用途が体系的に整っていて初めてコレクションを収集・保管・展示・研究する必然性が生じるという態度である（写真 2)。さらに、同コーナーでは、博物館資料が世界規模の知識の形成に役立っているのかも問うている。

私たちは普段、何気なく個々人の能力や判断で物事を学んで知識を得ていると考えがちである。しかし、自分が持つ知識を他人や特定グループと共有し、複数人で共に学んで理解することで、広くこの世界に知識を蓄えてもいる。自然史博が収集資料に基づく研究の成果を広く社会に共有･還元しようとする姿勢は､まさにこうした流れに沿うものである。

この点では、長い存続の歴史を誇る欧米の博物館の方に一日の長があろう。川崎市市民ミュージアム（川崎市）と北海道開拓記念館（札幌市）で 2005 年に開催された特別展『ロシア民族学博物館アイヌ資料展―ロシアが見た島国の人々―』を、私自身学芸員として手掛けたことがあり、ロシア民族学博物館（REM）から多数のアイヌ資料を里帰りさせて展示した。サンクト・ペテルブルクにあるロシア民族学博物館には、約 2,800 点もの海外では最大規模のアイヌコレクションが所蔵されているが、その大半は著名な民俗・民族学者でロシア帝国地理学協会正会員のヴィクトル･ニコラエヴィッチ･ヴァシーリエフが 1912 年にサハリンと北海道で収集したものであり、学術的にも極めて価値が高い。本人がその翌年に発表した旅行記には以下のような記述がある。当時の日本国内の博物館がどのような状況下におかれていたかを知る貴重な証言となっているので以下に紹介したい。

概して、見学したすべての博物館の印象は、日本における博物館事業は新しく、一般にはよく知られておらず、この領域において日本人はまだ多大な努力をしなければならないということである。全部の博物館に共通しているのは、その混在性である。博物館にはさまざまな学問領域―地質学、動物学、魚類学、鳥類学、昆虫学、植物学、考古学、民族学―の資料があり、ほとんどどの博物館でもこれらの領域の資料が、ときにはさらに産業関係のものも含め、それも断片的、不完全、偶然に、明確な体系がないままに展示されている。博物館の展示面積はどこでも小さく、そのために博物館としての必要性をまったく満たしていない。だが、例えば、東京の上野公園にある立派で広い博物館において目に映るのは、貧相さ、体系的に収集された学術価値を持つ資料の不足であるが、効果をねらった珍品の派手な展示によって取りつくろわれている。この博物館で非常に多くのスペースを占めているのは巨大なケースで、そのなかには着飾った大名（領主)、侍（騎士)、宮中の女性たちなどを表す数多くのマネキンが展示されている（ヴァシーリエフ, V. N. 2005「エゾおよびサハリン島アイヌ紀行」『ロシア民族学博物館アイヌ資料展―ロシアが見た島国の人々―』荻原眞子訳、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編集・発行 pp.132-147)。

この上野公園にある博物館とは、わが国最古の博物館である東京国立博物館のことである。旅行記が書かれてからすでに 111 年が経過しようとしているが、国内の博物館が上述した状況から完全に脱却したと言えるであろうか。とりわけ、社会全体の中に社会教育施設を位置づけ、博物館に親しむ文化を形成していくことが、博物館活動を将来的にも維持していく基盤になるという意味において、社会あっての博物館という意識を忘れることなく、社会との相互交流の必要性をはっきりと自覚することは今後ますます重要になっていくに違いない。

写真 1 アメリカ自然史博物館職員通用口

写真 2 古い収蔵資料が現代において果たす役割について解説したパネル

奥尻島での研修を終えて

経済学部地域経済学科 3 年　伊藤　赳

１．はじめに

私は、2023 年 8 月 11 日から 8 月 14 日にかけて実施された奥尻研修に参加した。昨年に引き続き参加できたこと、リーダーとして貴重な経験を積む機会をいただけたことをうれしく思う。8 月 11 日は津波館などの見学、12 日は稲穂ふれあいセンターでの資料整理、13 日は青苗言代主神社の祭礼に参加、14 日朝に奥尻島を離れた。本来は 15 日まで奥尻島に滞在する予定だったが、天候が悪化することで船が欠航になる可能性があったことから予定より 1 日早く島を離れることになってしまったのは残念であった。

また、今年は町民センターを立命館大学の学生と共同で利用したのだが、炊事や夕食、自由時間などを通して交流できたことは、非常に良い経験になったと思う。

２．青苗遺跡

まず、私たちは奥尻町教育委員会学芸員の稲垣森太さんに青苗遺跡を案内していただいた。青苗遺跡は青苗地区の丘に立地する遺跡である。青苗砂丘遺跡のように案内板などは無く、民家裏手のかつて畑として利用していた土地が青苗遺跡である。青苗遺跡の発掘作業は私たちが奥尻を訪れる直前まで行われており、発掘現場は埋め戻されたばかりの状態であった。青苗遺跡からは擦文土器が出土している他、勾玉や水晶玉も出土している。これらの出土品に加えて、遺跡の立地場所が青苗湾を見渡せる丘の上であることから、稲垣さんは位の高い人物が埋葬されていた可能性があると教えてくださった。また、今回の発掘調査は 6 人で 6 日間かけて実施されていたそうだが、これは規模を考えると標準的なものだという。発掘作業において、重機を用いると早く作業が進むのだが見落としも多くなり、手作業だと見落としは少ないものの作業に時間がかかってしまうという。発掘作業では、手作業と重機のどちらで作業をするかという見極めが重要になってくるという。

写真 1 青苗遺跡

遺跡に関する説明を受けた後、私たちは発掘作業に使用したバケツなどの道具を片付ける作業を手伝った。

３．奥尻津波館

続いて奥尻津波館を見学したのだが、ここでも稲垣さんに展示資料などの解説をしていただいた。奥尻津波館は北海道南西沖地震で奥尻島が受けた津波や地震被害に関する展示などを行う博物館である。稲垣さんの解説で私が特に興味を持ったのが、北海道南西沖地震の際に一部が崩落した「鍋つる岩」を修復したという話だ。崩落した部分は震災後に人の手によって修復されており、現在の「鍋つる岩」には人の手が加わった姿なのだという。岩を人の手で修復したという話を聞いて驚いたのだが、奥尻のシンボルであることを考えると、人の手を加えて、修復してでも守る必要があったのだろうと思った。

４．賽の河原

二日目は稲穂ふれあいセンターで資料整理を行ったのだが、その前に稲穂岬の「賽の河原」を見学した。「賽の河原」は道南五霊場の一つで、稲穂岬のいたるところに石塔が並べられているのが特徴である。石塔の他、北海道南西沖地震の慰霊碑や北海道南西沖地震による稲穂地区での犠牲者の名前が刻まれた石碑なども設置されており、独特な景観が広がっている。お盆の時期によるものか、訪れている人は意外に多かった。

写真２　賽の河原

５．稲穂ふれあいセンター

二日目は、奥尻島北部にある稲穂ふれあいセンターで稲垣さんの作業を手伝った。私は、1983 年に発生した日本海中部地震による津波被害を受けた奥尻島を撮影した写真の整理を行った。写真には、倒壊した木造集宅や瓦礫に埋もれる自動車、陸地に打ち上げられた小型船などの津波被害や瓦礫を撤去する作業の様子、北海道知事が被災した奥尻島を視察する様子が記録されていた。私たちは、これらの写真を北海道知事らが写されたもの、被害状況を記録したものなどに分類する作業をした。奥尻島での津波被害というと北海道南西沖地震が思い浮かぶのだが、北海道南西沖地震のおよそ 10 年前にも奥尻島で津波が観測されていたことを知り、驚いた。

写真３　資料整理の様子

６．初松前地区の慰霊碑

初松前地区の道道沿いにも北海道南西沖地震の慰霊碑が設置されている。私たちが訪れた際には、男性が慰霊碑周辺に設置したロウソクに火を灯し、慰霊碑に水をかけていた。男性の話によれば、例年は 7 月 12 日（北海道南西沖地震発生日）に行っているそうだが、今年は地震発生から 30 年目であることから、7 月 12 日以外にも月命日にあたる 8 月 12 日にも行ったのだという。この話を聞いて、30 年という節目が島民にとって重要なものであることを実感した。

写真 4　初松前地区の慰霊碑

７．青苗地区での研修

8 月 12 日夕方から青苗地区の公園では盆踊り大会や山車のお披露目が行われており、私たち研修生もこれに参加した。このとき、立命館大学の学生が奥尻町職員の桑原剛志さんから聞き取り調査を行っており、私も同席して奥尻の産業などについて聞き取りをした。桑原さんは「あくまでも一個人の見解として聞いて欲しい」と付け加えたうえで、奥尻に関する様々なお話をしてくださった。

写真 5　会場入り口の山車

まず、奥尻島東部で進む道路建設についてお話を伺った。桑原さんによると、現道は一車線での交互通行で危険なことや、土砂崩れの恐れがあることから道路の付け替えを行っており、2～3 年後には完成するのではないかとのことであった。また、建設中の橋梁は重量制限があるため自衛隊車両などが通行できないとなった場合、付け替え後も現道は廃道にはならない可能性があるという。

次に奥尻の産業についてお話を伺った。

まず、農業についてだが、奥尻島では放牧や稲作が主力となっているのだという。奥尻島では牛も飼育しているが、1 年間で一頭分の牛肉が生産されるかどうかといった程の生産量でかなり珍しいものだそうだ。しかし、奥尻島の農業も後継者不足に直面しており、耕作放棄地も発生しているという。桑原さんとしては、耕作放棄地を湿地に復元するといいのではないかと考えていると教えてくださった。

次に水産業についてだが、こちらは農業に比べると明るい話題が多い印象を受けた。後継者については奥尻島外から漁師になるために移住した人もおり、今年から 20 代前半の方が数名、漁師として働き始めたという。しかし、漁自体は不振であり、徐々に養殖への切り替えを進めているとのことだ。養殖漁業に関しては北海道大学からの協力もあるため、島内の他の産業に比べると未来は明るいのではないかと教えてくださった。

奥尻町は水産業と並ぶ主力産業として観光業の成長を目指している。奥尻島の観光資源を桑原さんに尋ねたところ、ブナの森や神威脇の星空などマイナーな観光スポットを教えてくださった。このブナの森は離島では最北のものだという。桑原さんは「ブナの森や星空などを売り込むといいのではないか」とおっしゃっていた。また、奥尻島の特産品となりつつある奥尻ワインはリピーターを獲得することに成功しており、奥尻島限定の商品を求めて奥尻まで足を運ぶ方もいるという。一方で、民宿経営者の高齢化などといった課題も存在しているそうだ。

私も実際に町民センターから星空を見たのだが、非常にきれいなものであった。ブナの森や星空といった自然を売り出せば、奥尻の観光業はさらに発展するのではないかと感じた一方で、民宿経営者の高齢化や大型ホテルの閉鎖は今後の観光業の発展において足かせになるのではないかと思った。観光資源の売り込みと同時に観光客の受け皿となる宿泊施設等の整備も進める必要があるのではないだろうか。

奥尻町の電力供給についても教えてくださった。奥尻島で使用する電力の全ては島内で発電しており、そのほとんどが火力発電によるものだという。火力発電の他、風力発電や水力発電も行われている。水力発電は崖地になっている島西部が向いており、現在はホヤ石川発電所が稼働している。風力発電についても風の強い島西部が向いているのだが、陸地は崖になっているため風力発電所建設に向かず、洋上風力発電所については漁業者から漁に影響するのではと不安の声があり、ほとんど建設されていないという。また、宗谷地方などの風力発電所では風車に鳥が衝突するという事故が発生しているなど、風力発電所が抱える問題点も教えてくださった。こうした事故の対策としては、風車の羽の一部に赤線を引くことで鳥が障害物を認識して回避できるようになり、事故を未然に防げるようになるというが、事業者にはあまり知られていないようで、対策は進んでいないそうだ。

写真 6　島東部の地形

地球温暖化が進む中で、風力発電の需要は伸び続けることが考えられるため、発電所建設と環境保全のバランスを取れるように、まずはこうした対策方法を関係者に広く知らせていくことが重要だと思った。また、こうした対策を義務付けることなども併せて検討していく必要もあると思う。

一方、会場ではカラオケ大会や盆踊り大会などのイベントが開かれており、特にビンゴ大会は非常に盛り上がっていたのだが、参加者は熱中するあまり、会場周辺でのお囃子や花火

にはあまり注目していないようだった。複数の催しを用意しても見物人がいないというのは非常にもったいないため、ビンゴ大会と時間が被らないようにするなどの時間調整があっても良いのではないだろうか。

８．研修３日目

3 日目の午前中は青苗地区で活動をした。

青苗地区の市街地から海側を見ると、漁港の岸壁の上を屋根のようなものが覆っているのが見えた。私は気になったので、そこまで行ってみることにした。屋根までは高架道路がつながっており、屋根の上は駐車場のような空間が広がっていた。近くの案内板によれば、「望海橋」という人工地盤で、津波が発生した際に漁港で働く人々が階段で人工地盤の屋上まで避難し、そこから高架道路を渡ってさらに高台まで避難できるようになっているという。漁港から階段を上ると防潮堤と同じ６ｍほどの高さにまで避難できるそうで、一時避難場所や避難路としての効果は大きいのではないかと思った。

写真７　人工地盤「望海橋」

11 時頃からは青苗言代主神社の神事に参加させていただいた。普段の生活で私はこうした神事に参加する機会が無く、貴重な経験ができたと思う。昨年まで使用していた仮設住宅を転用した社務所はなくなっており、同じ場所に新しい社務所が設置されていた。

午後は町民センターに戻り、立命館大学大学院文学研究科地理学専修の大学院生で TA もされている王子豪さんと小樽市総合博物館で学芸員をされている蟬塚咲衣さんが取り組まれている調査研究について説明していただいた。

王さんの研究テーマは「エスニックシティ」と「都市構造」であり、主に日本の都市部での中国人の生活について調査している。私が王さんの話で特に興味を持ったのは、中国東北地方の出身者が多く日本へ出稼ぎに来ているという話だ。中国国内の工業は外国企業の進出などで好調だと思っていたのだが、王さんによれば、改革開放政策や WTO への加盟などで東北地方の工業は大打撃を受け、東北出身者が中国国内の他地域や韓国、日本などの隣国に出稼ぎに来ているのだという。これはかなり意外だった。

次に蟬塚さんの研究について説明していただいた。蟬塚さんの研究テーマは「祭礼の可視化とアーカイブ」で、奥尻島の祭礼についても調査をされている。蟬塚さんによると、奥尻には神社の資料が少なく、島内の大幅な人口減少から祭事を実施することが今後は困難になる恐れもあるのが現状だという。

奥尻の祭礼は北海道南西沖地震の前後で大きく異なっており、青苗地区では、震災後に青苗言代神社の参道短縮や、それに伴う行事の縮小などといった影響がみられたそうだ。こうしたことから復興が神社よりも生活重視で行われたことがわかるという。また、震災により

青苗地区の住民が隣接する他の地区に転居したため、青苗地区以外にも山車が巡行するようになったそうだ。

北海道の日本海側各地に伝わる民俗芸能である四箇散米行列についても説明していただいた。四箇散米行列は松前神楽から派生した民俗芸能で、奥尻には松前から利尻を経由して伝わってきたそうだ。奥尻からは黒松内と小樽にも伝えられたのだという。蟬塚さんは、小樽市総合博物館で四箇散米行列の企画展を手掛けており、8 月には企画展に連動して、博物館の敷地内で地元の子供が四箇散米行列を再現するイベントも実施された。しかし、政教分離などの観点から市からの支援を受けることが困難など、イベント実現までにはかなり苦労されていたそうだ。蟬塚さんによれば、伝統芸能になれば行政からの支援は比較的受けやすくなるのだが、四箇散米行列は小樽に伝わってから 30 年ほどしか経過しておらず、伝統芸能と認められるにはあと 20 年ほど継続しなくてはならないそうだ。これは 50 年間続いていることが伝統芸能として認められる目安になっているからだという。

この話を聞き、少子高齢化が進む現代では 50 年間民俗芸能を継続するということ自体が困難なのではないかと思った。政教分離の観点から行政が支援するのは難しいのかもしれないが、民俗芸能を維持するためにも博物館でのイベントなどには可能な限り支援をしてほしいと思う。

９．おわりに

予定よりも 1 日短い研修となってしまったが、発掘調査を終えたばかりの青苗遺跡の見学や、王さんと蟬塚さんが取り組む調査研究について説明していただく機会などもあり、例年とは異なる貴重な経験ができ、大きな学びになった。また、稲穂ふれあいセンターでの資料整理の手伝いや、蟬塚さんの企画展やその関連イベントの準備に関するお話を聞くことで、学芸員の仕事についても学びを深めることができた。

滞在中お世話になった学芸員の稲垣さん、学生を引率してくださった手塚先生、研修中に様々な助言をくださった蟬塚さん、立命館大学の村中亮夫先生、奥尻町の現状についてお話ししていただいた奥尻町職員の桑原さん、夕食の準備などに協力していただいた立命館大学文学部地域研究学域地理学専攻の 12 名の学生の皆さんには心から感謝申し上げます。また、リーダーとして至らない点が多くあったと思いますが、支えてくださった研修生の皆さんにも深く感謝いたします。

奥尻島研修での学び

工学部生命工学科１年　楠本　玲来

１．はじめに

筆者は 2023 年８月 11 日から８月 14 日までの４日間､奥尻島で実施された学外研修に参加した。欠員が出たため研修２週間前に急遽参加となった。2023 年４月から学芸員課程を履修し、博物館学芸員について学び始めた私にこのような機会を与えていただき嬉しく思う。4 日間の活動として１日目に津波館見学､2 日目は稲穂ふれあい研修センターでの実習と青苗町内会のお祭り参加、3 日目は各自テーマの調査と青苗言代主神社でお参りをした後、町民センターで小樽市総合博物館学芸員の蟬塚咲衣さんと立命館大学大学院生で TA の王子豪さんのお二人からそれぞれの研究についてお話を伺った。最終日の５日目は帰宅のための移動のみに時間を使った。この研修は８月 11 日から４泊５日の予定だったが、台風の影響で天候不良が予測され、フェリーの欠航が心配されたので予定より早く研修終了となった。今回の研修の中で学んだことについて下記で述べていく。

２．研修１日目

９時 40 分江差発フェリーで奥尻島へ移動し昼食をとった後、海洋センターに奥尻町教育委員会事務局の学芸員である稲垣森太さんへ挨拶に伺った。稲垣さんから８月４日から８月 10 日行われた考古学の発掘調査について説明を受けた。1 メートルほど掘ったところを 10 層に分け、６層のところで土器の破片が出たそうだ。1000 年ぐらい前の擦文時代後半の土器だと考えられるとのこと。黄色の地層は火山灰であるそうだ。17 世紀の駒ケ岳噴火のものだろうとのこと。説明の後、発掘調査で使用した道具の片付けを行った。

次に、奥尻島津波館を見学した。

３．奥尻島津波館

津波館では、1993 年７月 12 日に北海道奥尻郡奥尻町北方沖の日本海海底で発生した地震である「北海道南西沖地震」での被害についての展示や擦文時代の土器や青苗遺跡についての展示があった。北海道南西沖地震についての映像を見た後、稲垣さんから擦文時代や青苗遺跡、丁字頭勾玉の説明を受けた。その後、自由に展示を見て回った時、特に印象に残った展示がある。それは北海道南西沖地震について被害状況などを時系列に並べたジオラマ展示である。ミニチュアの人物や物、鍋釣岩の立体模型があり、震災前の状況と震災後の被害を比較しながらストーリーを追って北海道南西沖地震を見ることができる。このように地震や津波など災害について伝えるためには、資料として被害を受けたモノだけでなく、災害から復興という出来事を伝える手段としてジオラマ展示は効果的であると感じた。

次に、津波館を出て屋外の時空翔を訪れた。時空翔は慰霊の碑であるだけでなく、島民が未来の奥尻を想う大切な空間でもあるそうだ。石碑のくぼみは、震源地となった南西沖を向いていて､地震のあった 7 月 12 日に海に向かって石の正面に立つとくぼみの中へ沈む夕日を見ることができる。

時空翔

４．研修 2 日目

研修 2 日目は､稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室で学芸員の稲垣さんの指導のもと、資料整理を行った。私は、北海道南西沖地震の写真整理を行った。写真を①被害の様子と②当時の知事（横路知事）が視察に奥尻島を訪れた時、③復興の３つに分けて時系列にまとめて整理した。時系列にまとめるには、写真を見て情報を読み取らなければならなかった。どのような意図でこの写真を撮ったのか、場所はどこなのか、知事はどのようなルートで視察をしたのかを考えて分けた｡この写真は役場が所有していたものである。写真を輪ゴムで束ねていたようで輪ゴムの劣化がひどく、固くなった輪ゴムは写真に張り付いて跡が残り、取れないものがあった。この経験から資料保存に輪ゴムは使わないよう注意したいと思った。

また、展示室には雨漏りをしているところがありブルーシートが敷かれていた。このようなトラブルにも学芸員が対応しなければならない。すぐに修理できる状況ではないためそのまま被害を最小限に抑えつつ資料の展示も継続しなければならないというところに離島で学芸員がひとりという大変さを目の当たりにした。

稲穂ふれあい研修センター

稲穂ふれあい研修センターの様子

稲穂ふれあい研修センターでの資料整理の様子

資料整理の後、夕方からは青苗町内会のお祭りに参加した。会場に向かう際、慰霊碑に立ち寄った。ちょうど島民の方がろうそくに火を灯していたのでお話を聞くことができた。「いつもは北海道南西沖地震の起きた 7 月 12 日にしかやらないが、30 周年の月命日（この日は 8 月 12 日）でお盆だからお参りに来た」というお話を伺い、慰霊碑の意義を改めて実感した。

慰霊碑とお話を伺った方

青苗町内会でのお祭りは、カラオケ大会、盆踊り、ビンゴ大会の順で構成されていた。このお祭りには、恵比寿山の山車が出ていた。また、このお祭りの特徴は、盆踊りである。盆踊りの曲数が多く踊り方もすべて違っていた。すべて踊れている方は少ない印象だったことと町民の方々の「このままだと誰も踊れなくなる」といった発言があったので、この盆踊りの継承について今からでも映像などの記録を残すべきではないかと考えた。

恵比須山の山車

５．研修３日目

研修３日目は、佐藤雅則野球展示室とうにまる公園を見学した後、各自テーマの調査を行った。うにまる公園にはドクターヘリの緊急着陸場があり、マークはうにまるくんであった。各自テーマの調査で私は奥尻島に初めて来たので、手塚先生とリーダーの伊藤さんに奥尻島を案内していただいた。はじめに、奥尻空港に向かった。空港にあった奥尻島のマップに書かれている情報は古いようだった。空港から青苗に向かう途中に水田があった。お米やお酒を造っているそうだ。お米は島民が食べることは少ないということだった。また、後継者がいないという問題もあるようだった。水田の先に進むと海に入れるところがあったので、車を降りて海へ向かった。海の砂浜は砂というより石（砂利）であった。角がなくつるっとした丸い形であった。海との距離で石の大きさの違いがはっきりしていた。

海の砂浜の様子

各自テーマの調査の後、青苗言代主神社でお参りをした。１人１人前に出て榊を神主から受け取り奉納した。神事が終了した後、青苗言代主神社では、歴史やお参りの情報などSNS で発信しているということを伺った。お参りの後、町民センターで蟬塚さんと立命館大学の方の研究についてお話を伺った。

青苗言代主神社

６．研修中の食事や生活について

私は、研修２週間前に急遽参加となったこともあり、不安のほうが強かったのでここに研修中の生活について記しておく。

フェリーは２等自由席学割で片道 2,420 円であった。行きの江差フェリーターミナルではお盆の帰省シーズンだったようで非常に混んでいた。フェリーは大きいので思ったより揺れは少なかった。

食事については、1 日目の昼食はまつや食堂に向かったが 30 分以上待つということで、次の予定があったため断念した。また、この日は祝日で飲食店はほとんどお休みだった。セイコーマート奥尻でおにぎりと水、おやつを買いフェリーターミナルの待合室で昼食をとった。研修期間中の滞在場所は、旧奥尻高等学校を改修して設置された奥尻町町民センターである。夕食は研修メンバーで自炊をし、みんなで食事をとった。これまでの研修のことや、稲垣さんのお話など奥尻島や学芸員のことを知ることができた。調理器具や食器は揃っていたので不便に感じることはなかったが、炊飯器ではご飯の量が足りないので釜で炊いたときは大変だった。夕食の買い出しにはニコットを利用した。その際に、次の日の朝ごはんなど各自で買い物もした。私はパンや飲み物を買うことが多かった。町民センターにある冷蔵庫は自由に使えたので、今回の研修のように他大学の学生もいる場合などは油性のマッキーで自分の名前を書いて保存することをおすすめする。

2 日目の昼食は、北の岬さくらばな食堂で食事をとった。フライ定食とソフトクリームを食べて 1,686 円であった。

研修中の飲み物は基本的にお茶を水筒に入れ、凍らせた水のペットボトルを持ち歩いていた。奥尻島には日陰が少ないので、飲み物と帽子など熱中症と日焼け対策は必須である。

テレビやエアコンはなくても特に不便なこともなく、非常に楽しい時間を過ごすことができた。夜には研修メンバーみんなで星を見に外に出るのをおすすめする（街灯がほぼないので一人で外に出ないようにすること！）。

フェリーの様子

北の岬さくらばなのフライ定食

北の岬さくらばなとソフトクリーム

研修中の朝ごはんの様子

７．おわりに

今回の研修では離島ならではの貴重な体験ができ、奥尻島のことや学芸員の仕事について学ぶことができた。また、町民センターで立命館大学の教員・学生とも交流ができたのは良い経験になった。

また、今後の勉学や自分の研究したい分野を決める際にこの研修での経験を活かしていきたいと考えている。

最後になりましたが、4 日間の研修を通してお世話になった奥尻町教育委員会事務局学芸員の稲垣森太さん、立命館大学文学部の村中亮夫先生、学生を引率下さった手塚先生、ご助言くださった小樽市総合博物館学芸員の蟬塚さん、急遽参加となった私を優しく受け入れてくれた研修メンバーの先輩たちに深く感謝を申し上げます。

奥尻研修を通して

人文学部日本文化学科２年　岩崎　彩雲

１．はじめに

私は2023年８月11日から14日の４日間で奥尻研修に参加した。前年度の研修に参加していた、同じく学芸員課程を受講している中村さんが前年に参加しており、その様子を聞いていたことから参加したいと考えた。参加した目的は研修の中で実際に奥尻島で学芸員をしていらっしゃる稲垣森太さんに学芸員の仕事を学ぶことと、奥尻島での人々の暮らしや文化について島の人と関わる事でより詳しい実状を知り、調査することである。現地に訪れることで、事前の学習で学んだことを深めたいと考えた。研修を通して、初めて知ることや体験する事も多く貴重な時間であった。さらに、今回の研修は北海学園大学だけでなく、立命館大学文学部地域研究学域地理学専攻の学生12名が同じ宿泊施設を利用しており、交流の場を設けることができた。次章からは、研修について時系列順にまとめていく。

２．発掘現場と津波館へ

１日目早朝、学校に集合し皆で荷物を確認した後にバスで港に向かった。奥尻島に向かうフェリーターミナルは江差にある。港には、いくつかの船が停泊している中で、一艘の大きな船が目に入る。奥尻島へと向かうフェリーである。帰省の時期であるため、受付や乗船前の列など多くの人が集まっていた。乗船後、しばらく経ち看板に出るとうっすらと奥尻島が見え始め、研修への気持ちが高揚した。上陸すると、奥尻島のマスコットキャラクターであるうにまるくんが出迎えてくれた。夏の気温のなかで人々と写真を取る姿に感動したのを覚えている。

奥尻島ではまず、海洋センターに赴いた。海洋センターの壁には風景や祭り、行事の写真が飾られており奥尻の文化を中からの視点で見ることができたと感じる。カラー写真だけでなく白黒の写真もありお祭りや山車などがかつてどのような姿であったかを知ることができた。また、小学校や中学校のお便りも掲示してあり、小中学生の学校生活や地域との関わりについて垣間見ることもできた。特に行事については写真付きであり、子どもたちの楽しそうな姿とともに奥尻ならではの学校生活を実感した。

次に、学芸員の稲垣森太さんに発掘調査の現場で解説していただいた。数日前まで福島大学の考古学者が発掘調査を行っていたが、現在は整地されているとのことだ。作業の手順としては初めに重機を使い、その後人力で掘り進めていく。重機を使うことで効率よく作業することができるが大きく掘ってしまうが故に細かい発見を見逃す可能性もあるとのことだった。時間、予算、人数を踏まえた上での調査を考える必要があると感じた。今回訪れた発掘調査現場では、以前発見された勾玉の資料価値がどのくらいのものであるかの手がかりを探すために調査が行われたという。その勾玉に関する以前の発掘調査の十分な記録が残っておらず、その裏付けとなる情報が必要となる。しかし、現場では土器の一部が発見されたが目的との関係は薄いようだ。

その後、津波館へと向かった。津波館には1993年７月12日、北海道南西沖地震によって発生した津波の記録が残っている。入口を通り過ぎると泉谷しげる氏の寄贈したギターが置かれていた。泉谷氏が

奥尻を想って行った活動や寄贈されたものの写真、奥尻島へのメッセージなどを目にすることができる。泉谷氏が奥尻を愛していたこと、奥尻が泉谷氏に深く感謝していることが伝わってきた。そして、展示場の中に入って行くとたくさんの写真や解説が展示されている。被災前と被災後それぞれの風景を比較することで当時の被害の大きさを実感できる。展示は日の光の入り方などで工夫されていた。南西沖地震について学べるシアターでは、地震当時の奥尻の状況や地理的な条件などの映像を見ることができる。島周辺の海は浅瀬となっているため、島の西側から起きた津波は勢いを留めず西側だけでなく島全域へと広がったという。南西沖地震より前に、日本海中部地震が起こっていた。このことから、島民は避難することに意識を向けることができたそうだ。災害時素早く避難するという考えがあることの重要性を感じた。津波館には津波に関することだけでなく奥尻で出土したものも展示されている。土器や装飾品である。特に丁子頭勾玉は、北海道東北地方合わせて唯一の発見であるとして注目される位置に展示されていた。津波館には津波についての記憶を伝えるだけでなく、奥尻の魅力を伝える役割も持っている施設でもあると感じた。

この日の夕食は、北海学園大学からの研修生で焼きそばを作った。立命館大学の学生らとご飯を食べカードゲームをする中で交流を行い、北海道外の大学の話や、奥尻へ訪れた目的や研究テーマなど多くの学びを得るとともに楽しい時間を過ごした。夜には星を眺めるため外に出た。肉眼でもはっきりと星をみることができ、奥尻からの星空を記録したいとスマホで写真を撮ったが、実際にみるよりはきれいに映らなかった。実際に訪れることで見られる景色があるのだと思った。

写真１　うにまるくん

写真２　　発掘調査地点

写真３　津波館内　「青苗地区」の状況写真

３．稲穂ふれあいセンターへ、青苗町内会祭り

２日目には、稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室で研修を行った。その途中で賽の河原へと立ち寄った。賽の河原ではたくさんの積まれた石が海岸に向かって広がっている。石とともに地蔵もたくさん供えられている。他に奥尻に訪れていた人々とも出会った。皆、積まれた石の多さに驚くとともに精錬されたような雰囲気に見入っていた。稲穂ふれあいセンターへは研修生４人で訪れた。そして、一人は土器の組み立て、２人が写真の整理、そして私は新聞記事のまとめ作業を行った。学芸員の稲垣さんに説明をしてもらってから作業を開始し、それぞれに集中して行った。新聞の記事はすでに用意されていたので、大きさや向きを整えてそれを順番になるよう紙に貼り、ファイリングしていく作業だった。資料をまとめる時は、まとめられた資料は誰がどのように使用するのかを考えることが重要だと感じた。時系列や流れのあるものはできるだけその流れに沿ってまとめるとわかりやすくなる。内容が前回の記事を踏まえていたり、シリーズになっていることもあるので、資料を閲覧する人が全体を見る場合でも、特定部分を探している場合でも、読み取りやすくなる。もし足りていない個所や無くなっていると考えられる箇所があれば、発見した時点でメモに残しておくとよい。できるだけ具体的にないものを記録するので前後の情報や調べられる場合は、そこで得られた情報も追加しておくと今後の作業がスムーズに行えるのではないだろうか。自身の作業が終わったのち、写真の整理にも参加した。写真は何が写されているのかを観察しながら同じ場面と考えられるものをまとめていった。時々、２枚以上がくっついてしまっていたり、輪ゴムの跡が残っていることがあり、一般の方が保管していたものは少し手入れが必要になるかもしれないとの事だった。博物館のように長くよい状態で保存することが目的とされていなかったり、その手段を知らないことも多いので、できるだけ早めの対処をしなければならないと考える。この作業を経験したことでやることがたくさんある中で優先順位をつけ、丁寧な作業が求められる学芸員の仕事は、様々な能力を向上させなければならないと感じた。

写真４　稲穂ふれあいセンター

写真５　まとめられた新聞記事

研修後は青苗の浜風公園で行われる青苗町内会のお祭りへと向かった。その道中、初松前の慰霊碑の周囲でキャンドルを灯す男性と出会った。この日は、南西沖地震の一か月の月命日であるとともに、お盆であったことからキャンドルを灯したのだと考えられる。男性の話によると、毎年行っているものではないそうだ。この日この時、男性の訪れるタイミングに出会えたことは偶然であるが、見ることができてよかったと感じた。すべてのキャンドルを灯し、手を合わせる様子は被災者への思いが感じられる

ようであった。

青苗の浜風公園は、いくつかの避難路の下に位置している。避難路に興味があったので避難路を上ってみた。ゆっくり歩く、全力で走ると試して見たが全体的に傾斜が急であると感じた。幅広な段差からは駆け上がる想定がされているようだ。避難路の一つは上った先は、現在では草むらとなっており、さらにその先が住居となっていた。上で観察をしていると、お祭りの恵比須山の山車が公園に入って行く様子を記録することができた。山車の一部に太鼓が乗っており子供などが叩いているのが見えた。お祭りでは食べ物とビールが売られていた。カラオケ大会ではさまざまな人が、歌っていた。その後の盆踊りでは奥尻の民謡のような曲が流れていた。皆が音楽に乗って踊ろうとしていたが、踊りを正確に覚えている人は少なかった。しかし、覚えている人を真似ながら、正確に踊れていなくてもあまり気にせずに踊っている人も多く、それを見ている人も楽しんでいるように見えた。

写真６　初松前の慰霊碑　　写真７　恵比須山の山車

４．３日目

この日は同じく研修に来ている中村さんと、松江と青苗の避難路を巡った。研修以前の学習で奥尻の避難路について興味があったためである。避難路は南西沖地震の津波の被害を受けたことから作られたものであるが、新聞記事によると現実的には高齢者が利用しようすることは難しく実用的でないとのことだった。実際、体験してみて分かったが、避難路は急いで逃げる事を考えてなのか、ほとんどがゆっくり上るのでさえ息が切れるような急な傾斜だった。私が 20 歳女性健康体であり運動を苦手としていないことを踏まえれば、高齢な方や体力の十分でない子どもが上ることは難しいだろう。津波が迫っている時に逃げている途中で動けなくなることは非常に良くない。また、手すりや足場の一部が壊れているものも多く、たどり着くまでの道が整備されていない避難路もあった。急いで避難をはじめ、裸足であったり、肌が出ている場合には怪我をするリスクが高い。さらに、上った先に草が生い茂っており、人のいるスペースがないという避難路もあった。そもそも、避難路の存在自体が強調されていないことから利用することは今では想定されていないのではないかと感じた。複数人が同時にこの避難路を登るのは、津波から逃げるとしても怪我のリスクが高いと考えられる。ただ、2 日目に訪れた浜風公園の上

の避難路は、この日訪れた避難路よりも少し手入れされているように見えた。そこは上が住居で下も公園があるために、避難路だけでなく日常の道としてもよく利用されているからなのかもしれない。使用する人がいればニーズに応じて道が整えられるだろう。しかし、避難路とは避難に使用することが主な目的であり、それを使用していないのは　災害が起こっていないことでもある。そのことから避難路は作る段階で、誰がどのように使用するかだけなく、管理や整備をしていく前提でないと本当に必要な時に使用できない状況ができてしまうと感じた。

写真８　避難路①

写真９　避難路②

点在している避難路を一つ一つ廻った後、青苗へと向かうためにバスに乗った。とても暑い日であったが車内は冷房が効いていてとても快適であった。運転手のかたも丁寧で安全運転であったので、奥尻の景色を見ながら移動することができた。青苗では先生方や他の研修生と合流し、青苗言代主神社で神事に参加させていただいた。地元の方が集まる中で参加させていただけたことはとても貴重であると感じた。快く受け入れてくださった皆さんの優しさに触れた場面である。神事は厳かな空気の中で行われた。神様へのお祈りのようなことも体験させていただいた。手順を知らないままであったが先に行った方が手本となりぎこちなくではあるが、上手く出来たのではないだろうか。

その後、立命館大学大学院文学研究科地理学専修の大学院生でTAもされている王子豪さんと北海学園大学から道中も一緒だった小樽市総合博物館学芸員の蟬塚咲衣さんの発表をお聞きした。王さんはエスニックシティを中心に研究していらっしゃるとのことだった。中国からの留学生であり、日本の街や文化と中国との比較を交えながら発表してくださった。具体的には大阪の街を研究しており、大阪に住む中国人の人口の変化について教えていただいた。コロナによって増加率は下がっているが人口自体は増加しているそうだ。職業別にみると日本で飲食店を営むことが多いとのことだ。

蟬塚さんは、奥尻のお祭りの研究をしているそうだ。奥尻は全国の消滅可能性のある自治体の一つであるとのことだ。お祭り関連の調査で、津波の被害を受けたのちの復興について文化よりも生活を優先していたとのことだ。写真や地図、奥尻で暮らす人々への聞き取り調査で明確にネットでは探すことができない情報も多く、実際に訪れることでしか得られないことがあるとあらためて学んだ。何も意識し

ていなければ資料というものは残ることが難しい。記録を残したいという意識があることで資料はつくられ守られる。

2日目の夕食はお祭りでたべさせていただいたが、3日目は王さん主体で中華料理を作った。王さんの教えてくれる餃子の作り方や味付けのこだわりを聞けてとても楽しかった。ここでも立命館大学の方々と交流ができた。自分とはまた違った視点での奥尻について聞くことができ、北海道出身ではない方の北海道についての思いを知ることができたと思う。

６．おわりに

もともとはもう1日滞在する予定であったが、台風接近の影響を受けてフェリーが欠航することを考慮し、4日目で帰宅することとなった。非常に残念ではあるが、天気や海の波を考えての判断であったためその状況はとても勉強になった。

研修を通して、すべてがとても貴重な経験となった。奥尻島は初めて訪れる場所であり知らないことばかりであったので、奥尻の暮らしや文化がよりリアルに新鮮に感じることができた。学芸員の稲垣さんの仕事について質問、体験できたことで一人で担っている仕事の多さや、幅の広さを感じた。さらに、奥尻島で生活した数日間で島民のかたの優しさに触れることが多くあった。話かけていただけたことで会話が広がっていく場面もあり本当に感謝している。また、今回の研修では宿泊施設が立命館大学の学生と一緒であったこともよい学びの機会となった。調査や研修の部分で行動を共にすることはあまりなかったが、普段では関わることのない他の大学の方と話すことで新たな視点に出会えた気がする。

最後になりますが、奥尻町教育委員会、学芸員の稲垣さん、村中亮夫先生をはじめとする立命館大学の皆さん、引率をしてくださった手塚先生、宿泊や食事など支えてくださった多くの方々に深く感謝申し上げます。

奥尻島の避難路調査

人文学部日本文化学科 2 年　中村美月

１．はじめに

私は 2023 年 8 月 11 日から 14 日までの 4 日間の日程で奥尻島研修に参加した。私が研修に参加した目的は、2022 年の奥尻島研修に参加した際に見かけた青苗にある津波の避難路が気になっていたからである。写真 1、写真 2 が気になった避難路である。2022 年奥尻島研修中に奥尻島津波館を訪れた時に、1993 年の北海道南西沖地震で発生した津波の後に、島内にたくさんの避難路が設けられたことは耳にしていたが、実際に避難路を発見したのはこの時が初めてであった。後日調べたところ、奥尻町地域防災計画[1]によると、町は地震後、島内に住民が高台へ避難するための階段やスロープなど、避難路を 42 カ所に整備し、足腰の弱い高齢者を高台に運ぶためのリヤカーが整備されているという。図 1 が、避難路位置図である。集落の近くや民家の近くに多く設置されており、住民がすぐに逃げられるように設置されていることがわかる。今回は、研修の日程の都合上、松江と青苗の避難路を中心に調査をおこなった。本調査は、私と同行してくれた岩崎さんが実際に登った箇所も多いため、登った感想、わかったこと、気になった点をまとめる。

写真 1　避難路の看板と外観

写真 2　避難路のスロープ

[1] 奥尻町防災会議. “奥尻町地域防災計画”.奥尻町. 2023 年 8 月 18 日. https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/detail/00004729.html, 参照日 2024 年 2 月 4 日

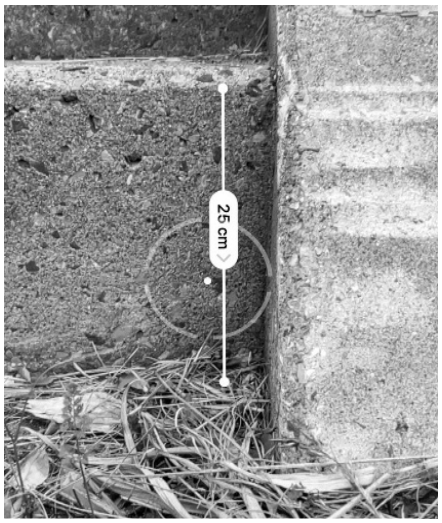


写真 3　避難路前の階段の高さ

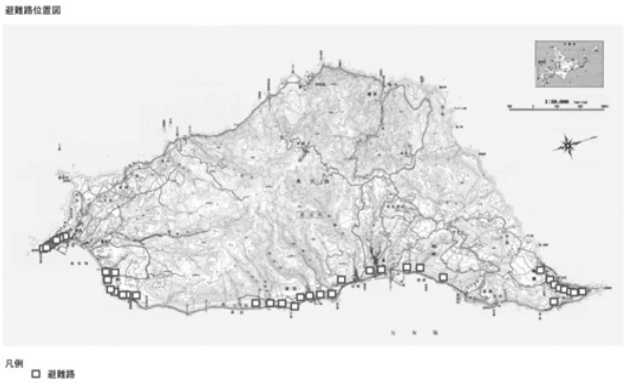


図 1 奥尻島避難路位置図

２．調査方法

今回調査をおこなったのは、青苗 7 つ、松江 5 つの避難路である。この避難路は北海道南西沖地震後の復興時にできたもので、当時は津波により多くの被害を被ったため、その対策の一環として建設された。しかし、建設から 20 年ほど経っている為、一部は老朽化が進んでいる。そのため今回は、老朽化も加味して、使用に問題がない避難路に対象を絞り登った。避難路は、登りやすさと良い点、危険な点を中心に調査をおこなった。登りやすさについては運動強度[2]で測定することとした。これは運動時の負荷やきつさに相当するもので、本来は効果的に運動やトレーニングをおこなう際に用いられるものである。今回はこれを転用して、避難路の登りやすさや高齢者の場合どのようなことが想定されるかを考えることとした。

実際に登ったのは、大学 2 年生の女性 2 人で、頂上までの目標時間を 5 分[3]とし、頂上に着いたときに運動強度を測定する。運動強度は、メッツ(METs)[4]と自覚的運動強度 RPE[5]（rate of perceived exertion）を用いて測定する。

---

[2] 健康長寿ネット,“運動強度とは”.健康長寿ネット. 2023 年 6 月 1 日. https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/shintai-training/undou-kyoudo.html,参照日 2024 年 2 月 8 日

[3] 北海道新聞,“＜南西沖地震３０年　いま奥尻は＞（２）島の半数が６０歳以上　足元で揺らぐ避難策”.北海道新聞.2023 年 6 月 26 日. https://www.hokkaido-np.co.jp/article/867604/,参照日 2024 年 2 月 4 日

[4] 中江悟司，田中茂穂，宮地元彦.“改訂版『身体活動のメッツ(MET s)表』”. 国立健康・栄養研究所.2012 年 4 月 11 日. https://www.nibiohn.go.jp/files/2011mets.pdf,参照日 2024 年 2 月 4 日

[5] 健康長寿ネット,“心拍数と運動強度”.健康長寿ネット. 2023 年 7 月 12 日. https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/undou-kiso/shinpaku.html, 参照日 2024 年 2 月 8 日

図 2 がメッツ(METs)表[6]である。メッツ(METs)とは、運動や身体活動の強度の単位で、静かに座っている状態を 1 とした時と比較して何倍のエネルギーを消費するかで活動の強度示すもので、図 2 のように様々な活動の強度が明らかになっている。しかし、避難路は形状や設置場所によって大きく差があるため、図 2 を参考にして主観的に値を出していくこととする。図 3 が自覚的運動強度 RPE 対応表[7]である。自覚的運動強度(RPE)とは、運動時の主観的負担度を数字で表したもので、Borg スケールが代表的である。Borg スケールは，数字を 10 倍するとほぼ心拍数になるように工夫されているもので、運動状況に合わせて簡単に測定のできる方法である。一方で、環境温度などの外的要因によって影響されやすいという特徴も持つが、災害がいつ起こるかは想定がつかないため、今回は 8 月上旬の昼に炎天下の中での避難を想定して測定することとする。

- 身体活動のメッツ(METs)表 -

運動活動	METs	生活活動
	1	安静に座っている状態(1) デスクワーク(1.5)
ヨガ・ストレッチ(2.5)	2	料理、洗濯(2.0)
ウォーキング(3.5) 軽い筋トレ(3.5)	3	犬の散歩(3.0) 掃除機かけ(3.3) 風呂掃除(3.5)
水中ウォーキング(4.5)	4	自転車(4.0) ゆっくり階段上る(4.0) 通勤や通学(4.0)
かなり速いウォーキング(5.0)	5	動物と活発に遊ぶ(5.3) 子どもと活発に遊ぶ(5.8)
山登り(6.5)	6	
ジョギング(7.0)	7	
サイクリング(8.0)	8	階段を速く上る(8.8)
なわとび(12.3)	12	

国立健康・栄養研究所・改訂版「身体活動のメッツ（METs）表」より作図

図 2　身体活動のメッツ表

自覚運動強度(RPE)の目安

標示	自覚度	強度(%)	心拍数(拍/分)
20	もうだめ	100.0	200
19	非常にきつい	92.9	
18		85.8	180
17	かなりきつい	78.6	
16		71.5	160
15	きつい	64.3	
14		57.2	140
13	ややきつい	50.0	
12		42.9	120
11	楽に感じる	35.7	
10		28.6	100
9	かなり楽に感じる	21.4	
8		14.3	80
7	非常に楽に感じる	7.1	
6	(安静)	0.0	60

図 3　自覚的運動強度 RPE

---

[6] スポーツ庁.“「運動強度（METs)」で見る、効果的な身体活動は？”.スポーツ庁 Wed 広報マガジン DEPORTARE. 2020 年 10 月 23 日.https://sports.go.jp/tag/life/mets.html, 参照日 2024 年 2 月 4 日

[7] 前掲注(2) 健康長寿ネット,“運動強度とは”.健康長寿ネット. 2023 年 6 月 1 日.https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/shintai-training/undou-kyoudo.html,参照日 2024 年 2 月 8 日

３．調査結果

松江避難路

松江の避難は、全体的に急な丘に設置されていることが多く、目標時間である５分で頂上に行くにはMETｓ６くらいかかり、RPEはきついに値した。高齢になれば、頂上まで登るのはとても困難であると考えられる。この避難階段は手すりがついているが、この手すりが微妙に高く扱いにくく、2023年６月26日の北海道新聞では、実際に松江に住む増田さんが自宅近くの避難階段を使って高台まで行くのに、ここ数年は避難訓練でも途中までしか行けないとおっしゃっている。この新聞を事前に読んでから奥尻島研修に参加していたため、私は実際に避難路を目にした際に階段の斜度には驚いた。増田さんが登ったと考えられる避難路は図４－３の避難路である。以下の写真はすべて３避難路で撮影しており、写真４、６が、特に斜度がわかる写真になっている。避難階段は一段の高さが普通の階段より少し低く、足があげやすくなっており、サクサクと登ることができた。さらに、蓄光板もついていたため、夜でも足元が見やすいと思われる。しかし、急斜面に設置されているため上に行けば行くほど登るのが苦しくなっていった。手すりの部分や足元に、錆や鉄板の浮きが出ており、危険な部分も多々ある。階段以外にも危険な場所があり、写真５が避難路前にある側溝についた網だが、これがグラグラしており、急いでいるときであれば踏み抜いてしまいそうであった。また、たとえ頂上まで行っても、写真７のように草が生い茂った状

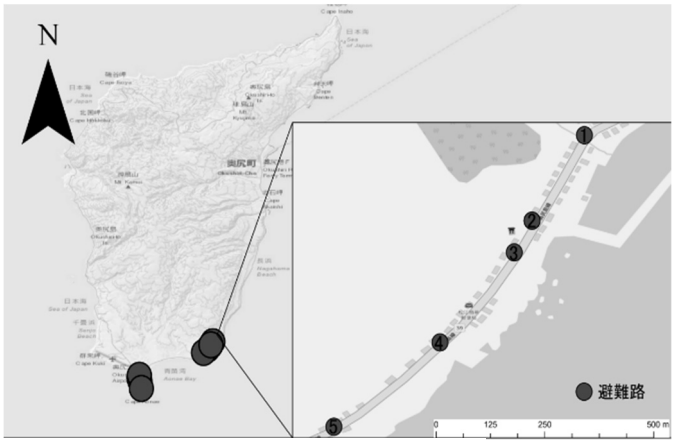


図４　松江の避難路

写真４　避難路の階段

写真５　避難路前

態になっており、他の避難路を使った人たちと合流したり、もっと上の方に逃げたりすることがしにくい状態になっており、早急な草刈りが必要になると考えられる。また、津波からの避難の際は、手荷物を持っている時間はないと考えられるので、頂上に避難所まで進める道を作るか、数日分の食糧や防寒具などを設置しておくと、よいと考えられる。

実際に避難した際に孤立することや、避難時の怪我を最小限にするためにも、住民の方には避難訓練に積極的に参加してもらい、町は避難路の道に危険がないかの点検、避難後にどうするのかの段取りを取った準備をすれば、災害があった際に被害を最小限にできるのではないかと考える。

写真 6　避難路看板

写真 8　避難路階段

写真 7　避難路の頂上

青苗避難路

青苗では、主にドーム型の避難路を中心に調査をおこなった。

これは、2022 年の奥尻島研修に参加した際に見かけた青苗にある避難路とおなじもので、昨年は都合の関係で、入口を覗いて終わったが今年は実際に登って、調査をおこなった。まず、このドーム型の避難路は北海道南西沖地震の際にも波が到達しなかったほどの高台に向けて、ジグザグに進めるように作られている。そして、このドーム型を主線に派遣した限りで 4 本の分岐避難路が合流する作りになっている。分岐の避難路は、避難路看板を目印に探した。はじめに、青苗の避難路を調査しようとした際に、図 1 の地図を頼りに調査をおこなったが、青苗は密集して避難路が用意されている為、どこにあるのかよくわからなかった。しかし、実際に青苗に行ってみると、避難路には写真 6 や写真 12 のような避難路と大きく書かれた看板が立っていたため、非常に見つけやすかった。この見つけやすさというのは、実際の非常時の際にも役立つと考えられる。しかし、夜になると、避難路の近くに街灯が少ないことも影響して、なかなか見つけられなかったため、可能であれば、避難路と看板の両方に蓄光板を設置することが望ましい。青苗の避難路は調査に行った際に町民が日常生活で使用しているのを見かけており、頂上の草むらも道ができるようにきれいに刈られており、腐食などもあまり見られなかった。避難路が急こう配ではなかったため、避難の目標時間である 5 分で頂上に行くための運動強度は MET s 4 くらいで、RPE は 11 ほどで楽に登ることができ、頂上に行ってもまだ走って逃げられるくらいの余裕があった。しかし、高齢になると、少しの坂でも上るのがつらいことが想定されるため、手すりの設置が重要になると考えられる。また、ドーム型の避難路は、屋根のおかげで全天候に対応できる避難路になっており、雨の日でも風の日でも雪の日でも安全に避難することができる。さらに、中はスロープになっているため、階段を踏み外す心配もなく、場合によっては車いすでの避難もできることが予想される。しかし、せっかくスロープでできているにも関わらず、ドーム型の避難路に行くまでの道が、階段になっている。写真 10、11、12、13 がその写真になっており、どれも、途中から階段になってしまい、車いすでの避難は困難になることが予想される。また、この階段の多くが石でできているが、どれも階段の間隔がまちまちで一段登るのに 2 歩必要なものもありテンポよく登ることが難しかった。避難時は、走って逃げることが予想されるため、階段の幅で登るテンポを崩されると転倒のリスクが出るのではないだろうか。また、この階段が、写真 3 のように一段が高い場合もあり、階段部分には改善の余地があると考えられる。

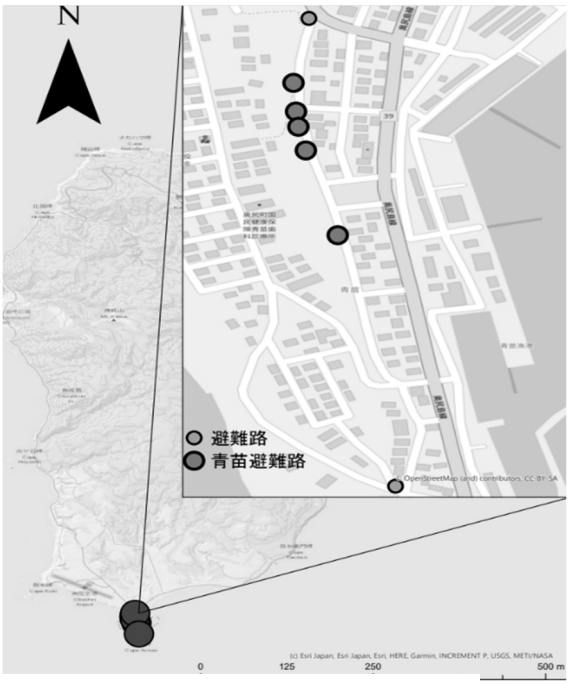


図 5　青苗の避難路

青苗には、ドーム型の避難路の他に、2 本の車道避難路があり、図 4 における両端のポイント付近にある。どちらも車での避難には問題がないものになっており、北にある避難路は歩道もついているため、徒歩での避難も可能になっている。だが、昨年に奥尻島津波館を訪れた際に、北海道南西沖地震のときに車で避難した人は、渋滞にはまって、波に攫われてしまったと聞いている。青苗の高台に避難するための車道の避難路は 2 本のみになる為、現在でも非常時に大勢が車での避難をすれば、渋滞することが予想される。そのため、実際に非常時に避難する際は、徒歩でドーム型の避難路に向かって避難した方がよいと考えられる。　北海道南西沖地震の際に、津波で大きな被害を受けたのは青苗であったため、どこからでも高台に逃げられるように、たくさん避難路を準備しているのはとても重要な事であると考えられる。しかし、肝心の避難路に登るまでの階段にリスクが潜んでおり、夜間には街灯が少ないため、特に分岐した避難路は蓄光板もないため、足元がよく見えず、走って避難するのは難しいと考えられる。これらには早急な解決が求められる。また、車道の避難路が 2 本あり、津波の際は車での避難をオススメできないが、避難の際に車での避難は避けなければならないことを知っている方は、町民にどれだけいるのかも気になった。高齢になれば、階段での避難は、体力的に厳しいと判断し、車での避難を考える人が増えるのではないだろうか。奥尻島では、高齢化も進んでいる為、高齢の方でも徒歩で避難しやすい避難路の整備が必要になると考えられる。

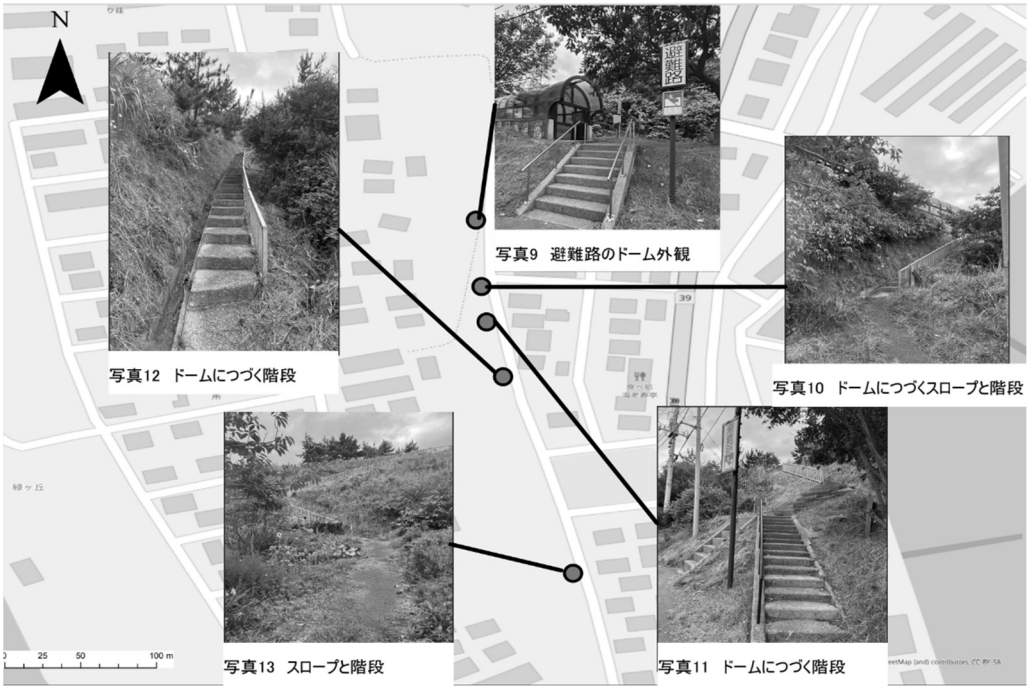


図 6　青苗の避難路と写真

4．まとめ

今回は 2022 年の奥尻島研修に参加した際に見かけた青苗にある津波の避難路が気になっていたため、松江と青苗の避難路を中心に調査をおこなったが、地域によって避難路の利用のしやすさには差があると感じた。松江の避難路はどれも急こう配にできており、階段も急であることが多かったが、青苗は急斜面の避難路があるにもかかわらず、なるべく

道が平たんになるように、ジグザグに進めるようにできており、実際に避難する際に避難がしやすいようになっていた。松江の階段は腐食も目立っていたため、補修工事をおこなう際に、階段の段数を増やしてもっと登りやすいように改良工事ができるとよいと感じた。しかし、大規模工事になることが想定されるため、まずは手すりの補修工事や蓄光板の設置からおこなって、いまの階段をより安全に使えるようにしていくことが重要だと考えられる。今回の調査は、調査方法も主観的で個人的に避難路の現状について把握しただけであったため、次の機会があれば、心拍数を計ったり、奥尻町の防災課の方に話を伺ったり、町民からも避難訓練について詳しく聞きたりして、客観性を高めたいと考えている。

５．おわりに

今回の研修は、避難路の調査だけではなく、稲穂ふれあい研修センターで奥尻町教育委員会事務局の学芸員である稲垣森太さんのご指導の下で土器の修復をおこなったり、発掘調査の跡地にて解説を頂いたり、奥尻島津波館の解説をして頂いたりと、貴重な体験をたくさんさせていただき、多くの事を学んだ。そして、今年は立命館大学も同じ時期に研修に来ていため、たくさんの教員や学生との出会いがあり、研究内容の交換もできて、学びの多い機会となった。

このような機会を下さった稲垣森太さん、私たち研修生を受け入れてくださった教育委員会の皆様、立命館大学の村中亮夫先生をはじめとする皆様、引率の手塚先生に深く感謝申し上げます。

６．追記

2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震だが、この時日本海側に面している多くの地域に津波警報が発令された。翌日の新聞[8]によると、奥尻港に 50 ㎝もの津波が来たという。しかし、どのような被害があったのか、避難は行われたのかについて調べたが、定かな情報は出てこなかった。次回奥尻島を訪れる機会があれば、このことについても聞き取り調査を行いたいと考えている。

令和 6 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震により、犠牲となられた方々におくやみを申し上げるとともに、被災されたすべての方々に心よりお見舞い申し上げます。また、被災地域の皆様の安全の確保、そして 1 日も早い復旧・復興を心よりお祈りいたします。

---

[8] 北海道新聞,“ 能登半島地震で道南に津波到達　元日避難、不安な一夜　瀬棚港６０センチ、奥尻港５０センチ”.北海道新聞. .2024 年 1 月 2 日.https://www.hokkaido-np.co.jp/article/959409/, 参照日 2024 年 2 月 4 日

奥尻島における例祭の経年調査を通じた博物館展示の実践

文学研究科博士（後期）課程・小樽市総合博物館学芸員　蟬塚　咲衣

１．はじめに

本学学芸員課程では、2018 年より奥尻島の祭礼に関する調査を行ってきた。2023 年現在、島内には 12 の神社があり、かつてはそのうち 9 の神社で、神輿渡御（子ども神輿を含む）や、地区ごとに個性的な装飾を施した山車巡行が行われていた。しかし、我々が調査を実施した 2018 年から 2023 年までの 6 年間のなかで、神輿渡御や山車巡行が行われたのは、青苗言代主神社と澳津神社の 2 社のみである。この 2 社は、島内でも人口が多い地区に位置するため、渡御や巡行が近年まで存続できていると考えられる。2020 年初頭からの新型コロナウイルス感染症の影響で、両社ともに 2022 年までは神事のみの実施となったが、その期間も青苗言代主神社ではクラウドファンディング、澳津神社では御神燈の新調といった活動が行われ、2023 年の動向が注目されていた（蟬塚 2023）。2023 年は、8 月 11～15 日に、青苗言代主神社と澳津神社の関係者を対象に聞き取り調査を行った。

また、2023 年の春から夏にかけて、小樽市総合博物館では、運河館トピック展「小樽の四ヶ散米行列―まちゆく歩みに想いをのせて」を開催し、筆者が企画を担当した。四ヶ散米行列（しかさごぎょうれつ）は、松前神楽の演目の一つである四ヶ散米舞（しかさごまい）が行列化した民俗芸能で、小樽の潮見ヶ岡神社で約 30 年にわたって伝承されており、その伝承元は奥尻の澳津神社であったことが明らかになっている（蟬塚 2022）。本展示の企画にあたり、小樽の四ヶ散米行列に関する調査を進めた結果、伝承元である奥尻との相違が明らかになった。

本稿では、まず青苗言代主神社の例祭について、2023 年の動向を記す。次に、澳津神社の関係者への継続的な聞き取り調査の成果が、小樽市総合博物館での展示作成においてどのような役割を担ったかについて考察する。

２．2023 年の青苗言代主神社例祭の動向

青苗言代主神社例祭は、毎年 8 月 12～14 日に日付を固定して行われている。青苗言代主神社氏子総代が担当する猿田彦（天狗）を含む行列を先頭に、青苗みこし保存会が管理する神輿 1 基、恵比須山協賛会が管理する恵比須山（山車）1 台が連なり、字青苗・字富岡・字米岡の範囲を巡行する。しかし、巡行を行うか否かの決定権を有する氏子総代の人数不足を理由に、2019 年は浜風公園で恵比須山のみでの「ねまり（地区を練り歩かずに神輿や山車を特定の場所に設置して、その周辺で飲食や催しを行うこと）」となったことから、2018 年 8 月 13～14 日を最後にこのような巡行は実施されていない（蟬塚 2023）。

2020 年から 2022 年までの 3 年間は、コロナ禍の影響で、神社社殿内で神事のみが行われた。特筆すべき活動として、2022 年 5 月 12 日から同年 7 月 30 日までの期間で行われ

た、クラウドファンディングサイト「CAMPFIRE」を利用したクラウドファンディングがある。老朽化した社務所の解体および建設と、神社の修繕を目的に、All-in 方式（目標金額を達成できなくても、集まった資金で計画を実行しリターンを行う）で実施し、目標金額 9,800,000 円のところ、1,373,000 円（目標金額の約 14%）の支援が集まった[1)]。クラウドファンディングのプロジェクトオーナーを務める、青苗言代主神社総代長による活動報告の件数は、約 1 年前の 2023 年 2 月 28 日 15 時時点では 2,083 件だったが、2024 年 3 月 4 日時点では 4,064 件で、資金を集める期間が終了してもペースをほとんど緩めずに近況を発信し続けている。これらの投稿から、新たな案内板や簡易水洗トイレの設置、御朱印の種類の増加といった活動の過程がわかり、一種のアーカイブとしての役割を担っている。2024 年 1 月 19 日の投稿では、青苗言代主神社境内に保管されている神輿とともに、「今年こそは 8 月のお祭りに復活できるかと思います」[2)]と記されていることから、直近で最後に神輿渡御が行われた 2018 年以来､6 年ぶりの渡御に向けての意気込みも伺える。

2023 年 8 月 12 日 13 時から、神社の飾りつけを住民の方々と一緒に行ったあと、支援を受けて再建された社務所を視察した（写真 1)。この社務所は、全国から集まった 210 万円の支援金で、島内の建設会社から中古のプレハブを購入し[3)]、2023 年 6 月 14 日にクレーンを使って神社境内に設置[4)]、同年 7 月 27 日頃に住民有志がペンキを塗ったという[5)]。社務所の中にはカーペットが敷かれ、ソファやテーブル、エアコンが整備されている。それ以前の社務所は、北海道南西沖地震の仮設住宅を利用したもので、建物のゆがみでドアの建て付けが悪く、室内の天井も剥がれかけていた（写真 2)。新旧を比較すると、大きさは 18 坪から 12 坪となりコンパクトになったが[6)]、見違えるような建物になった。

2023 年 8 月 12 日 16 時から青苗言代主神社社殿内で宵宮が行われ、14 名（宮司女性 1 名、地元男性 7 名、立命館大学学生男性 4 名、同大学教員男性 1 名、筆者）が参加した。翌日の 8 月 13 日 11 時から行われた本祭には、16 名（宮司女性 1 名、地元男性 8 名、地元女性 2 名、北海学園大学学生男性 1 名・女性 3 名、同大学教員男性 1 名、筆者）が参加した。本祭で総代長は､「クラウドファンディングで社務所を再建した。屋根に穴が開いて倒れる寸前だったが、全国の人から支援を得た」[7)]と語り、着実な進展を参加者で共有した。近年は暗い話題が続いていた青苗言代主神社にとって、大変喜ばしい出来事である。

神社設備の更新が進められる一方で、2023 年の渡御および巡行は中止となった。理由

写真 1　再建された社務所

写真 2　北海道南西沖地震の仮設住宅を利用したかつての社務所（2021 年撮影）

は、行列を構成する役員の人手不足と、神輿の担ぎ手不足だという[8]。しかし、浜風公園での夏祭り（盆踊り）は、4 年ぶりに再開された。夏祭りに恵比須山が華を添えるのは、震災後に公園ができてから恒例となっている（蟬塚 2020）。2023 年 8 月 12 日 14 時 50 分頃、飾り付けされた恵比須山が地元男性 13 名によって青苗地区の高台にある収納庫から浜風公園まで運ばれた（写真 3）。浜風公園には 18 時前から住民らが集まり、19 時 8 分頃から 19 時 35 分頃までカラオケ大会、19 時 45 分頃から 20 時 5 分頃まで盆踊りが行われた。

写真 3　浜風公園に向かう恵比須山

調査の都合上、筆者は夏祭りを最後まで見届けることはできなかったが、調査に同行した伊藤赳氏が撮影した動画によると、21 時ごろに恵比須山の太鼓と笛が奏でられたという。この祭り囃子は、恵比須山の巡行中に奏でられるもので、子どもたちは事前に練習をして例祭に臨む（蟬塚 2020）。しかし、恵比須山の関係者によると、「今年も何の練習もしていない」[9]ということから、演奏は 2019 年以前の楽器経験者によるものと考えられる。また、恵比須山が巡行をする際に、ニシン漁の掛け声であるハオイを掛けるという慣習があるが、浜風公園での披露はなかったようだ。

2023 年の動向に関する所感として、2 点述べる。1 点目は、かつての社務所内にあった資料の行方である。室津島神社での地鎮祭や拝殿の様子が撮影された写真や、2014 年と 2018 年の例祭の役員分担表が貼られていたため、保管の有無を確認したい。2 点目は、災害遺構としての役割である。1993 年の北海道南西沖地震当時は、災害遺構を残すという機運は低く、奥尻島には被害を伝える遺構がほとんどないため、次世代への伝承の困難性が指摘されている[10]。ただし、東日本大震災の被害を受けた千葉県旭市では、実際に生活した仮設住宅を震災遺構として捉える動きがある[11]。遺構を保存するには金銭的なハードルがあるが、社務所が取り壊される前に災害遺構として認識し、記録を取ったものを博物館施設などで展示するという活用方法があったのではないかと悔やまれる。

３．四ヶ散米行列が繋ぐ奥尻と小樽

澳津神社例祭は、毎年 8 月 14～16 日に日付を固定して行われている。神威山巡行実行委員会が担当する神威山（山車）が、字球浦・字仏沢・字奥尻の範囲を巡行する。かつては神輿渡御も行われていたが、担ぎ手不足のため、2002 年から 2010 年の間には行われなくなった[12]。神輿渡御が廃止されてからは、神威山のみが地域を巡行している。2018 年は悪天候のため 2 日目の途中で巡行が中止となり、2019 年は住民の不幸と台風を理由に日程とルートが短縮されるなど、臨機応変な対応を行いながらコロナ禍直前まで行われていたが、2020～2022 年は神事のみ執り行われ、巡行は実施されていない。

2023 年の奥尻島調査は、台風の影響で島を離れられなくなることを危惧し、調査日程を短縮したため、澳津神社例祭の神事の場に赴くことはできなかった。澳津神社の関係者によると、2023 年も巡行は行われず、神事のみの実施になったという。巡行中止の理由は人手不足で、「神威山を出せば楽しくて人が集まることもわかっているけれど、それまでが大変。準備をする人が足りない」[13]という。また、「コロナがなければ、神威山は惰性で出ていたと思う。やれないとさらに人がいなくなってしまう」[14]という声もある。奥尻のように、人口減少や若者不足の地域では、数年の途絶が祭礼の存続を左右することを示している。

写真 4　展示の様子

担い手不足に直面している澳津神社例祭で、かつて行われていた民俗芸能が、四ヶ散米行列[15]である。奥尻の四ヶ散米行列は、奥尻島で宮司を務めていた常磐井武秀氏の指導によって、1962 年頃から始められたとされるが、奥尻町で学芸員を務める稲垣森太氏によると、奥尻では 2001 年頃を最後に行われていない。2019 年 8 月には、寿都松前神楽保存会が松前神楽を奉奏するために奥尻島を訪れ、その際に四ヶ散米行列が約 20 年ぶりに実施された。しかし、それもコロナ禍で途切れており、再び実現するかは不明である。

この四ヶ散米行列について、小樽市総合博物館運河館で、トピック展「小樽の四ヶ散米行列―まちゆく歩みに想いをのせて（2023 年 4 月 29 日～同年 9 月 9 日）」を開催した（写真 4）。展示資料は、小樽の潮見ヶ岡神社から借用した装束や採物、写真、動画などで、さらに奥尻町教育委員会にご協力いただき、奥尻の四ヶ散米行列を写した貴重な古写真も使用させていただいた。解説文には、奥尻での調査成果を用いた。まず、小樽で四ヶ散米行列が始められたきっかけは、潮見ヶ岡神社の神職が奥尻の澳津神社例祭を手伝いに行き、そこで奥尻の四ヶ散米行列を見たことがきっかけというエピソードを紹介した。この情報について、澳津神社関係者からは、「小樽の宮司が、平成元年頃に手伝いに来ていた」[16]という話は聞くことができた。しかし奥尻では、その後の展開について知っている人には出会えず、2021 年 10 月に潮見ヶ岡神社で聞き取り調査を行った際に、判明したものである。また、奥尻の四ヶ散米行列が 1962 年頃に始められたと示すことができたのも、調査を重ねるなかで四ヶ散米行列に詳しい人を色々な方から教えていただき、そのなかの一人が奥尻の四ヶ散米行列の初期メンバーだったからである。一度の調査で集められる情報は限られているため、何度も足を運んで住民の方々との出会いの機会を増やすことの重要性を学んだ。

また、四ヶ散米行列の所作について、奥尻と小樽では異なる点があることが判明した。本展示の企画にあたり、潮見ヶ岡神社から 5 本の四ヶ散米行列の動画を提供いただいた。

小樽の四ヶ散米行列は、1990 年頃に始まったとされるが、1992 年には松前神楽の四ヶ散米舞の所作の一部を、四ヶ散米行列に導入している。途中で 3 人組になって刀の先を持ち合って円を作り、その円を飛び越えるような特徴的な動きは、潮見ヶ岡神社の宮司が独自に導入したものとされる。その動きが映っている動画を奥尻調査の際に澳津神社の関係者の方々に見ていただくと、「これは見たことがない。奥尻は 2 列で歩いて、踊って、剣を合わせていた」[17]や、「奥尻で 3 人組のはやっていなかった」[18]と、かつての例祭の姿を思い出していた。今後も多くの方に動画を見ていただき、各地域の特徴を明確にしていきたい。

2023 年 10 月 29 日には、当館の普及事業であるミュージアムラウンジ「北海道の四ヶ散米行列」で、道内 8 地域の四ヶ散米行列について発表した。そのなかで、2023 年 8 月の奥尻島調査の際に、澳津神社の神社関係者からいただいたコメントを紹介した。「奥尻から小樽に伝わっていたとは知らなかった。小樽の四ヶ散米行列は、切らさないで続いてほしいなぁ」[19]、「奥尻でやっていたことを引き継いでもらっていることが、ありがたいです。当時、関心を持って見てくれていた方がいたんだなぁ」[20]というものである。四ヶ散米行列は奥尻ではほとんど途絶しているが、小樽で大切に伝承されていると知ることで、住民自らが暮らす地域の文化の価値を再認識することに繋がったのではないかと考える。

４．おわりに

2023 年の奥尻調査を終えて、青苗言代主神社と澳津神社の例祭については、渡御や巡行がいずれも実施されなかった。しかし、「挫折しかけたことが何度もあったが、島外の人が関心を持ってくれるのがありがたかった」[21]という声があるように、青苗と奥尻の両地区において、島外の他地域との関わりを通じて住民が励まされたり、誇りを感じたりする場面を目の当たりにした。筆者の使命として、奥尻島の調査で得た情報を職場である小樽の展示や研究の中だけで活かすのではなく、自治体の垣根を越えて人と人とを結びつけることが求められるだろう。

小樽の博物館に勤めながらも、奥尻で成し遂げたいことは数多く残っている。筆者に多くの学びを与えてくれた奥尻島への感謝の気持ちを示すことができるよう、博物館の学芸員という立場を最大限に活かしながら、今後も地域の文化を守り伝える方法を模索していきたい。

※本稿掲載の写真については、すべて筆者撮影である。
※証言者に関する情報は、仮名／性別／年齢／職業／例祭での役割／取材年月、不明箇所については、―で記す。

注

1)「助けてください。神社存続に希望を載せ、奥尻島の伊勢神宮よりの内宮別宮月讀宮を復活」https://camp-fire.jp/projects/view/585596（2024 年 3 月 4 日閲覧）
2)「日本に一つしかない、奥尻の月讀み宮を世界に、伝えたい。（2024 年 1 月 19 日）」

https://camp-fire.jp/projects/585596/activities/543051#main（2024 年 3 月 4 日閲覧）

3)「全国の善意で社務所再建　奥尻・青苗言代主神社、ＣＦ活用」北海道新聞、2023 年 8 月 11 日、函館・渡島・桧山版朝刊 14 面.

4)「奥尻島からのお知らせ。（2023 年 6 月 14 日）」https://camp-fire.jp/projects/585596/activities/484110#main（2024 年 3 月 6 日閲覧）

5)「日本に一つしかない、奥尻の月讀み宮を世界に、伝えたい。（2023 年 7 月 27 日）」https://camp-fire.jp/projects/585596/activities/495518#main（2024 年 3 月 6 日閲覧）

6)「今の奥尻島、報告。つぶやき、（2023 年 6 月 15 日）」https://camp-fire.jp/projects/585596/activities/484431#main（2024 年 3 月 6 日閲覧）、

7）A 氏／男性／70 代／小売業／氏子総代・青苗みこし保存会／2023 年 8 月

8）注 7 に同じ。

9）B 氏／男性／―／―／山車曳き／2023 年 8 月

10)「北海道南西沖地震 30 年　奥尻島、津波被害伝承に苦悩　遺構なく住民高齢化（2023 年 7 月 6 時)」河北新報オンライン https://kahoku.news/articles/20230712khn000047.html（2024 年 3 月 7 日閲覧）

11)「旭市はいま　3・11 から 3 年半（上）仮設住宅「震災遺構」に」神奈川新聞社 https://www.kanaloco.jp/news/social/entry-51656.html（2024 年 3 月 6 日閲覧）

12）下記証言および文献より推定される。「平成 22～23 年のあたりまでは神輿が出てたと思う。車に乗っけてぐるっと回ってた（C 氏／男性／60 代／小売業／―／2021 年 10 月)」、池田貴夫（2003)「被災した民俗―北海道南西沖地震後の奥尻島における民俗事例の軌跡と文化再活性化について―」『北海道開拓記念館研究紀要』31：77-98.

13）D 氏／男性／70 代／―／氏子総代／2023 年 8 月

14）C 氏／男性／60 代／小売業／―／2023 年 8 月

15）四ヶ散米行列は伝承地域によって呼び方が異なる。奥尻では「四箇散米舞（しかさごまい)」と呼ばれることもあるが、本稿では小樽での呼称に統一する。

16）注 14 に同じ。

17）注 13 に同じ。

18）注 14 に同じ。

19）注 14 に同じ。

20）注 13 に同じ。

21）注 7 に同じ。

参考文献

・蟬塚咲衣（2020)「2019 年の青苗言代主神社例祭の現状とこれから」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』32：34-45.

・蟬塚咲衣（2022)「博物館展示における民俗芸能―北海道の四ヶ散米行列を事例に―」『年報新人文学』19：205-166.

・蟬塚咲衣（2023)「奥尻島におけるコロナ禍前後の例祭」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』35：15-20.

卒業論文執筆に向けた事前調査

経済学部地域経済学科 3 年　伊藤　赳

１．はじめに

私は、2023 年 8 月 22 日から 26 日にかけて斜里町立知床博物館にて卒業論文の執筆に向けた資料調査を行った。私は、斜里町と町外を結ぶ交通手段の変化とそれに伴う街並みの変化を卒業論文のテーマとしている。今回の調査では斜里町と町外を結ぶ交通手段の変遷と街並みの変遷を辿ること、斜里町市街地の様子を把握することを目的としており、文献調査や実際に町内を自分の足で歩くといったことが中心となった。

ダイヤの関係上、交通手段をスムーズに乗り継ぐことが難しいため、8 月 21 日に網走市で前泊をした後、斜里町に向かった。1 日目は、調査の方向性を斜里町立知床博物館学芸員の三枝大悟さんや東京農業大学教授の宇仁義和先生と相談し、2 日目は知床博物館で過去に実施された企画展の図録、斜里町史などを調査した。3 日目は斜里町立図書館にて網走市史や根室市史などを調査、4 日目は斜里町市街地を実際に歩き、文献に記載されていた場所などを訪れた。5 日目は午後 3 時頃まで斜里町商工会が発行した記念誌などの調査を行った。

また、5 日間の調査の中で博物館学芸員の仕事や博物館が抱える課題などを目にする機会もあり、こうした点においても多くのことを学んだ。

２．博物館網走監獄の見学

網走駅から知床斜里駅に向かう列車は少なく、斜里町に到着するのが夕方になってしまうことから網走で前泊をしたのだが、その際に博物館網走監獄を見学した。ここでは、博物館網走監獄を見学して感じたことを述べてみようと思う。

博物館網走監獄にはかつて網走刑務所で使用されていた建造物が移築された野外博物館である。移築保存された建造物のうち 3 件が登録文化財に、4 件は重要文化財に指定されている。北海道は冬期間の降雪など野外博物館で歴史的な建造物を保存することが難しい環境だと思われるが、博物館網走監獄に保存されている建造物群は、内外装ともに綺麗な状態が保たれており、維持管理には相当な手間をかけているのだろうと思った。

移築された建造物の多くは実際に内部を見学することも可能で、食堂などには看守や囚人の人形が配置されており、当時の刑務所の様子を非常に分かりやすく伝えると同時に、来館者の目を楽しませていた。こうした展示は文章などの説明よりも分かりやすく、来館者の興味も引くため、とてもいい展示だと思った。また、これら移築された建造物に関する解説パネルなど、メインとなる解説パネルでは、日本語、英語、韓国語など 5 か国語で

の解説がされていた。解説パネルでの５か国語の表記は地方の博物館としては、かなり充実していると感じた。

監獄歴史館には現在の網走刑務所を再現した展示などがある他、館内中央には囚人による中央道路の開削に関する映像展示がされている。当時の道路建設の様子を再現した映像は３面の大きなスクリーンに投影されており、上映時間は７分ほどであった。内容も分かりやすく、上映時間も来館者が飽きない丁度良い長さだったと思う。

写真１　脱獄を試みる囚人の人形

３．調査初日

調査１日目は、13 時ごろから調査について宇仁先生や三枝さんとご相談させていただいた。

宇仁先生によると、斜里町と町外を結ぶ交通手段は船舶から鉄道、鉄道から道路交通へと変化しており、これに伴って商業施設が集積するエリアも海沿いの「下町」から斜里駅（現在の JR 知床斜里駅）周辺の「上町」へ、「上町」から国道 334 号沿いへと変化していったという。しかし、現在は町内で買い物をする町民も減少しており、町民は網走市などの周辺都市の商業施設を利用することも多いそうだ。

写真２　斜里町立知床博物館

また、斜里へ寄港していた定期船については、「斜里町史」に記載されていると教えていただいた。しかし、宇仁先生によると、「斜里町史」は出典が不明なものが多く、論文で使用する際には「斜里町史は伝えている」程度の表現にした方が無難であり、定期船の行き先であった網走市が発行した「網走市史」の方がより正確だと教えていただいた。

「斜里町史」に出典が不明なものが多いのは、町史をまとめる際に使用した資料が現在保管されている資料と合致しないことによるもので、原因としては資料を整理した際に資料名が変更されたことで町史に使用された資料が分からなくなってしまった、役場庁舎が移転する際に資料を廃棄してしまったことなどが考えられるという。私はこの話を聞きながら、原典資料の重要性を改めて認識した。また、今回の調査を行う上で参考にした「知床博物館第３回特別展　斜里―下町の歴史散歩―」には、第３回特別展と併せて実施された座談会の一部も記録されていたが、座談会の内容をすべて記録した資料やその他の特別展

の資料の所在はわからなくなっているという。座談会等の資料が残存していれば、調査を行う上で参考になる可能性があるだけに、見つかっていないことが悔やまれる。

調査方法などの打ち合わせの後、宇仁先生と三枝さんに博物館を案内していただいた。

私が斜里町を訪れていた期間中は気温が高い日が続いていたのだが、博物館内にクーラーは設置されておらず、動物標本があることから窓を開閉することもできず、熱中症対策に数台の扇風機が稼働している状態であった。そのため館内の気温はかなり高かったように思う。予算の都合からクーラーの設置ができないものと思われるが、そうした中で展示資料を保護しつつ来館者にとって快適な環境をつくることは非常に難しいように感じた。こうしたところにも博物館を運営する中での苦労が垣間見えたように思う。

博物館一階には旧国鉄根北線の駅名標が展示されている。根北線は斜里駅と越川駅（斜里町）を結んでいた国鉄の路線だが、実はこの駅名標は来館者に見せている面の反対側に全く別の駅名が記されている。宇仁先生は、別路線で使用されていたものを根北線で再利用していた痕跡なのではないかと教えてくださった。根北線は利用者が少なく、赤字路線であったことからコスト削減のために他路線で使用しなくなったものを再利用しているということは十分に考えられると宇仁先生のお話を聞いて思った。

写真 3　根北線で使用していた駅名標

館内を案内していただいた後、資料調査に着手した。まず、斜里町に寄港していた定期船について「斜里町史」や「知床博物館第 3 回特別展　斜里―下町の歴史散歩―」、「斜里・知床の近代化遺産」、先行研究を調査した。

４．定期航路に関する調査

調査 2 日目も引き続き定期船について「斜里町史」、過去に実施された特別展の図録、先行研究の調査を行った。これら資料の調査から、定期航路が開設された年が 1901 年であること、大正 7 年に能登艀部(網走)によって斜里―網走間の航路が開設されたされたことなどが分かった。しかし、船舶の入港がなくなった時期については、網走―斜里間の鉄道開通を契機に定期船と貨物船が廃止になったとするものや、釧網線の全線開通によって斜里へ入港する船舶が完全になくなったとするものなど、資料によって異なっており、正確な時期はわからなかった。

５．定期航路と鉄路に関する調査

3 日目は斜里町立図書館で、同館の蔵書を調査した。この日は主に定期船と鉄道線に関する資料の調査を行った。

初日に宇仁先生からご教示いただいたように、「網走市史　下巻」には定期船に関する記述が多く、出典も明記されていたことから、定期船の歴史について大まかな流れをつかむことができた。また、「根室市史　下巻」にも定期船に関する記載がみられた。これらの資料によれば、定期船は逓信省や道庁の要請を受けて日本郵船などが運航していたもので、補助金も給付されていたようだ。また、斜里を発着地とした小樽-斜里線が運航されていた時期もあったそうだ。

釧網線（現在の釧網本線）についても、「網走市史　下巻」や「釧路鉄道管理局史」、「JR 釧路支社　鉄道百年の歩み」などの資料で路線の計画段階から着工、全線開通までの流れを把握することができた。これらの資料によれば、網走側は大正 13 年 11 月 15 日に網走本線の網走-北浜間、大正 14 年 11 月 10 日に北浜-斜里間が開通し、昭和 4 年 11 月 14 日には札鶴(現在の札弦)まで開通している。一方、釧路側は昭和 2 年 9 月 15 日に釧網線の釧路-標茶間が開通し、その後の 2 度の延伸によって昭和 5 年 8 月 20 日に川湯まで開通している。昭和 6 年 9 月 20 日には残りの釧網線 川湯駅から網走本線 札鶴駅の区間が開通し、全線開通となった。このときに東釧路-網走間の路線名を釧網線に改称している。

大正 14 年に網走本線の北浜―斜里間が開通した後の定期船の運航状況について、「網走市史　下巻」によれば、鉄道開通後の大正 15 年には地方の交通運輸状況に応じて西回り線の斜里への寄港は廃止された一方で、大正 15 年に近海郵船と 3 年間の契約がされた道庁補助航路の函館―網走・千島線のうち函館―網走間では斜里にも寄港していたという。

「網走市史　下巻」によれば網走－斜里間の鉄道開業後も道庁補助航路が斜里への寄港を継続していたが、なぜ鉄道完成後も斜里への寄港が継続されていたのか疑問に思った。当時は釧網線が全線開通していなかったため、道庁補助航路が釧路や根室方面と斜里を結ぶ交通手段としての役割も担っていたために継続して斜里に寄港したということも考えられるが、実際はどうなのだろうか。

６．斜里町市街地の探索

4 日目は斜里町市街地を実際に歩き、斜里町中心部の様子を把握することにした。

私はまず、斜里町市街地の南部を通過する国道 334 号と国道 244 号に向かった。国道 334 号、国道 244 号線沿いにはスーパーマーケットやドラックストア、ホームセンター、飲食店などの店舗が多く出店しており、飲食店を除くと、ほとんどがチェーン店である。各店舗には駐車場が備わっており、自動車での来店には便利そうだ。また、国道より北側には住宅地が広がっているため、場所によっては徒歩でも利用しやすいと思われる。

写真 4　国道 224 号沿いの商業施設

次に国道から知床斜里駅前方面へ向かった。国道と JR 釧網本線に挟まれた地区には、

学校や図書館、病院といった公共施設と住宅が多く立地している。

知床斜里駅前はロータリーが設けられ、きれいに整備されている。駅前通を直進すると、斜里網走通に合流するが、この通り沿いにはコンビニエンスストアや銀行、飲食店や商店、道の駅などが集積している。斜里網走通は歩道、車道ともに広く、通り沿いには比較的新しい建物が多くみられる。また、斜里網走通は「道の駅しゃり」が立地する交差点を頂点に「への字」に曲がっているのだが、これは拡幅工事以前から存在する斜里町市街地の大きな特徴である。

写真 5　への字型道路の頂点

次に私は、旧斜里町役場に向かった。旧斜里町役場庁舎は 1929 年に竣工した建造物であり、斜里町役場が移転した後は図書館などとして利用されていた建物である。現在は図書館が斜里中学校の傍に移転したため、「葦の芸術原野祭」の会場などに使用されている。今年は残念ながら「葦の芸術原野祭」を見学することができなかったのだが、私が訪れた際、知床博物館職員の阿部公男さんが消防設備の点検にいらしており、建物内部を見学させていただいた。旧斜里町役場庁舎の屋根には望楼が設置されており、ここからは斜里町の市街地や中斜里にある製糖工場を見ることができる。この望楼から街を見ると旧役場庁舎が小高い丘の上にあり、この丘で街が区分されていることがわかる。

写真 6　旧斜里町役場庁舎

旧斜里町役場庁舎周辺には古い建造物が幾つか残っている。旧役場庁舎の向かいに残る旧川端家や、旧ニコニコ屋呉服店などである。斜里町立知床博物館協力会発行の「斜里・知床の近代化遺産」によると、いずれの建物も大正時代に建てられたものだという。旧斜里町役場庁舎の裏手を通る道路は旧根室街道で、道路沿いには旧斜里駅逓所も残る。旧ニコニコ屋呉服店や旧斜里駅逓所は特に案内看板などもなく、私も「斜里・知床の近代化遺産」を読むまでその存在を知らなかった。周囲の建造物によく馴染んでいるため、一目では貴重な建造物であることが分かりにくい点は非常にもったいないと思う。

７．斜里町市街地に立地する施設に関する調査

最終日となった 5 日目は知床博物館に保管されている出版物を調査した。

まず、「商工会の歩み(斜里町商工会 20 周年記念誌)」や斜里町農業協同組合発行の「50

年史」などを調査した。これら文献の調査によって知床斜里駅前でかつて営業していた協同組合エースパルコや、農業協同組合の新事務所の建設時期や新事務所に入居していた店舗などに関する情報が得られた。

「斜里町史第 3 巻」には国道 224 号のバイパス化の経緯や、商店街近代化の取り組みに関する記述もあった。「斜里町史第 3 巻」によれば、国道のバイパス化は交通事故防止などを目的に実施されたが、バイパス化によって市街地の交通量は減少し、商店街にとってはマイナスに作用したという。また、以前エースパルコとして営業していた店舗に現在はビックマートみたにが入居しており、これが中心市街地唯一の大型店だという。

このほか、斜里町に設置されていた斜里機関支区の歴史がまとめられた「支区のあゆみ」など興味深い資料を調査することができた。

８．おわりに

今回の調査では、斜里町と町外を結ぶ主要な交通手段の変化とそれに伴う街並みの変化を主に文献を用いて調査し、次のような情報を得ることができた。

定期船については、運航する企業と逓信省や道庁との契約内容、定期船の経由地や行き先、斜里に寄港する頻度などの詳細な情報が得られたほか、斜里と周辺の町を結ぶ近海航路が存在していたこともわかった。このほか、釧網本線が全線開通するまでの歴史や斜里機関支区の歴史、国道がバイパス化された背景やバイパス工事の完了時期などの情報を得ることができた。市街地の変化についても、国道のバイパス化による商店街への影響や商店街近代化の取り組み、知床斜里駅周辺で営業していたスーパーマーケットの設立経緯などがわかった。また、斜里町市街地を実際に自分の目で見たことで、市街地の様子も把握することができた。これは市街地の歴史を理解するうえで非常に役に立っている。

今回の調査では、斜里町商工会や斜里町農業協同組合発行の記念誌、「支区のあゆみ」などといった北海道立図書館にも収蔵されていない文献の調査や市街地の散策など、現地調査を行ったからこそできたことが多かった。この調査で得られた情報をもとに、卒業論文の構成や内容などを検討していきたいと考えている。

また、知床博物館の事務室で数日間にわたって調査していたため、学芸員の仕事を間近で見る機会が多く、この点においてもとても勉強になった。

今回の調査を受け入れていただき、様々な資料を提供していただいた三枝さんをはじめとする斜里町立知床博物館職員の皆様、宇仁先生、知床ワイルドライフセンターを管理されている船木大資さんには心から感謝申し上げます。また、卒業論文の執筆に向けた準備で多くの助言をいただいております手塚薫先生にも深く感謝申し上げます。

ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授　手塚　薫

70 年ぶりに改正された改正博物館法は 2023 年 4 月 1 日に施行された。その目的に 2017 年 6 月公布・施行の文化芸術基本法の精神に基づくことが定められている。文化芸術基本法は、文化芸術そのものの振興に加え、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等文化芸術に関連する分野の施策についても新たに法律の範囲に取り込むとともに、文化芸術により生み出される様々な価値を、文化芸術の更なる継承・発展・創造につなげていくことの重要性を明らかにしており、博物館法でも他の博物館との連携、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の活力の向上に取り組むことを努力義務としている。人々のライフスタイルや価値観の多様化と変化、および、知識・技術・情報体系の発展と再編成が進展する中で、より豊かな生涯学習社会の実現に向けてミュージアムが適切な役割を果たしていくことが期待されている。

これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議は、2007 年 6 月に『新しい時代の博物館制度の在り方について』の報告書をとりまとめている。その中で、ミュージアムに求められる 2 つの役割を指摘している。それはミュージアムの教育機能の重視と学習者とのコミュニケーションの活性化である。前者は、家庭教育、学校教育、社会教育という 3 つの教育システムを通じ、博物館本来の教育機能を発揮することを強く求めている。また、後者については、これからのミュージアムの望ましい姿として、資料収集保管、調査研究、展示公開という博物館活動の基盤を強化し、交流、市民参画・連携する学習支援機関としての役割の充実という方向性が強調されている。ミュージアムを取り巻く昨今の状況の変化に対応し、総合的な経営の強化が図られなければミュージアムの活動の基盤が揺るぎかねないという危機感があるのだろう。

マッキンゼー＆カンパニー社が提唱するソフトの 4S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの 3S （戦略、組織、システム）は互いに補い合って組織の価値を高める。ソフト要素は人の感情や価値観がかかわり、変更が容易ではない。一方、ハード要素は経営者の意思や企業努力で改革がしやすい。マ社では、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考えかたとして「シェア・共有された価値観」を最重要視しており、それは「ビジョン」と「基本理念」から成る。ミニミュージアムでは、現代社会が直面している諸課題の解決に資するため、なによりも新たな価値の創造を重視している。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標とし、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望としている。この 2 つが複合・融合して「展示趣旨」（シェア・共有された価値観）になることを学生たちに認識してもらった。「現状分析」することで、出発点の明確化を促し、現時点での課題とその解決を意識させた。優れた経営者は夢や思いを語り、そうでない経営者は数字ばかりを追い求めるという。人間形成空間としてのミュージアムの再興をも可能にする組織変革のフレームワークといえるだろう。

3 年生以上に開講されている「博物館経営論」では、他科目も含め今までに学んだ知識を活用し、ミニミュージアムの展示計画を練り、ミニチュア模型、図録、ポスタ

ーを実際に作成してもらうことを試みている。完成には一定の時間がかかり、工作が苦手な人には忍耐が求められる。制作にあたっては、冒頭で述べたようなミュージアムを取り巻く近年の状況の変化を説明し、それを前提としてもらうことにしている。完成した作品をディスプレイし、学生同士で互いに作品評価も担当した。

本稿では、作品のプレゼンテーション後に実施した学生たちによる作品評価の結果、ポスター・図録・展示部門をあわせた総合評価で最高得点を獲得した学生 3 人の作品を紹介する。これからミニミュージアム制作に挑戦する学生は、本講評の後に掲載されている優秀作品の作者 3 人のレポートを熟読して参考にしてもらいたい。

「服の対価展」を制作した榊原大輝さんは、ファストファッション」をテーマに、早すぎる服のライフサイクルについて扱った。シンプルで印象的なポスターから、その中身をおおよそ推測することができる。榊原さんは、ミニミュージアムの作業は、構想・作成・調整の 3 つを繰り返し行うことがポイントだと看破している。とりわけ構想に多くの時間を費やしたそうだが、その成果は、現状分析→ビジョン→コンセプトという流れを密接に連携させたことに表れている。来館者が展示場に滞在する限られた時間で、ミュージアム側が提供したすべてのことは理解できない以上、見学後に図録を読んだり、衣類を購入する際に展示の内容を繰り返し思い出すことを前提にコンセプトを考案している。図録もそうした目的を想定して作成しているが、凡例の作成がしっくりいかず、図録全体の編集に充てる時間が足りなくなってしまったとの後悔もあるようだ。

「見て触って学ぶアイヌ展」を制作した藤原悠生さんは、アイヌ文化を、知識としてではなく経験として学んでもらう展示を目指し、模型制作にとりかかった。展示構成をアイヌの住まい、アイヌの衣服、アイヌの狩猟という 3 つのテーマに区分し、それぞれに見合った模型を製作した。中でもホイヌアㇰペ（テン獲り罠）やクワリ（仕掛け弓）は罠のメカニズムがどのようなパーツで構成されているかを細かく観察して実際に動くようにするなどリアリティが非常に高い。知識としてではなく経験として学んでもらうことをコンセプトに掲げていたが、来場者がツールを実際に動かすことによって見事に達成できている。展示場における文字はアイヌ語表記のみに限定し、資料が何かを推測させる狙いがあり、図録はその答え合わせ用であるとの設定も、展示場で来館者に展示物を主体的に考えてもらいたいとの思いから来ている。

「本物凝縮作家　あやかずきんの小さな世界」を制作した渡辺彩花さんは、機械化による大量生産で、安く手軽なものが満ち溢れる現代にあって、手づくりの良さ、希少性、緻密さ・精密さの魅力を知ってもらうことをコンセプトに掲げた。渡辺さんは企業ともコラボを行いながらミニチュア作家として活躍しているだけあって作品のクオリティが高い。模型製作において大切なことは、縮尺であるという。ミニミュージアムの素材である発泡スチロールの底から天井までの高さを、現実世界の一般的な天井の高さで割って、縮尺を 20 分の 1 と割り出している。また、展示で多用する展示ケースのゆがみや透明度は見栄えを大きく左右するのでここで妥協をしてはならないという。ポスターは写真に加工を施し、謎めいた雰囲気を出すことで、ミニチュアが織りなす魅惑の世界を表現することにも成功している。

博物館経営論　ミニミュージアム制作を終えて

経済学部経済学科 4 年　榊原大輝

はじめに

学芸員課程におけるミニミュージアム制作は私にとって「学芸員」の本質を感じさせてくれるものであった。そもそもミニミュージアム制作とは各々が構想した架空の博物館を配布された発泡スチロール容器の中で展開するものであり、同時にそれに伴った図録やポスターも制作する。これまでに私が受講してきた学芸員課程の作業は複数人やグループで行うものであり、今回のように構想から完成までを全て一人で行うのは初めてのことだった。新鮮であると共に本当に一人で完遂できるのかと不安になったが、かえってその気持ちが作品の完成度を強く意識させた。

本稿ではミニミュージアム制作を内省し、その過程で重要視していた点、工夫した点や難儀した点を感想と織り交ぜて紹介していきたい。

１．構想

テーマは特に限定されることはなく、著作権の侵害にならない範疇での設定が求められた。先輩方の作品や図録を拝見したところ、まだ製作段階にも立っていない自分の目でも隅々までこだわりが隠されているように見えた。ミニミュージアムを作成する自分の姿と重ねて、果たして自分にはこれを完成させるモチベーションはあるのかと不安に感じたが、作品に自分の好きなことを展開することはできるはずと考え構想を練り始めた。

当時の私は早々に「ジーンズ」をテーマとして決め、展示室のレイアウトや材料をある程度まで仮定していた。しかし、ビジョンとコンセプトを考慮した際、テーマの背景には自分が想定していた事よりも深刻な問題があるのではないかと感じた。加えて博物館は「学習の場」でもあるため、同時に自分たちで何かを学ぶ事ができる場所という双方の問題を解決する相応しい題材を探した。

最終的に「ファストファッション」をテーマに決定した。このテーマは現代の課題を一言で表す事ができる単語であり、後述するビジョンやコンセプトにも相応しいものであった。また「ファッション」とあるように、あくまで「服」のあり方を考えるため、来館者にとっても身近なものとなっている。

実のところ、制作場で最も苦悩したのはこの構想段階であり、「ファストファション」に辿り着くまでに幾度もテーマを決めあぐねていた。中々、ビジョンとコンセプトがテーマと結び付かなく、先輩方の作品を繰り返し観察していた。だが、ここで双方に一貫するテーマを探し続けた甲斐があり、何を伝えたいのかが鮮明になった。

２．現状分析・ビジョン・コンセプト

以下実際に図録に記載したことを基に述べていきたい。

現状分析

今や人類にとって欠かすことのできないものとなった「衣類」。その歴史は古く、今日まで何世紀もの間、途絶えることなく継承されてきた。それ程まで人類と「衣類」の関係は深く結びつき、現代においては個人のアイデンティティを形成する役割をも担っている。

しかし、近年における「衣類」あるいはファッションの実態はあまりにチープなものの様に感じる。誰もが服を容易に入手でき、ファションを楽しめるという現状は私たちの暮らしを彩り、自由や多幸感を感じることができる。

服を入手することの容易さは同時にその服に込められた価値を下げてしまう。服一着が安価である時、例え服に穴が空いてしまっても修復や再利用せずに、新しいものを購入し、流行が過ぎ去ったものはそのまま処分されてしまうケースが多い。これがチープなものというイメージに繋がる為、まずはこの早すぎる服のライフサイクルについて検討しなければならない。

現状分析では来館者にとっても身近になるように記載している。これは問題の核に迫る上で重要な入りだと考えている。来館者には具体例を述べるより我々がどのような時に服を購入し、手放すのかを思い出してもらう事の方が実感を湧きやすいと考えた。そのため、ここでは服の本来の目的から入り、現代社会でのあり方を大まかに説明している。

ビジョン＝短期目標

消費者の手元へと服が渡るまでにかかるコストの認知

私は小学生にとって博物館を見て回るのはあまりにも情報量が多いのではと考えた。というのも、本企画展は小学生から大人までを対象として想定している。そのため、本館では「何となく服が届くまでに色々なコストがかかっている」という認識が芽生えるようなシンプルな短期目標に設定した。

コンセプト＝長期展望

- 本企画展を来館した方々が退館後に一瞬でも展示や資料のことを思い出してくれること
- 衣類を購入あるいは処分する際に本企画展が検討材料になること

企画展側が来館者に働きかけをできる範囲は、恐らく入館から退館までの時間だけだろう。しかし、この短時間で来館者は我々が期待できる効果を出してくれるとは限らない。寧ろ、忘れてしまう人の割合が多いと考えられる。

そこで働きかけをできる範囲を逆手に考え、退館後すぐにでも効果が現れるものを長期展望に設定した。記憶とは繰り返し思い出す事で忘れずに定着する。本企画展のテーマは服であり、日常的に記憶を関連づけて思い出すことに期待できる。

第 2 項目は限定的な状況となってしまうが、テーマの真髄でもある服の価値を思い出してくれることに期待を込めて設定した。

３．模型制作

ミニミュージアム制作では前述した構想やビジョン、コンセプトと共に来館者視点を念頭に置いて設定している。この模型制作でも同様に入り口や作品、展示パネルのサイズ感を意識して製作した。

写真１　全体の上面図
（右側：入り口　左側：出口）

写真２　全体の上面図
（展示作品を取り除いた状態）

当初は箱である発泡スチロールの長さと高さを計測し、そこから理想的な来館者の身長と歩幅を割り出し、そこから入り口や模型、通路の幅などを割り出した。しかし計画していた展示が収まらなくなってしまったため、展示全体と通路などのバランスが取れるまで繰り返し微調整した。これに伴い模型も繰り返しサイズを変更する必要があったため、素材は容易にサイズを変更できるものを採用した。

この企画展では大きく４つに分けており、展示の内容に合わせて章タイトルを作成し、展示テーマに詳しくない来館者にもこの章では何を表現しているのかを解説している。またこの企画展の構造は来館者の混雑を極力避けるために壁やパーテーションを用いる強制的な導線を必要最低限に留め、自由に行き来できる半強制導線を意識した。特に解説パネルを来館者の目線に置くことで自ずと展示順に観覧ができるようにも設定した。

このミュージアムは一貫して来館者が楽しんで学ぶ事ができるように構成しているため、学びを促進できるように館内全体をテーマに近づけた。服の一生を見た時、自然と密接な関係になるため、床には芝生をモチーフとしたものを使用し、壁紙の配色は鑑賞の妨げにならない優しい青色を使用した。章を区切るパーテーションには木をイメージした木目調のシールを用いて関係性を印象付けた。またこのパーテーションの底と箱の底に磁石を仕込むことで取り外しを可能にし、館内全体を何度でも確認できる仕様にした。

またこのミュージアムで半強制導線を意識している理由の一つとして、来館者が何に衝撃的な印象を感じるのかという点である。私は実体験として退館後にどんな博物館であったか、どんな展示物があったかを思い出す。その際に印象に残る展示物や情報があるとそれに関連して色々な記憶や思い出が次々と思い出される事が多々ある。これは私自身だけの感覚ではなく来館者にとっても共通するものがあるように感じ、少なくても２つ以上はミュージアムを代表するような衝撃的な展示物を作成しようと考え、展示会場の中心に居座るように巨大な浴槽の模型と奥に巨大なペットボトルの模型を配置した。

最後に使用した資材について詳しく述べたい。資材の調達は全て 100 均にて購入しており、前述した様に容易にサイズを変更できるものを採用した。床や壁紙、パーテーション、台座に使用した模様は全てリメイクシートであり、裏面がシールのものである。今回は基盤となる素材が発泡スチロールであるため、シールの粘着性のみでは剥がれてしまう恐れがある。そのため取り付ける際には端を仮止めした後に専用接着剤をつける事が必須となる。

パーテーションには基盤と同じ素材のポリスチレンフォームを採用した。この資材は前者と比較して少し硬く作られているものの、軽量で加工する際にもクズが少なく、断面が潰れにくい特徴からミュージアム内の雰囲気を統一にするのに最適であった。二つの目玉展示についてはそれぞれ紙粘土とプラスチック粘土を採用した。後者について、熱を加えることで再形成が可能という特徴があり、絵の具と組み合わせることで任意の色へと着色できるものであるが、今回はペットボトルの質感を再現するために透明のものを採用した。また接着剤に関しては見た目を考慮して固まった時に透明となるものを使用した。

写真３　上からみた館内の様子
（左上：入り口）

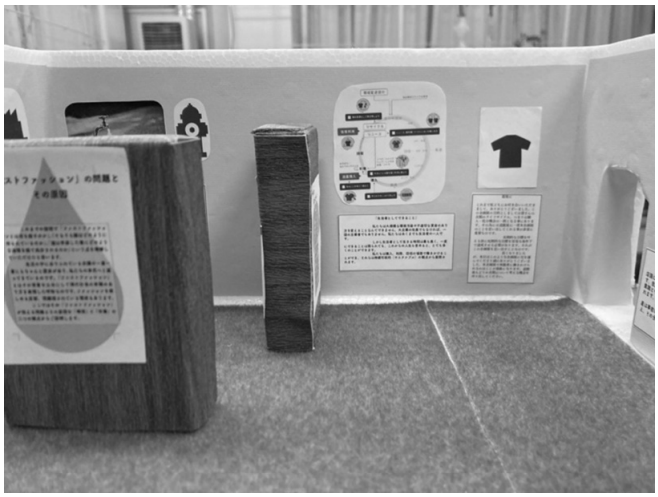


写真４　来館者目線での館内の様子
（右側：出口）

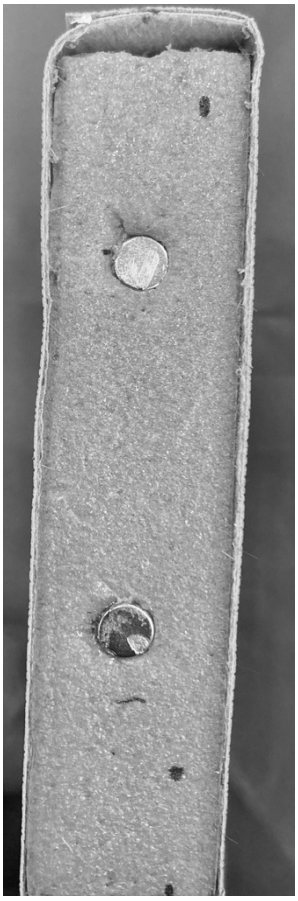


写真５　左：実際の展示用パーテーション
写真６　右：左のパーテーションの底面
　磁石を埋め込んで床との取り外しを可能に

４．ポスター・図録

ポスター

ポスターの役割は来館者が一目見てどんな展示会をするのかを周知する事である。その次に会場や料金、開館時間などの必要な詳細が記載される。しかし日常と照らし合わせた時に本当にそのようなポスターを見てその展示を観に行きたいという衝動に駆られるだろうか。少なくとも私は最初から興味があるものしか行きたいとは思えない。そうなるとポスターの有無は関係なくなってくると考えられる。

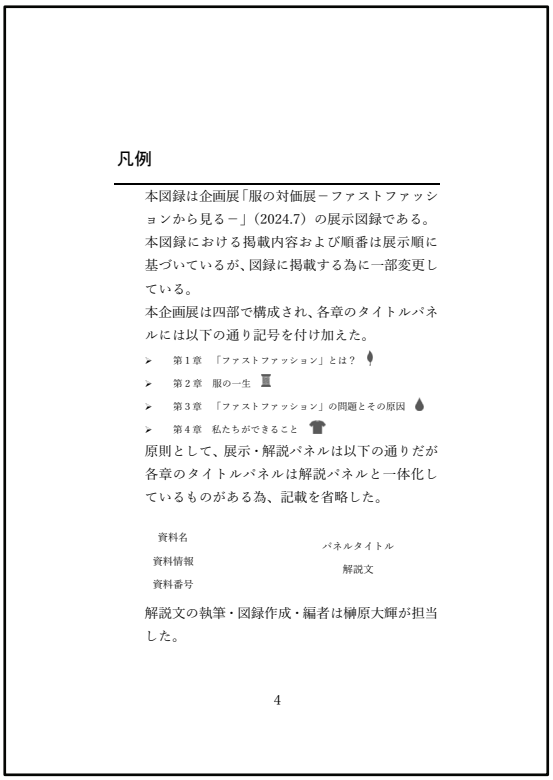
そこで私は一目見て印象づけられる視覚情報に頼ったデザインを採用した。そもそも背景として街中や道中でポスターをまじまじと見る機会や時間などは大抵の人にとっては皆無だろう。ならば逆に一目見て「何の展示なのか、どのような展示をするのか」と考えさせるような印象的なデザインとヒントとなる一言を添える事で興味を持ちやすくできたのではないかと感じている。

写真７　実際に作成したポスター

図録

ミュージアム制作にあたり必要な資料や解説部分を作成する関係で図録は最後に着手することになり、逼迫した期限までに完成させることを念頭においた結果、全体的に無機質な仕上がりになってしまった。この図録の構成は私の図録に対する考えを反映させており、基本的に館内の展示作品や章を順番に巡るように掲載している。これは来館者が図録を購入するタイミングを展示見学後だと仮定し、その後に図録を見ることで改めて当時の記憶が蘇ることを狙ったためである。

ごあいさつやさいごの一言、謝辞に関しては先輩方の作品や自宅にある図録を参考に作成した。中でも凡例の作成に最も時間を費やした記憶があり、下部にある完成形ではいかにも質素な作りになってしまったが、凡例にはその図録の個性が際立つため、いずれの参考文献の形式も私がイメージしているものとは異なり、結果として質素なものに落ち着いてしまった。内容に関しても図録全体が完成に近づいた頃に作成したため、全体の修正に充てる時間を確保する事ができず、着手する手順が逆であった事にとても後悔している。



凡例

本図録は企画展「服の対価展－ファストファッションから見る－」（2024.7）の展示図録である。
本図録における掲載内容および順番は展示順に基づいているが、図録に掲載する為に一部変更している。
本企画展は四部で構成され、各章のタイトルパネルには以下の通り記号を付け加えた。

- 第１章　「ファストファッション」とは？
- 第２章　服の一生
- 第３章　「ファストファッション」の問題とその原因
- 第４章　私たちができること

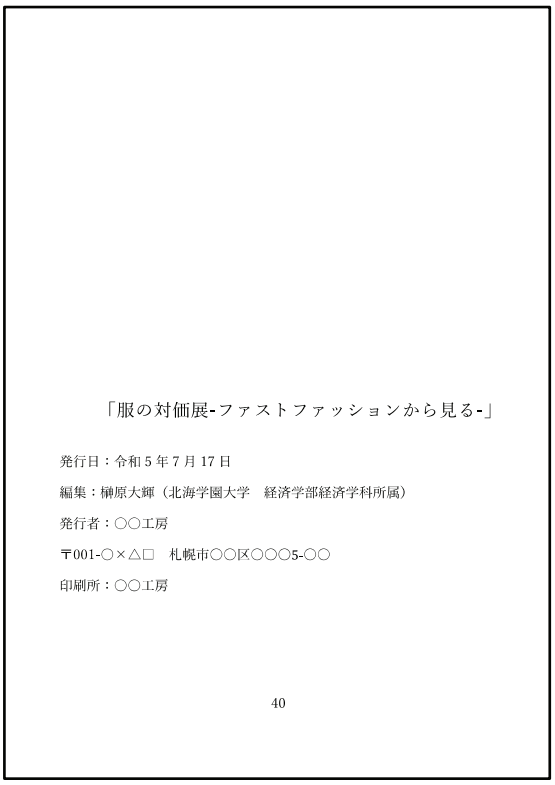
原則として、展示・解説パネルは以下の通りだが各章のタイトルパネルは解説パネルと一体化しているものがある為、記載を省略した。

資料名	パネルタイトル
資料情報	解説文
資料番号	

解説文の執筆・図録作成・編者は榊原大輝が担当した。

4

図１　凡例



「服の対価展-ファストファッションから見る-」

発行日：令和５年７月17日
編集：榊原大輝（北海学園大学　経済学部経済学科所属）
発行者：○○工房
〒001-○×△□　札幌市○○区○○○5-○○
印刷所：○○工房

40

図２　奥付

５．おわりに

ミニミュージアム製作という作業は構想、作成、調整の３つを繰り返し行う事が求められる。それは模型や図録、ポスターにおいても同様で内容や見た目、完成度も全て自らの意志や妥協に比例する。私は構想に多くの時間を費やし、他の行動に身を移すことができず、スタートラインから大幅に遅れてしまった。ようやく固まったアイデアからミュージアムの雰囲気を抽出する時でさえ、以前とは異なる考えが遮り、前進と後退を繰り返す事が多々あった。また他の学芸員課程の講義の内容が私の考えと異なる時も少なくなかった。しかし、来館者を優先する目線は構想段階からブレずに持ち続けていたため、「来館者に何を学んでもらいたいのか」を重視して、その目的を達成するにはどうしたらいいのかという風に目的の目的を追求し続けることでミニミュージアムを完成させる事ができた。

また先述した通り、製作は妥協によっても左右される。ここで述べる妥協とはマイナスの意味を含む「諦め」ではなく、製作全体における時間配分や自身の手で再現でき得る完成度、調整などを考慮した際の「区切り」である。この妥協の水準を自身で決断することこそが私にとっては非常に重要な過程であった。これは製作に限らずどの場面でも生じる問題だと感じている。今回はミニミュージアムという本人の意志や妥協がわかりやすく現れるものであるが、実はどの課題であろうとこの課題の様に色濃く反映されていて、それが一目見た時にわかりやすいか否かという違いなのではないだろうかと感じている。

最後になってしまったが、この課題は思ったよりも自身の耐久力が求められるものである。思いついた大抵のことは上手くいかず、意外なところで時間や手間を費やす羽目になったり、途中で何もかもを変更したくなる事が多々ある。しかし、この課題のテーマは自由であり、ミュージアム内の構想も同様に自由で、自身で決断する事の方が多い。それ故、この課題は順風満帆には行かず、遮られる壁の種類も人によって異なる。だからこそミニミュージアムを製作する意義があると私は感じる。

また私は現在４年生であり、来年度からは社会人としてこれからの人生を歩んでいく。現段階では近い未来で自分がどのようなことに悩んでいるのかはおろか、社会人としてどう過ごしているのかさえ予想ができない。だが、現時点で何もできないわけでもないことをこの製作で痛感した。時にはコンセプトも決まっていないのにレイアウトや素材に見当していたり、展示品が未定であるにも関わらず、図録の大半を埋めていたりすることが度々あった。この行動はつまり「現時点で自分に何ができるか」を突き詰めたものであった。これから仕事の中でもいくつもの業務を並行して行わなければならない状況が数多く訪れる。その度に日頃から「自分は今何ができるのか」という点に重きをおいて社会人として着実に歩み続けていきたい。

博物館経営論　ミニミュージアム制作を振り返って

人文学部日本文化学科 3 年　藤原　悠生

１．はじめに

博物館経営論では大きな課題としてミニミュージアム制作が行われる。ミニミュージアム制作では、自分で考えた企画展の展示室の模型を作り上げ、その企画展の図録とポスターを一人で制作しなければいけない。工作は苦手であり、自分の思うようなものが作れず中々困難な課題であったが、先輩方のアドバイスや見本もあり、不格好ながらも何とか作り終えることが出来た。本レポートでは、ミニミュージアム制作過程の中での工夫点や反省点を振り返り、この課題で得たことを述べていく。

２．ミニミュージアムの構想

ミニミュージアム制作にあたり、初めに企画展のテーマや構想を考えた。テーマは自由であるということもあり、様々な案が思い浮かんだが最終的にアイヌをテーマとした企画展に決まった。アイヌの企画展というとありきたりで自由なテーマで制作してもいいのにつまらないテーマだと思うかもしれないが、博物館でありきたりなテーマを設定することで実際の博物館と同じように考え、学びを得られるのではないかと考え、アイヌのテーマに至った。次にアイヌをテーマに何を作るのかを考え、先輩方のミニミュージアムを見ると大体が印刷したものを貼り付けているようなものを使用しており、それなら自分は文字や印刷して貼り付けるようなことは出来るだけ避けて実際に触れたり動かしたりすることが出来るものを作ろうと思い、作業に取り掛かった。

３．現状分析・ビジョン・コンセプト

以下に図録に掲載した現状分析・ビジョン・コンセプトを引用し、述べていく。

【現状分析】

アイヌ民族は、日本の先住民族の一つであり、北海道及びその周辺地域に伝統的に居住してきた。アイヌの歴史は古く、独自の言語や文化を持ち、狩猟、漁業、採集などの伝統的な生活様式を営んできた。しかし、近代日本の政策によりアイヌの土地や文化が侵食されはじめ、アイヌの言語や文化を否定し、同化政策が行われることもあった。そういった過去の差別や抑圧の影響が残り続け、アイヌの文化を継承することが困難となり現在に至っている。

そのため、我々はアイヌ文化を自分たちの文化とは別のものであるという考えではなく、アイヌも日本の固有文化の一つであるという意識を持ち、日本全体（特に北海道）でアイヌの持続的な発展と文化の継承を目指していかなければいけない。

また、博物館＝勉学という固いイメージにより博物館へと赴く敷居が高くなってしまっている。そのため、外に遊びに行くのと同じように博物館へと行けるような意識改善、環境作りも必要である。

現状分析では、アイヌ民族への過去の抑圧や差別の影響が未だに残っており、それがアイヌ文化の継承の障害となっていることを述べた。そのため、日本全体でアイヌ文化を守っていく必要があると考えた。また、博物館に抱いてしまう勉学という堅いイメージを取り壊し、公園に遊びに行くようなイメージを持って気軽に博物館を訪れてほしいという思いから、本企画展の展示物では文字資料を扱わず、実際に触れることが出来るような展示物で構成した。

【ビジョン（短期目標）】
・アイヌへの理解を促進する。
・アイヌ文化を楽しんでもらう。
・年齢関係なくアイヌについて知ってもらう。
・博物館に対しての興味を持ってもらう。
・自分で考えるという意識を持ってもらう。

ビジョンでは、来館者に企画展を通してどのような意識を持って貰いたいかを考え、上記の５点を本企画展のビジョンとした。ビジョンの自分で考えるという意識を持ってもらうため、展示構成と図録の工夫をしたがそれについては後の模型・図録の制作において述べる。

【コンセプト（長期目標）】
・アイヌ文化を好きになってもらう。
・アイヌ文化を未来に伝えていくための担い手の１人となってもらう。
・アイヌ文化を知識としてだけでなく、経験として学んでもらう。
・アイヌ文化をもっと身近に感じてもらう。
・継続して博物館に来館してもらう。
・遊びに行くような意識で気軽に博物館に来館してもらう。
・アイヌ文化を飽きたと思われるほど当たり前の存在として認識してもらう。

コンセプトではビジョンと似たようなものになってしまうが、より具体的な目標を設定した。特にアイヌ文化を未来に伝えていくための担い手の一人となってもらうことを第一目標とし、他の目標も達成できるように展示を工夫した。アイヌ文化を、知識としてではなく経験として学んでもらう展示を目指し、模型制作に取り掛かった。

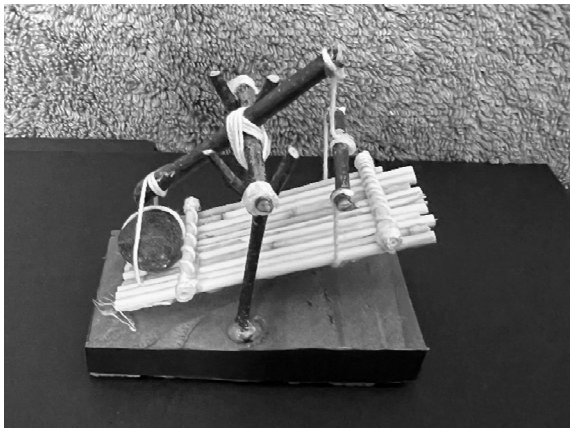
４．模型の制作

展示模型の制作では展示物のベースとなる資料として、主にアイヌ文化交流センター（サッポロピリカコタン）の展示物を参考に制作した。また、展示模型を作るにあたり、ビジョンやコンセプトを意識して文字資料ではないもの、また実物であることや触れるものを展示物として選択した。見る、触ることによって年齢に関係なく体感的に学ぶことが出来るようにし、資料名をアイヌ語だけにすることで、その展示物が何に使われていたのか等を自分で考えてもらえるよう工夫した。完成した模型の全容は【画像 1】である。

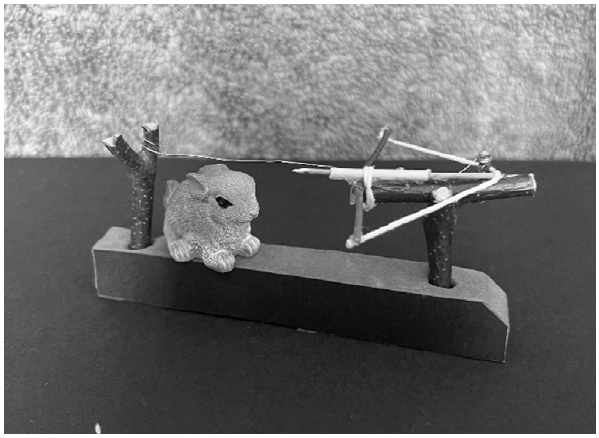
【画像 1　模型の全容　上】

【画像 2　模型の全容　横】

模型を制作するにあたり、印刷物の使用など自分で作ったもの以外は使用しないと考え取り掛かったが、アットゥシなどの衣服を小さく作るのが非常に困難で、既にあるものに頼ってしまった。展示構成としては大体 3 つのテーマで分け、アイヌの住まい、アイヌの衣服、アイヌの狩猟で展示物をまとめた。他にも作りたいものは沢山あったが限られた空間の中で小さく再現することや、似たような材質で作るのが困難であった。実際に自分で作るとなると最大限小さく作ってもかなりのスペースを使用してしまい、資料の数が少なくなってしまうというのが文字資料を使わないデメリットだと感じた。



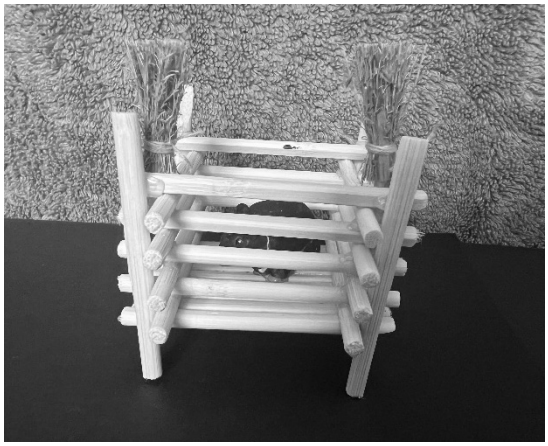
【画像 3　ホイヌアㇰペ】



【画像 4　クワリ】

この【画像 3】と【画像 4】の 2 つは模型を作るにあたり特に作りたい 4 つのうちの 2 つであった。ホイヌアㇰペは紐の巻き方やどのようなパーツで構成されているか細かく観察して実際に動くようにしたのがポイントである。ただ、展示物として危険性がなく、罠を仕掛けなおさなくても何回でも動かせるように実物から見た目を変えないよう組み立て方を変え、罠の仕組みがよくわかるように工夫をした。クワリは最初にゴムを使用し実際に飛ぶように設計したが、小さく作るとどうしても耐久性の問題が発生してしまい、矢じりを研いで尖らせる程度の再現性に落ち着いた。のべ糸のつけ方や罠の下部といった見えない部分にもこだわり、上手く再現できたと考えている。ただ、本来はウサギを粘土で作る予定であったが、クマとふくろうで疲れ果ててしまい資料として用意したものをそのまま使用してしまったのが反省点である。

【画像 5　コタンコロカムイ】



【画像 6　ヘペレセッ】

【画像 5】と【画像 6】の 2 つが特に作りたい 4 つのうちの残りの 2 つである。コタンコロカムイは地下鉄南北線さっぽろ駅構内にある「アイヌ文化を発信する空間ミナパ」にある貝澤徹さんの木彫を参考に制作した。ふくろうの土台となっている木にはアイヌの文様を彫りたかったが、太く掘りやすいような木が見つけられず断念したことを後悔している。ヘペレセッは北海道博物館のものを参考にした。檻だけでなくクマも作り、展示室の中央に設置することで目玉の展示とした。

模型製作では材料をダイソーなど 100 円均一店と公園や道端で揃えた。私自身不器用であり工作は苦手であるが、改善を重ね同じ展示物を何個も作ったり細かい部分を観察しながら作ることである程度は自分の作りたいものを作ることが出来た。ただ、自分で完成したと思ってもいざ作品を提出して後からじっくり見ると様々な部分で改善点が思い浮かぶ。そのため今後ミニミュージアム制作に取り掛かる人には提出の数日前に完成させ、残りの日数では本当に問題ないかを確認できるように余裕を持って取り掛かってほしい。私は模型単体では制作におよそ 3 日かかり、かつ期限ギリギリまで取り掛かっていなかったために作りきれなかった部分が多く反省した。ただ思っていたより自分の力だけで罠や道具を再現することが出来たのでこれはいい経験になった。実際の博物館として考えると展

示物が大きく通路が狭いということや、文字資料を扱わなかった為に展示数が少ないという問題がある。資料ラベルにはアイヌ語だけにすることで何に使うか自分で考えてほしいという思いがあり、その答え合わせとして図録を使用してもらうという形にしているが、今となれば図録ありきの展示となってしまったのは問題があった。制作材料は作るものを決めてそれに合わせて作るのがいいが、制作中に予定外の発想がどんどん思い浮かぶこともあるため、多めに用意しておくと楽になる。また、作れそうなものは実際にそれを展示するかどうかは別として作っておくと展示の構成の幅が広がる。

５．図録とポスターの制作

図録作成では模型が完成してから取り掛かった。今回の企画展の狙いとして展示資料にはあえてアイヌ語表記だけにすることでその資料が何に使われているか考えてもらうという意図がある。そのため、自分で考えた後にその答え合わせとして使ってもらえるような図録の位置づけである。図録のデザインとしてアイヌの文様を縁に配置し、質素な図録とならないように工夫したが、アイヌ文様の主張が強すぎたかもしれない。図録のページ数が限られており、展示解説文において１つの展示に１ページで作ってしまったため図録の殆どが展示解説文となってしまったのは失敗であった。展示解説文は展示物制作でも参考にさせていただいたアイヌ文化交流センター（サッポロピリカコタン）を基に制作した。

【画像７　図録奥付】

【画像８　図録展示解説文】

ポスターは正直かなり出来の悪いものを完成品としてしまった。というのも提出期限ギリギリで課題に取り掛かってしまい、全体的に時間に余裕がない状況での作業となって

しまった。また、模型制作・図録作成で自分の気力を使い果たしてしまい、ポスターはとにかく早く終わらせて解放されたいという意識で作ってしまった。そのためクオリティの低い状態で完成させてしまった。ポスターは企画展を訪れるきっかけとなる重要な要素の1 つであるため、作業の熱意が偏らず、バランスを持った作品を作れるように後輩には頑張ってもらいたい。

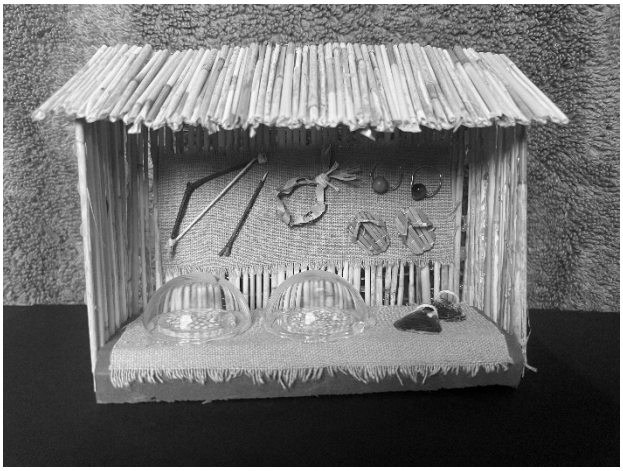
【画像 9　ポスター】

6．終わりに

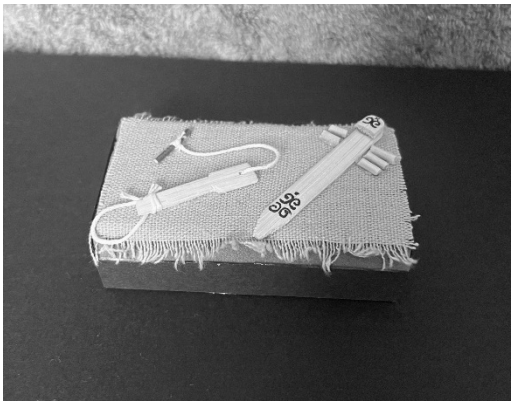
ミニミュージアム制作を終え、制作過程で博物館に必要なこととは何かということや、実際の博物館でも生じるであろう様々な問題を体感することが出来た。自分で企画展のテーマを考え、まずそのテーマ（私であればアイヌ）の現状分析をすることでアイヌ民族にはどのような課題があるのか発見し、次にその課題を解決するためのビジョンとコンセプトを考えるという手順によって、自分の考えを具体的にしてまとめる論理的思考能力が鍛えられた。模型制作では何をどう作るか考え、実際に作ってみると様々な問題点が出てくる。その都度どのように改善すればより良いものになるのかと臨機応変な対応が必要になり、柔軟な思考能力が養われる。ミニミュージアム制作はただ自分の作りたい空間を再現するというだけの課題ではなく、博物館を運営するにあたり直面する問題の発見とその解決をするための能力を身に着けることが出来る大きな課題だと気づいた。ミニミュージアム制作で私は模型・図録・ポスターの完成度のバランスが偏ってしまった。どれだけ模型や図録が上手く作れてもポスター1 つが不格好なだけで全体の完成度が下がってしまう。展示・図録・ポスターが揃って１つの企画展と言えるため、余裕のあるスケジュールで進めるべきであった。アイヌの企画展というとありきたりでつまらないテーマだと思われる

かもしれない。企画展の候補として最初にゾンビの歴史や伊藤潤二展を考えていた。しかし実際の企画展にあるようなテーマでやってみると実際の博物館の場合と照らし合わせて考えたり、再現しようと細かく観察するため学習に繋がるなど学芸員として必要になる力を鍛えることが出来た。後輩たちには実際の博物館にあるような企画展をやってほしいというわけではなく、自分の好きなもの、興味があるものを作りつつ、ただ自分の作りたい空間を作るだけに終わらせないでほしい。テーマがなんであれ、それを博物館の企画展として成り立たせようとする過程で必ず自分の力となるものがあるのでそれに気付いてほしい。制作に取り組んでいる時間は辛いものであるが、完成させたときの達成感は中々味わえないものである。私の作品を優秀作品として選んでいただいた方には非常に感謝しているが、頑張って作った作品が持ち帰れないという点だけが少し悲しい。一緒に博物館経営論を受け、ミニミュージアム制作を行ったみんなも各々個性的で素晴らしい作品を作り上げていて、工夫の仕方など学べる点が沢山あった。後輩たちは先輩たちが作った作品から様々なテクニックを学び、博物館経営論史上一番と言えるような作品を作ってくれることを期待している。

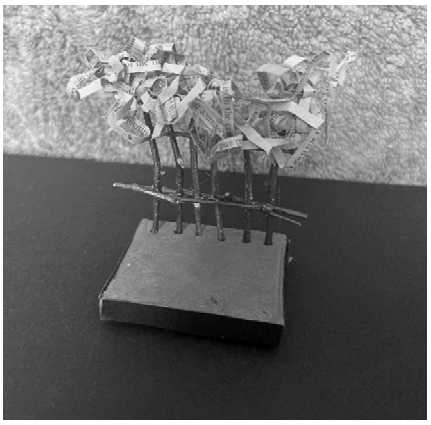
【画像 10　エヤミカ】



【画像 11　ポンチセとその他】



【画像 12　ムックリとトンコリ】



【画像 13　ヌサ】

博物館経営論　ミニミュージアム制作を終えて

経営学部経営学科 3 年　渡辺彩花

１．はじめに

学芸員課程 3 年次に開講される博物館経営論では、ミニミュージアムの制作が課せられる。ミニミュージアムとは、自分自身の思い描いた特別展を具体的に考え、図録やポスター、模型に起こしたものである。個々の興味関心をもとに制作を進めることができ、楽しい講義ではあるが、歴代の履修生からはとても難関な講義であると聞く。本稿では、私のミニミュージアム制作についてその過程を振り返り、この講義を通して得た学びや、改善点などについて述べていきたい。

２．ミニミュージアムの構想

制作にあたり、せっかく大量の時間を費やすのなら、自分の興味関心のあるもののほうが有意義な作品になると考え、題材を「本物凝縮作家 あやかずきん」とした。あやかずきんとは､私が立ち上げたミニチュアのブランドである｡幼いころからミニチュアが好きで、気づけば鑑賞者から作家へ転じており、大学２年次より本格的に活動を始めた。現在はまだ駆け出しのブランドであるが、学芸員課程での学びはもちろんのこと、経営学部で学んだ知識や、地元起業家の方々との交流を経て地道に活動を行っている。

私の作品の魅力は､本物をそのまま凝縮したような再現性にある｡キャッチコピーは｢そっくりそのまま､本物凝縮｣｡現在は企業とコラボを行い、実在するメニューのミニチュアを制作。公式企業コラボミニチュアとして販売活動を行っている。そのため、偶然にもミニミュージアムの制作ではその技術を問われる場面もあり、いかに本物の博物館にみせられるかどうかが重要なポイントでもあった。

図 1　「本物凝縮作家　あやかずきん」ロゴ

３．現状分析・ビジョン・コンセプトの設定

以下に図録に掲載した現状分析、ビジョン、コンセプトを引用し、その設定過程について述べていく。現状分析では、大量生産大量消費が可能になった現代における、手づくり・ハンドメイドの良さを訴えかけるものとした。

現状分析

今日の世界では、産業技術の発展が目覚ましく、これまでには考えられなかった機械や技術が生まれている。そうした中、機械化による大量生産により、安く、手軽なものにニーズを見出すのはもはや当たり前となった。しかし、それでよいのだろうか？我々の祖先は、機械がない時代からずっと様々な技術を培ってきた。その中には、とても機械では再現することのできない精密で、緻密な技術が詰め込まれた匠の技が多くある。そうした技術は、歴史の発展とともに変化していくが、それでも職人の手によって生み出される作品はすたれることを知らない。そんな、機械化で便利になった今だからこそ後世に残したい技術があるのではないだろうか。

ビジョンでは、私のブランドの紹介を中心に以下の点について紹介を進めながら、理解を深めてもらうことを目的に行った。

ビジョン（短期目標）
作品にかけた想い、地元との関連、作品の制作過程を知ってもらう。
ミニチュアに興味を持ってもらい、好きになってもらう。

コンセプトでは、現状分析やビジョンを踏まえたうえで、博物館に訪れた人が私のブランドをみてどのように感じてほしいか､どのようなことを訴えるべきかを考えて設定した。

コンセプト（長期目標）
手づくりの良さ、希少性、緻密さ・精密さの魅力を知ってもらう。

以上のことを主軸としながら制作を進める必要があるため、どのような展示物を置いたらそれが達成できるのか、どのようなラベル・展示構成があればそれが伝わるのか等を意識して制作していくとよい。

４．模型制作

模型制作において大切なことは縮尺である。これがしっかりと合致していないと、全体を俯瞰した際にアンバランスになってしまう。そこでまず私は最適な縮尺を考えるため、箱内側の底から天井までの高さを測ることにした。例年底上げをする履修生も多くいるよ

うだが、あまり必要性を感じなかったため今回は省いた。次に一般的な天井の高さを調べ、（ミニミュージアムの天井の高さ）÷（一般的な天井の高さ）を計算した。今年度の発泡スチロールでは約 20 分の 1 スケールがちょうどよかったので、すべての縮尺を 20 分の 1 に統一した。

デザインツール CANVA で作成した壁紙やドアを全面に張り付け、空白をなくし、２階へと続く階段をヒノキで作った。発泡スチロールは底面が直角になっていないのが難点だが、直角に削り取るのはなかなか根気のいる作業なのでそのまま進めた。印刷物系の展示資料はすべて実際の大きさから縮尺を計算し、正確に縮小したものを張り付けた。また本来であれば私の制作したミニチュアを展示するとなると、ミニチュアのミニチュアを制作する必要があったがその場合資料が mm 単位になってしまうため、例外として実物サイズのミニチュアをそのまま展示することにした。

全体を通していえることではあるが、展示ケース、配置においてゆがんだものは見栄えを一気に落とす要因となる。展示ケースをプラバン等で自作する人も多くいるようだが、私は透明なケースを 100 円ショップで購入し、上からかぶせた。ゆがみもなく透明度も高い、制作時間も短縮できるのでコスパはよかったと感じる。紙類は両面テープ、その他の展示物は瞬間接着剤を使用したので搬入当日までに破損することはなかった。

図 2　ミニミューアジムの全貌

図 3　新聞、A4 チラシ、大学案内など実際に縮尺を考えたもの

図 4　印刷で作成した壁紙、ドア、掲示物等

図 5　100 円ショップの透明
ケースを使用したディスプレイ

５．図録・ポスター

まずは図録についてだが、私は埋められるところから埋めるよう心掛けた。凡例やご挨拶、謝辞などはすでに定型文があらかた決まっているためそれらを活用し、現状分析やコンセプトなどは決めていたものを使用した。資料目録や平面図に関しては模型を作る際に使用したものを利用するため最後に取り掛かかったが、そもそも私は模型制作に重点を置いていたため、これから制作しようとする人は、図録に関して参考にする場合は他履修生の情報を参考にするといいと思う。

ポスターに関しては、作成したミニミュージアムの写真を撮り使用した。私に限られることではあるが、ミニミュージアムは私が制作するミニチュア作品の一つになる。一見するとその写真は、ただ博物館内の写真を貼っただけのように思えるかもしれないが、この博物館こそが私のミニチュアであり､展示物であるという意味を持つ｡写真に加工を施し、必要となる情報を入れ、少し謎めいたポスターにすることでミニチュアが織りなす魅惑の世界を表現することを意識した。欠点をひとつ述べておくと、学校に提出した際に直射日光に直撃してしまった私のポスターは、その後よれよれの姿に変貌を遂げる。良い子の受講生は少し厚い紙に印刷するか、表面を何らかの手法でコーティングするのがおすすめである。

図 6　作成したポスター

６．おわりに

ミニミュージアム制作では、様々な面で他分野の能力を必要とされる。しかしそれはテーマ設定から設計までにおける自由度ゆえであると考える。自分で多くのことを考え、組み立て、実行することは限られた時間の中ではとても難しいことであり、投げ出したくなることもあるかもしれないが、それでもなお自分の好きなことを具現化していくことは楽しいことである。これまでに学習した既存の知識を活用して博物館らしい博物館を作るというのももちろん魅力的だが、そうした普遍の枠を超えた新しいオリジナルのミュージアムにこそ見ることができる魅力もたくさんあると考える。そのため、受講生は自分だけの発想を楽しみ、自分だけの世界を創り上げる必要がある。「とても大変な講義」と名高いこの講義だが、私はあまりそうとは思わなかったし、なにより有意義な作品制作ができた。

私事ではあるが、2022 年 12 月にとても小さな個展を開催した。その際は、まだ 2 年次だったこともあり、作品を並べて見てもらうだけの展示を行ったが、今回の講義を通して新たに学んだことが多くある。次回個展を開催する際には、当時は気づけなかった様々な視点から自分の作品を見つめなおし、どのような展示手法でどのように魅せるのか、より深く考えていきたいと感じていた。

そんな中、2024 年 3 月末から第 2 回となる個展の開催が決定した。ポスター・ビラの作成に加え、SNS での呼びかけ強化、地域広報や新聞での呼びかけ、郵便局窓口での宣伝活動、郵便物との同時ビラ配布などを行う予定である。また、来場者全員プレゼントや抽選会の実施など、展示以外にも遊びに来たくなる要素を追加している。ディスプレイは、コンセプトを設定し、独自の世界観を演出できるように工夫を施したいと考えている。限られたスペース内にどれだけ魅力を詰め込むことができるのかが問われるが、その際には学芸員としての視点を大切にしたいと思う。

博物館概論/博物館資料論 講評
『学芸員課程の転換期』

北海学園大学講師　　水崎　禎

学芸員課程の転換期

日本の学芸員課程の変遷をみると、これまで何度かの大きな転換期があったと言える。今年度の学芸員課程も新たな転換期として捉えることが出来る。これまでの転換期は、博物館の存在目的の中で、その時代において強調される要素が学芸員課程省令科目の改定という形で表れている。

右図[*]は、『博物館概論』の授業で提示している「学芸員課程省令科目の改定」である。『博物館学』という大きな枠は、1996 年の改定（1997 年度より施行）により、『博物館概論』『博物館経営論[注1]』『博物館資料論』『博物館情報論』の 4 つの『～論』へと細分化された。これは各『～論』についてのより専門的な知識が必要であると認識された結果であると言える。また、『社会教育概論』が『生涯学習概論』へと変更されたことについても、世の中に対して「博物館の役割」としてアピールする事項の変化が背景にあると考える。それまでは、所蔵資料の研究がメインの役割と認識され、実際の職務、および求人形態もこの認識に沿ったものであったと見て取れる。しかし、この改定は、所蔵資料の保存・研究と同様に、教育機関という要素の重要性の認知と世間への啓発が背景にあったと考える。2009 年の改定（2012 年度より施行）では、新たに『博物館資料保存論』と『博物館展示論』が加わり、『博物館情報論』と『視聴覚教育メディア論』が統合されて『博物館情報・メディア論』となり、『博物館教育論』が『教育学概論』に取って代わり加えられたのが上の改定表[*]から見て取れる。これは、教育機関としての博物館の在り方についての更なる意識づけの必要性の反映であり、教育手段としての展示ということに関しての考え方に基づく手法についての知識が学芸員にとって必要不可欠であると正式に認められた証ともいえる。博物館資料の保存について、『博物館資料論』で言及するには時間が足りないということについては、過去の学事報告書[注2]でも言及しているが、これは『博物館資料保存論』が加えられたことにより、学芸員にとっての資料保存についての知識の重要性が公式に認められたともいえる。そして、今回の転換期は上述のような、いわゆる学芸員課程省令科目の

	博物館法施行規則 附則〔平成 8(1996)年 8 月 28 日文部省令第 28 号〕 平成 9(1997)年 4 月 1 日より施行	博物館法施行規則 附則〔平成 21(2009)年 4 月 30 日文部科学省令第 22 号〕 平成 24(2012)年 4 月 1 日より施行
社会教育概論	生涯学習概論	生涯学習概論
博物館学	博物館概論	博物館概論
	博物館経営論	博物館経営論
	博物館資料論	博物館資料論
		博物館資料保存論
		博物館展示論
	博物館情報論	博物館情報・メディア論
視聴覚教育	視聴覚教育メディア論	
教育原理	教育学概論	博物館教育論
博物館実習	博物館実習	博物館実習

［＊］学芸員課程省令科目の改定

改定としてあらわれるものではなく、博物館法の改正によるものである。これに伴う授業内容の変更については以下に述べる。

博物館概論の授業計画での修正点

博物館法の改正により、博物館概論での授業内容で特に大きな修正を加えた項目は、「登録博物館」の在り方についてである。2012 年から博物館概論を担当させていただくようになり、当初から日本の博物館法による「登録博物館」「博物館相当施設」という分類については、大きな問題があると講じてきた。しかし、2022 年の博物館法改正により博物館登録制度の見直しが盛り込まれ、2023 年 4 月 1 日より施行となった。2023 年度は施行後初の年度となるため、日本の博物館法についての講義では、この変更について、法改正前の博物館法を提示し、その問題点について言及したうえで、「新たな動きがあり、今年度からは、このように変更された」という形式で授業を進めた。次年度（2024 年度）からは、授業での説明を「これまではこのような問題点があったが、昨年度からはこのように変更となった」というスタンスへ修正を施す予定である。

博物館資料論の授業計画での修正点と改善点

博物館法の改正では「法律の目的及び博物館事業の見直し」として「博物館の事業に博物館資料のデジタル・アーカイブ化を追加する」との一文が加えられ、この件についての対応としては、昨年度の博物館資料論から急遽、デジタル・アーカイブと関連した、資料保存、展示での活用等についての授業を追加した[注２]。今年度は、博物館資料論の授業開始時から、学期後半でのアーカイブ関連のトピックを取り入れた授業計画で始めたが、デジタル・アーカイブについてツギハギ的に付け足すのではなく、博物館資料論の授業の流れの中に上手く取り入れるには何をどう取り入れるかについてかなり悩まされた。他大学で担当している科目では、『文化情報アーカイブ論』と『デジタル・アーカイブス論』があり、これらの科目で博物館資料のデジタル化と活用について講じることが出来るとともに、『博物館情報・メディア論』でもデジタル・アーカイブについて講じている。しかし、本学においては『博物館資料論』の中の限られた時間内で深く講じることの難しさを感じており、今年度以降の授業では、更なる工夫と修正が必要であると痛感している。このテーマについて学生に効果的に学んでもらうためには、可能であれば学芸員課程の科目全体としての共通認識のもと、『博物館展示論』や『博物館教育論』等の科目との連携が必要であると考えている。

［注１］筆者（水崎）は『博物館経営論』という科目名について、『博物館運営論』とするべきであると説いている。この解釈は、「“museum”（博物館）という機関の特徴を踏まえると、“museum administration”（博物館運営）の方が適切である」という筆者の考えに基づいている。[注３]

［注２］水崎禎「2022 年度 博物館資料論 講評『博物館資料としてのデジタル・アーカイブと活用』」、『北海学園 大学学芸員課程学事報告書第 35 号』手塚薫(編)、北海学園大学学芸員課程、2023 年

［注３］水崎禎「学芸員課程省令科目の構成についての見解と博物館経営論の在り方」、『北海学園 大学学芸員課程学事報告書第 26 号』手塚薫(編)、北海学園大学学芸員課程、2014 年

博物館資料ドキュメント　『1972年札幌冬季オリンピック貯金箱』

人文学部日本文化学科１年　　東田　純奈

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

この資料は「貯金箱」である。北海道拓殖銀行（以下拓殖銀行）でつくられたもので、拓殖銀行のイメージキャラクターである「たくちゃん」がアイスホッケー選手の恰好をした人形型の貯金箱である。

「たくちゃん」が赤と白のユニフォームに身を包み、前傾姿勢をとって構えているのが特徴的である。背中には鮮やかな青色で「11」という背番号が刻まれている。硬貨を投入するための穴は後頭部にある。頭部分と胴体部分は取り外すことができ、この二つを取り外すことでお金を取り出すことができるようになっている。硬貨を投入するための穴の下には「たくぎん」とかかれている。左足の裏側には「たくちゃんのアイスホッケー」と書かれている。胸元にあるシールは拓殖銀行のマークのシールであるが、入手時から折れてしまっており、半分は本体からはがれてしまっている。しかし、折れた部分を戻してやれば掠れてはいるものの、北斗七星と大地にねざした大樹をモチーフにした拓殖銀行のマークを見ることができる。

古いものなので全体的に塗装のはげや擦れが見られる。顔の右側には輪ゴムで縛っていた時の一部が残って付着してしまっていたり、頭部と胴体のつなぎ目に当たる部分は双方が擦れたことによってできる塗装のはげが見られたりする。ただ、古い資料ではあるものの匂いにはそこまで気になる点がなかった。ソフトビニル特有の匂いはあるものの激臭は感じられないし､ソフトビニル製品の劣化時に見られるという特有のベタつきもなかった。

全長は11.0cmで、正面から見たときの幅は一番幅の広い足元部分で5.5cmである。正面から見たとき首部分が一番すぼまっており、3.0cm である。奥行（横から見たときの幅）はお尻部分で計測して5.0㎝である。一番すぼまっている首部分は正面からの幅と同じく3.0㎝である。重さは60gである。入るお金の量は100円玉で約20枚、10円玉で約25枚である。50円玉、1円玉、5円玉については未検証であるが、いずれも100円玉、10円玉の両方より直径が小さいため、100 円玉の時に入った 20 枚以上は入るのではないだろうか。500 円玉に関しては貯金箱に入れることができなかった。硬貨を投入する穴の大きさが 2.5 ㎝で、500 円玉の直径が 2.6 ㎝であり、500 円玉の直径が硬貨を投入する穴の大きさを上回ったからである。当時は 500 円硬貨が製造される以前で、500 円紙幣が流通していた。

貯金箱本体はソフトビニルでできていると考えられる。しかし、スティック部分はソフトビニルとは質感が異なり、プラスチックでできているものと思われる。入手時にはスティックも全体が残った状態で譲り受けたが､スティックの柄の部分が折れてしまったため、折れた柄は既に破棄されている。現在ではブレードと呼ばれる部分のみが残っている。

この資料は寄贈者（以下「J.A.氏」）が、亡くなった祖母から譲り受けたもので、正確な製造時期は不明である。しかし、このたくちゃんの貯金箱シリーズは1972年の札幌冬季オリンピックに向けて製造されたものであることから、この貯金箱の製造時期はおよそ1972年前後であると推察することができる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

これは2019年頃にJ.A.氏が祖母から譲り受けた。譲り受けた当時、貯金箱の中には100円玉が合計20枚入っていた。J.A.氏には姉がおり、その姉に2000円のお小遣いを与えた祖母がJ.A.氏にはこれを、と言って与えてくれたのが、この100円玉の詰まった貯金箱であった。

祖母はすでに亡くなっており、この貯金箱を入手した経路などはわからないが、祖母が、姉に与えたお小遣いと同じ金額になるように貯金箱に100円玉を詰めてくれたかと思うといいようのない温かい気持ちになると、J.A.氏は話している。

なお硬貨を取り出す際には頭部を胴体から外す必要があるが、劣化のためかなり硬くなっており、当時14歳であったJ.A.氏は自力で開けることができず、父に開けてもらった。その後、頭部と胴体をまた合体させようとするも硬くてできず、今日まで頭部と胴体は外れた状態で保管されていた。このレポートを作成するにあたり、19歳のJ.A.氏が頭部と胴体の合体を試みたものの、硬くてできなかった。そのため、また父に合体してもらった。

ちなみに祖母にもらった当時に貯金箱に入っていた100円玉は、一部は使用し一部は貯金をした。さすがにどの硬貨かはわからないものの、当時使用していた、本資料とはまた別の貯金箱は今でも同じものを使用しているので、もしかしたら今でも当時もらった 100円玉が貯金箱の中に入っているかもしれない。

たくちゃんの貯金箱を貯金箱として利用しなかった理由は、先述したように500円玉が入らなかったり、自分一人では貯金したお金を取り出すことが出来ず、父の手を借りる必要があったりしたからなどの理由がある。

また、この貯金箱は譲り受けてから半年ほどは、置物として利用しており、J.A.氏の自室にある日光の当たらない位置にある本棚の上に置いてあったが、ほどなくして勉強机の引き出しの中へ移動された。今回のレポート作成のために引き出しから出すまで、およそ5 年程度は通気性のない暗所で保管していたことになる。その状態でも劣化が激しく進まなかったのは幸運といえる。

この貯金箱には、「たくちゃんの〇〇シリーズ」というようなシリーズがあり、「たくちゃんののりものシリーズ」「たくちゃんのスポーツシリーズ」などがある。

1972年のオリンピックに向けて、日の丸を背負った貯金箱も製造されており、スキーや聖火リレーなどに挑戦するたくちゃんの貯金箱もある。

コンディション・レポート（Condition Report）

資料としてのコンディションは良いとは言い難い。祖母から譲り受けたものであるため明確な製造時期は不明だが、オブジェクト・ディスクリプション・レポートでの推察にもあるように大まかな製造時期は1972年前後であると考えられる。よって、相当な年数が経過していることが予想されるため、経年劣化も多くみられる。

特に大きな破損個所として、アイスホッケーのスティックが折れ、本体から外れていることが挙げられる。この貯金箱の両手部分には穴が開いており、これは本来スティックを刺し通すための穴であったが、そのスティックは柄の部分が折れたのち紛失してしまっている。

大きくペイントの掠れが見られるのは首回り、後頭部、スティックが刺さっていた穴付近である。首周りに関しては先述したように、この貯金箱が頭部と胴体を外すことでお金を取り出すものなので、硬くなった貯金箱を開けたり、逆に元に戻したりするときに必然的に負荷のかかりやすい場所だといえる。スティックの穴付近に関しても後付けでつけられたスティックが穴とぶつかり擦れたりしてしまう部分なので劣化は致し方ない。後頭部のペイントの掠れに関しては先に挙げたような「擦れ」たようなものではなく、なにかが溶けたような跡になっているので、ゴムか何かが接触したまま放置され、それが溶けたことで塗装が剥げたのではなか、と予想される。

また塗装が剥げているわけではないが、顔の右側には乾いた輪ゴムの一部がついてしまっている。これは、頭部と胴体を外したまま保管していた時に、両者がバラバラにならないように輪ゴムで止めていた時のものである。くっついていた輪ゴムのうちある程度は剥がすことが出来たのだが、一部は本体にこびりついてしまっており、剥がすことが出来なかった。

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

この貯金箱の主な材質はソフトビニルである。ソフトビニルとはPVC（ポリ塩化ビニル）のことを指し、一般的な合成樹脂（プラスチック）の1種である。塩化ビニール、塩ビ、ビニールなどと略されることがあるが、所謂ソフビ（ソフトビニール）と呼ばれる人形は硬質塩化ビニールに可塑剤を添加して柔らかくし、型に流し込んで形成している。

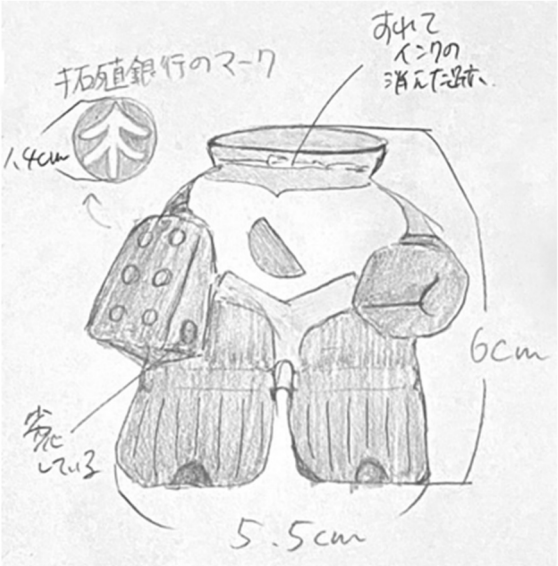
数年で黄色に変色してしまうような事はないが、日光の当たる場所や手垢などがつきやすい環境に長く置かれていると黄変したり、ブリードと呼ばれる現象（油でネチネチした手触りになる）が起こったりする場合がある。これは、可塑剤の恒久的な科学反応と関係がある。

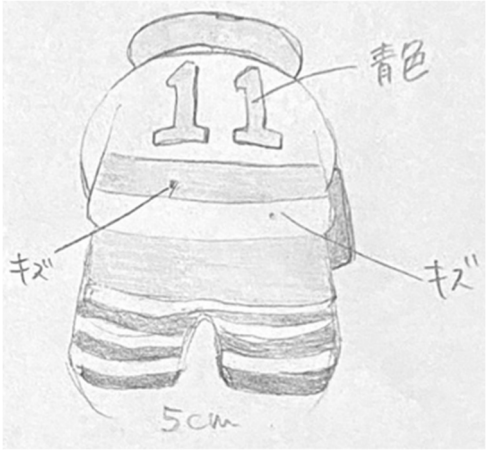
他にも、通気性の悪い密閉したケースに入れておく、温度、湿度の高い場所に置いたままにしておくといった行為が重なると、劣化が起こりやすくなる。

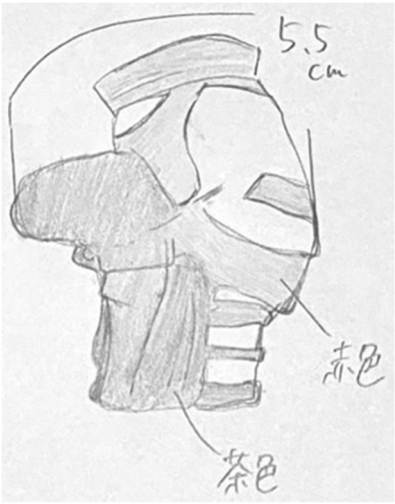
通気性の良い冷暗所がソフビを保管するのには最適な環境なので、普段は直射日光が当たらないような、涼しい場所での保管が望ましい。またケースなどに入れている場合は、ケース内の換気にも気をつけるとソフビの品質を保つことができる。

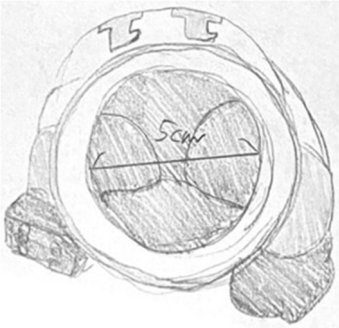
資料は、現時点ではブリードは起こっていないが、今後そうならないためには上記のことを意識する必要がある。

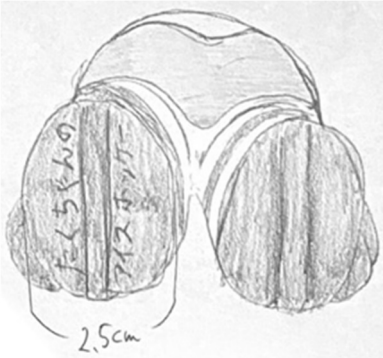
イラストレーション（Illustration）

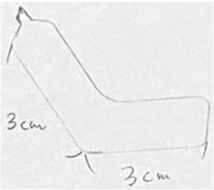




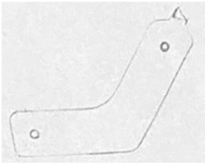




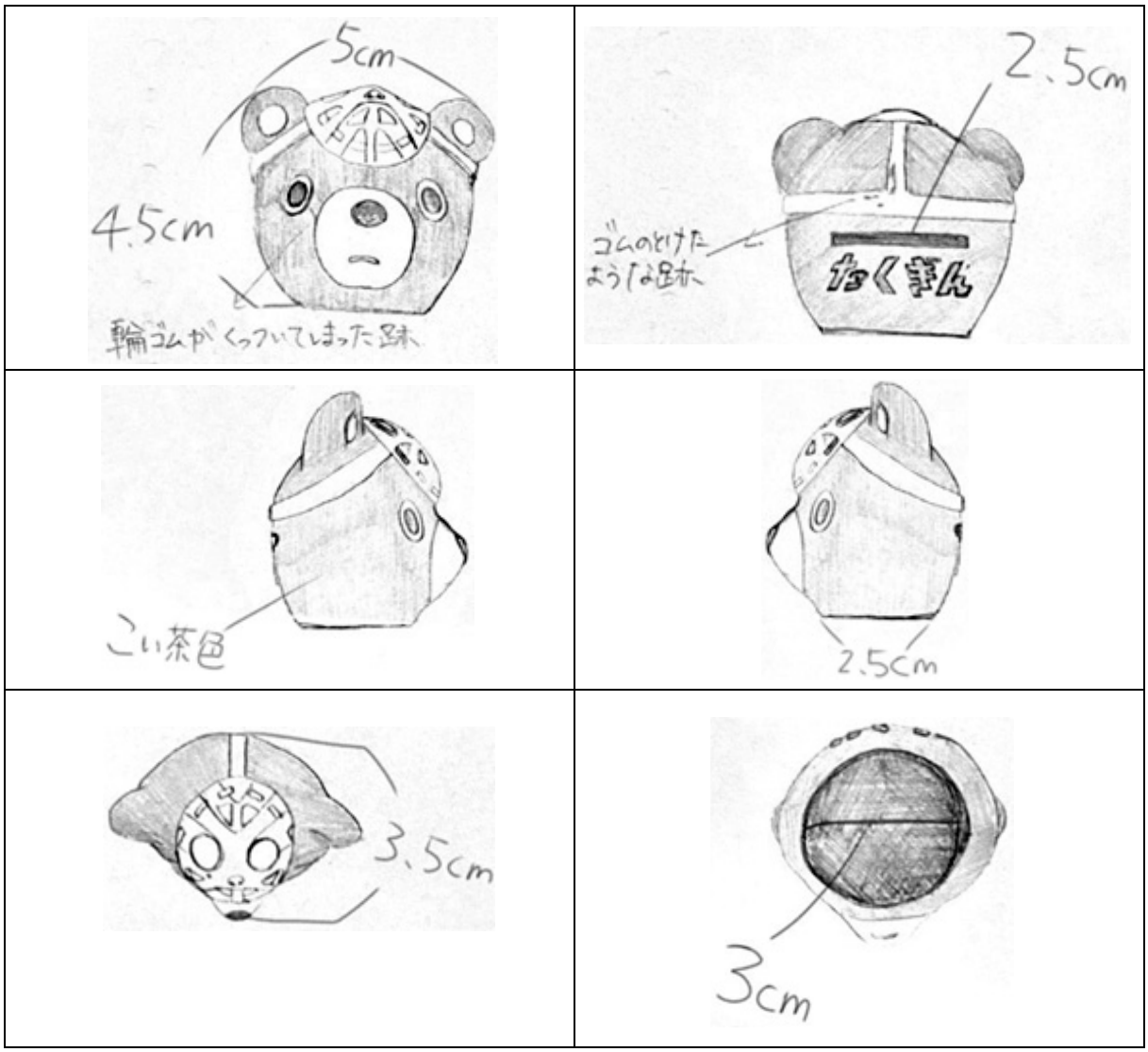




スティック〔表〕



スティック〔裏〕



ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

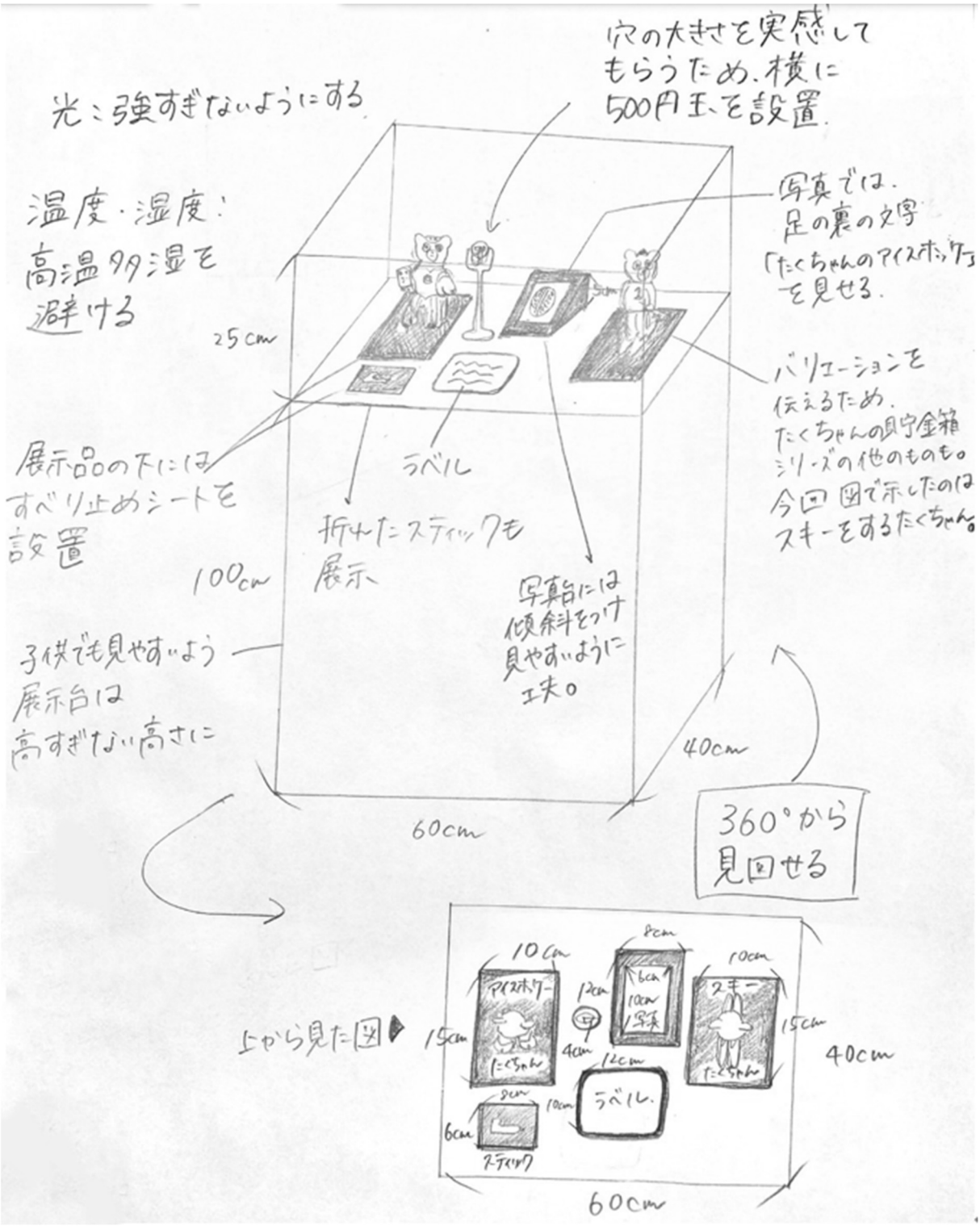
劣化が進んでいるため、これ以上破損させないように取り扱いには細心の注意が必要である。ガラスや陶器でできているわけではないので、落としたから割れるといったようなことはないが、本体の材質であるソフトビニルは、その性質上熱に非常に弱い。熱源の近くに長時間放置するなどのことがあれば容易に形が変わってしまうので注意が必要である。

スティックはプラスチックでできているため割れやすかったり折れやすかったりすることが予想される。

リクワイアド・エンバイロメントでも述べたように、ソフトビニルは手垢などをつけるとブリードと呼ばれる現象が起こってしまう。劣化を進めさせないためにもこの資料に触れる際には手袋の着用などが望ましい。

また、既にこの資料にもみられるが、ゴムの溶けたものや輪ゴムなどが長時間付着してしまうとそこが変形、変色、輪ゴムがくっついて取れなくなってしまうなどの恐れがあるため、この資料を扱う際には、本体にゴムなどが付かないように注意が必要である。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）



展示は見やすいよう、透明のケースに入れて展示する。換気が可能な構造のケースが望ましい。また、先述したように、このたくちゃんの貯金箱にはシリーズがあるので、そのバリエーションを見せるために、ほかの貯金箱も並べることが出来たらよいと考える。

貯金箱は頭部と胴体が外せるが、この二つは合体させた状態で展示するのが良いと思わ

れる。貯金箱として使用するとき（＝お金を入れるとき）には頭部と胴体は合体させた状態で使用するものだからである。

この貯金箱は後ろに「たくぎん」と書かれていたり、お金を入れる穴があったりするので、来館者が後ろからも貯金箱を観察できるように、全方向から観察できる展示台であることが望ましい。

足の裏の「たくちゃんのアイスホッケー」という文字は見せるのが難しいため、写真を撮って資料の近くに配置するのが良いと考える。

500 円玉が入らないというのは来館者に驚きと発見を与えられると思うので、資料の穴のそばに 500 円玉を置き、「確かに穴の大きさ的に 500 円玉が入らなさそう。これは 500 円玉が製造されるより前に作られたものなんだ」ということを実感してもらいたい。

レーベル（Label）

資料ラベルのサイズは、展示に合わせて約 10cm×12cm で作成。

資料名は 18pt、ラベル本文は 14pt で作成し、見やすさを意識し、大きめの文字を選択。

ラベルの文字は、資料名は柔らかさも与える HG 丸ゴシック M-PRO を、本文は見やすさと銀行のかっちりしたイメージをもとに游ゴシックを選択している。

ラベルの縁は、たくちゃんが着ているユニフォームの色に合わせて濃い赤色にしている。

ラベルの背景色はアイスホッケーをイメージできる白に、文字色はたくちゃんを意識し、黒に近い茶色を選択している。

あえて資料の一部分に言及する文章にすることで、来館者が「背中側にある文字はどれだろう」「確かにシールが貼ってある」というように隅々まで興味を持てるように工夫されている。また、あえて来館者に想像させる余地を残す文章にすることで、「ほかにはどんな種類があるのかな」と意識を向けてもらえるようにしている。

この文章は展示と連動しており、ラベルを見た後に展示台を見ると実際に「アイスホッケー以外の種類」の貯金箱も展示していることに気付けるようにしている。ラベルを読んで感じた疑問をその場で答え合わせできるような展示形態となっている。

拓殖銀行の貯金箱

これは北海道拓殖銀行が 1972 年の札幌冬季オリンピックに合わせて製造した貯金箱です。背中側には「たくぎん」の文字が、胸元には拓殖銀行のロゴマークのシールが貼ってあります。

拓殖銀行のイメージキャラクターである「たくちゃん」がアイスホッケーに挑戦する様子が貯金箱になっていて、この貯金箱シリーズにはアイスホッケーのほかにも様々な種類があります。

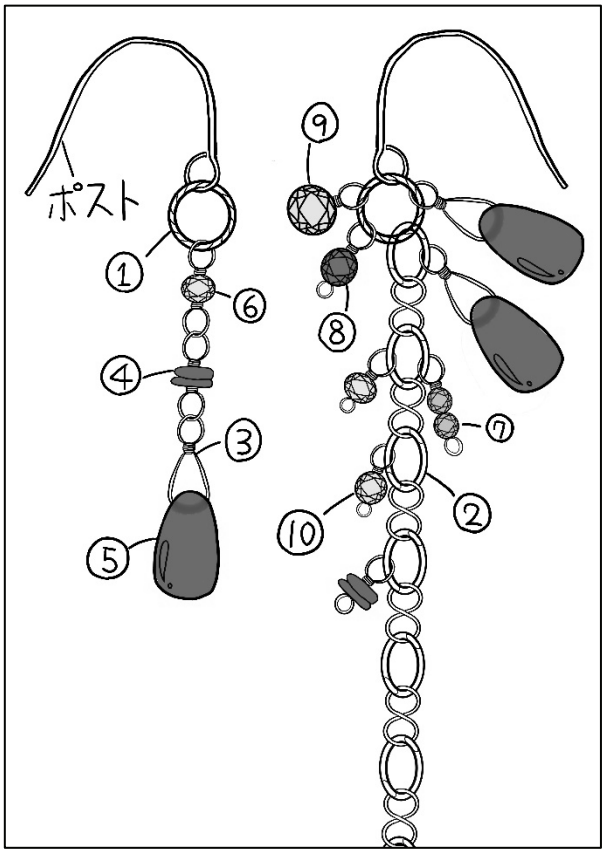
寄贈年：2023 年

博物館資料ドキュメント　『フックピアス』

人文学部日本文化学科 2 年　　伊藤　乃葵

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

資料名：フックピアス
材質：
ポスト…ステンレス製　18kgp〔注〕
丸カン ①…ステンレス製　16kgp
チェーン ②…ステンレス製　16kgp
ワイヤー ③…ステンレス製
宝石 ④・⑤…ネオンブルーアパタイト
宝石 ⑥…アパタイト
宝石 ⑦…ピンクトルマリン
宝石 ⑧…グリーンオニキス
宝石 ⑨…水晶
宝石 ⑩…グリーントルマリン
質量：2ｇ
製造者：現所有者の母親
製造国：日本
製造日：2022 年 8 月以前



〔注〕18kgp…18 金でメッキ加工済の意

本資料は、身体の一部にピアスホールと呼ばれる穴を貫通させ、その穴に通して身に付けるピアスと総称される装身具の一つである。種類は大きく分けて 4 種類あり、スタッド（鋲）の意を取った、主に普及されている定番デザインである「スタッドピアス」、釣り針形状で揺れ動くデザインの「フックピアス」、ピアスホールに輪を通したデザインになる「フープピアス」、ピアスホールに細長いチェーンを通すデザインである「アメリカンピアス」がある。本資料のタイプのピアスは、「フックピアス」と呼ばれるタイプのものであり、イヤーローブと呼ばれる耳たぶ部分にピアスホールを貫通させ、左右に 1 つずつピアスを着用することが多い。主に女性のピアッシング（ピアスホールにピアスを通す行為のこと）である。釣り針状のポスト（耳たぶを貫く軸部分のこと）を引っ掛け着用するため、スタッドピアスなどを着用する上で欠かせない、ポストを固定するための留め具であるキャッチが不要の場合が多い。外れにくいフォルムのため、装着時の紛失が少ないのも特徴。形状として揺れ動くため、飾り同士が衝突し合い傷がつきやすい。また、身体に直接的に着

用するため、皮脂などによりポスト部分の劣化が早い。その場合には、ポスト部分を分解し、一度バラバラになったパーツを新しいポストに付与することで解決する。

ピアスは本来、古代エジプト文明や古代インダス文明で、邪悪なものから身を守るための「魔除け」として着用されていた。ハワイアンジュエリーと呼ばれるタイプのピアスである「ホヌ」や「プルメリア」などのモチーフは、幸運のお守りとして現代でも多く着用されている。本資料にも、宝石の部分は全てパワーストーンが使用されており、ファッションとして、または魔除けやお守りとして着用していたとも考えられる。

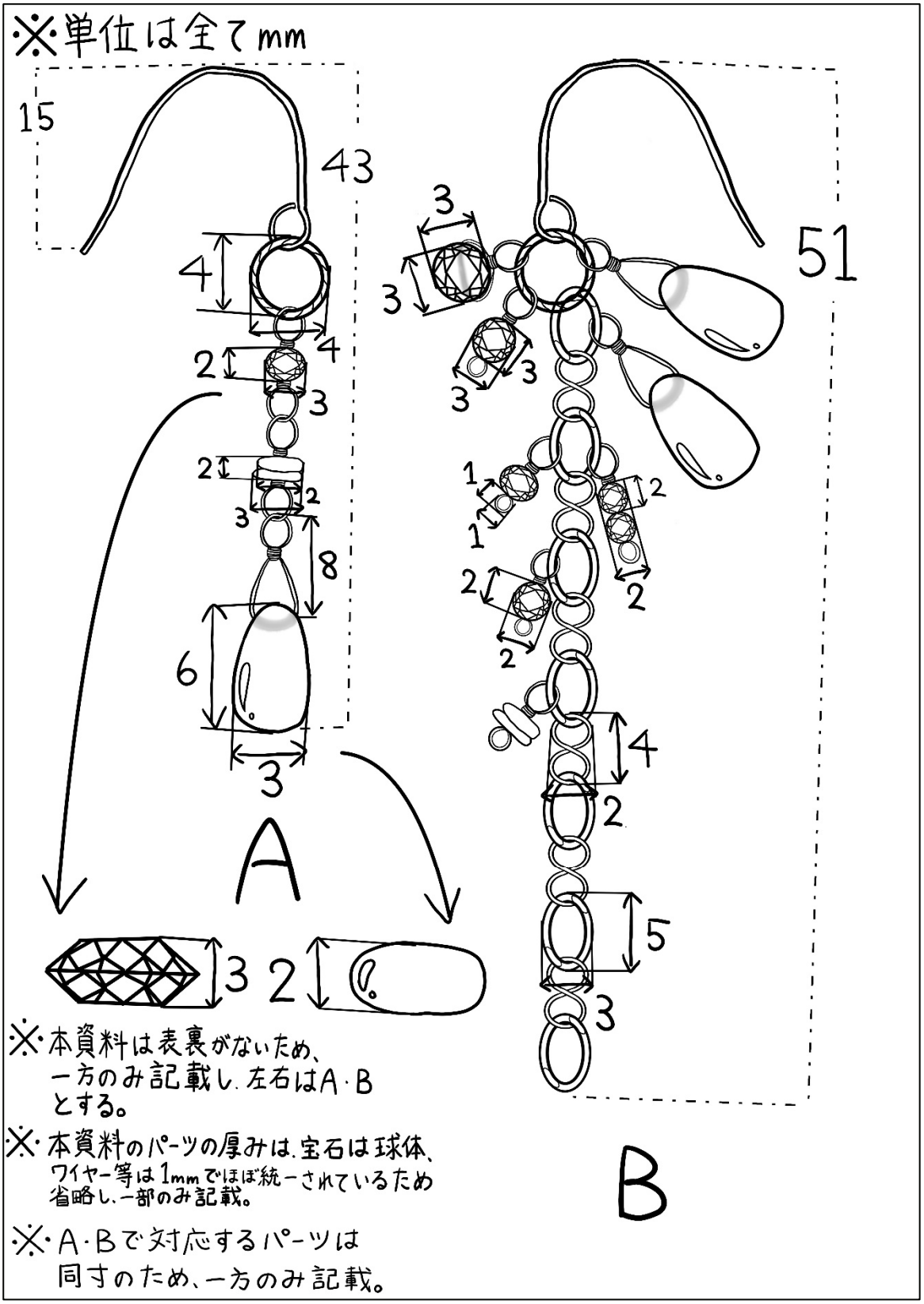
素材は、宝石部分以外は全てステンレス製（金メッキ加工有り）であり、宝石部分はそれぞれ､ネオンブルーアパタイトのロンデルとペアシェイプ､アパタイトのボタンカット、ピンクトルマリンのラウンドカット、グリーンオニキスのラウンドカット、水晶のボタンカット、グリーントルマリンのラウンドカットが施されている。質量は二つ合わせて 2ｇであり、片耳 5ｇが重いピアスの一般平均値とすると、かなり軽量である。

また、製造者が「現所有者の母親」と記載されているが、本資料は現所有者の母親のハンドメイドアクセサリー作品であり、同一のものは存在しておらず、これは非売品の作品の一つである。2022 年の 8 月には既に存在が確認できているため、製造年は 2022 年 8 月以前であると考えられる。本資料は、ポストは丸カンで繋がっており、宝石はアーティスティックワイヤーを変形させて固定されている。もう片方はほぼ同じ形状であるが、丸カンに一部チェーンが付与されており、そのチェーンと宝石を繋ぐのもアーティスティックワイヤーである。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

本資料は、現所有者である伊藤乃葵が、2022 年の 8 月頃（当時 18 歳）に大学の夏季休暇で実家に帰省した際、母親が身に付けていたものを譲り受けて入手したピアスである。使用期間は同年 8 月から 2024 年 1 月現在の一定期間であり､常に着用しているわけではない。未着用時はお菓子の缶に収納され本棚の一部に保存されているため、保存環境や状態は不良。宝石部分であるパワーストーンの耐久性を知りたいという理由から、本資料が製作されたと現所有者は聞いている。そのため現所有者は耐久度を測るために、入手時点から現在までなるべく着用するようにしていた。また現所有者の入手動機としては、パワーストーンによる特殊な力を知覚できるであろうと考えたからである。本資料の製作者は、本資料製作前も様々なハンドメイドアクセサリーを製作していたが、パワーストーンを使用したハンドメイドアクセサリーは、本資料が初製作である。また、使用されているワイヤーは製作者本人が曲げて製作しているため、製品誤差がある。

イラストレーション（Illustration）

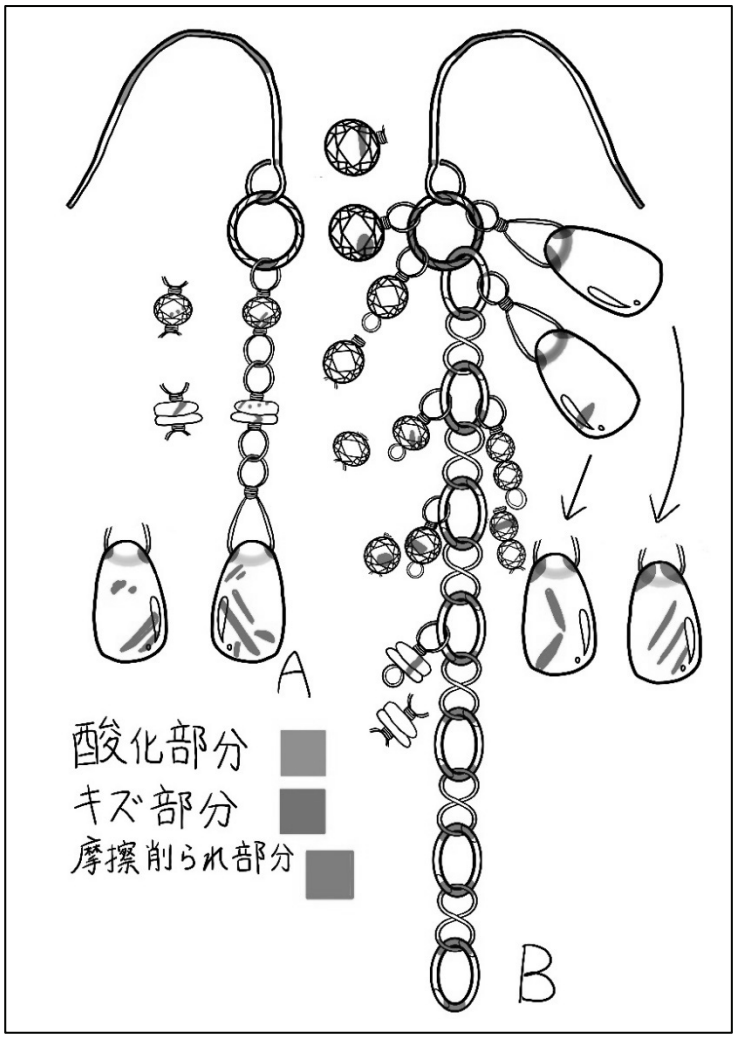


コンディション・レポート（Condition Report）

本資料入手時から 2024 年 1 月現在まで、常に継続して着用していたわけではないが、定期的に着用していたため、全体的に資料の状態は良くない。また、イラストレーション（Illustration）でも記載したように、本資料には裏表が存在しないため（ほぼ全てが球体のため）、片面を表とする場合の裏面を記載し、コンディション・レポート（Condition Report）を作成した。左右も存在しないため、Ａ・Ｂとして記載する。

ポスト部分は、身体のピアスホールに直接触れるため、皮脂汚れによる酸化で変色してしまっている。特に損傷が激しいのはピアスホールに留まる部分。ポストの変色については、ピアスホールに留まる部分と、はじめにピアスホールに触れる先端部分、丸カンを繋ぎ止める部分が、塗装が剥げて金色から鉛色に変化している。これは新しいポストと交換することで修正が可能だが、完全なオリジナルではなくなってしまうことを考えなくてはならない。

身体に直接的に触れない部分の劣化としては、宝石部分では外部からのものだと思われる数 mm 程度の傷が多数箇所に入っている。視認できる傷は図に記載している。しかし、視認はできない細かな傷はさらに多々入っていると考えられる。いつ頃傷がついたのかは不明。入手直後にはなかったことから、2022 年 8 月から 2024 年 1 月現在までの期間ということはわかる。



金属同士が摩擦によって削られてしまった部分も多々ある。ワイヤーやチェーンが多い資料Ｂに多い。また、その部分の一つに、資料Ｂのチェーン部分の一番最後がある。恐らくここにも宝石部分が付与されていたと思われる傷だが、本資料を入手した際には既に失われていたため、実際のところは不明である。

耐久性を測るため、着用したまま入浴していたため、水分に湿度による劣化や温度差によるワイヤー等の変形も起こっていると考えられる。

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

本資料は主に金属（ステンレス製）と宝石の２種類から構成されており、ステンレスは鉄より錆にくい素材であるが、これ以上の金属の酸化や錆を防ぐため、温度は 17～20℃、湿度は 40％以下が望ましい。30％程度でも許容されると考えられるが、低湿過ぎると乾燥して破損する恐れがある。また、酸素による酸化を防ぐため、密閉空間での保存も検討する。温度差によりワイヤーが変形してしまう可能性もあるため、展示や保存で温度は一定に保たなければならない。

宝石は油分やアルコールに弱いため、展示などで外に出した場合は、柔らかい布等で全体を拭き取る等の作業の必要性について検討する。また、宝石は様々な硬度や靭性があるため、個別に保存することが望ましく、バラバラにならないため、重ならないように置き、小さな緩衛材等で包むことで接触面を減らす。また、紫外線で劣化する恐れがあるため、直射日光や紫外線を含む光が当たらないようにする。熱や水分によっての変色や劣化も懸念されるが、乾燥過多で宝石が割れる可能性があるため、乾燥剤は入れてはいけない。

保存容器には木箱に綿を敷き、その上に本資料を入れて保管するのが一般的であるが、広葉樹系木材に含まれる有機酸による酢酸塩、ギ酸塩の析出で、金属の表面が傷つく恐れがある。また、檜材の木箱は樹脂のヤニによる汚損があるため、完全な密閉空間でなく、ある程度の通気性は確保すべきである。

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

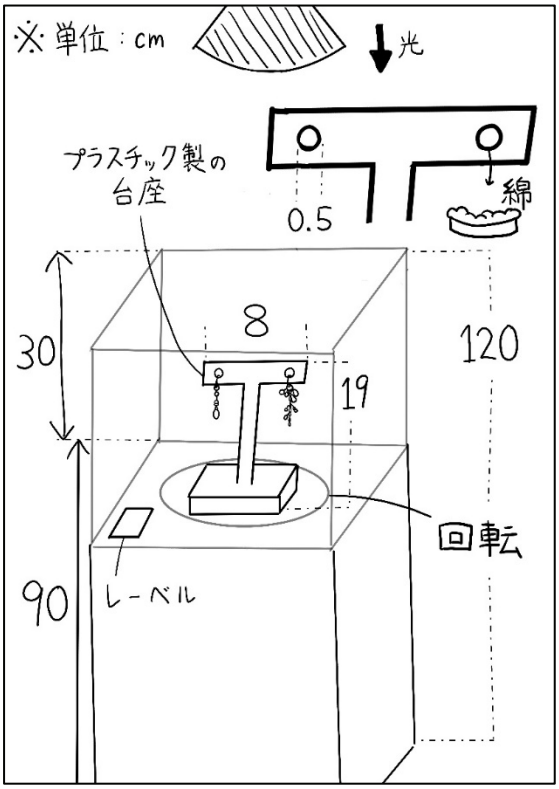
本資料は多数の宝石や細い金属を使用しているため、落下等の衝撃や、引き伸ばされる力に対して脆弱である。それにより緩衛材等は小さいものを重ねて丁寧に巻く必要があるが、使用されているアーティスティックワイヤーは子供でも簡単に曲げることのできる非常に細いワイヤーであるため、なるべく大きな力を加えないよう注意する。展示などで移動させる際は、学芸員一人でも運ぶことは可能だが、金属同士の摩擦が起きないよう、資料を揺らさないようにすることが求められる。また、資料を木箱から取り出す際には、宝石が衝撃で割れないよう、手袋の他に柔らかい布などを介するのが望ましい。持ち上げる際はポスト部分を持つのが一般的だが、劣化が進んでいるため皮脂がつかないよう必ず手袋を着用する。ワイヤー部分やチェーン部分は引き伸ばされる力に特に弱いため、極力触れてはいけない。展示や移動の際は、鋭利なものが近くにないか確認する。

宝石部分は展示や移動した際、視認できない汚れや埃が付着している可能性があるため、一度全て柔らかい布等で拭き取る作業について検討する。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）

本資料はフックピアスの特徴である「揺れ動く」こと、「穴に通して使用する」ことを伝える展示とするために、展示ケースは実際に資料を展示する透明ケース、回転させる動

力源のついた土台のケースの二つから構成する。透明ケースは 30×30(cm)の正方形にし、裏表のない本資料をどの角度からでも見られるようにし、別の種類のピアスも横に並べて展示した際、見栄えが良いようにした。また、展示ケースの土台底は、資料に影響のない範囲で徐々に回転させ、来館者が止まっていても資料全体を見られる仕組みにする。資料を直接設置して展示するスタンドホルダーは透明なプラスチックで作り、資料の映えを良くする。また、ピアスのホルダー（フック）を通すスタンドホルダーの穴には綿などを敷き、揺れによる摩擦を軽減させる。スタンドホルダーの底は重りなどを組み込み、更に地震などによる資料の損壊を防ぐため、回転している土台としっかり固定させる。

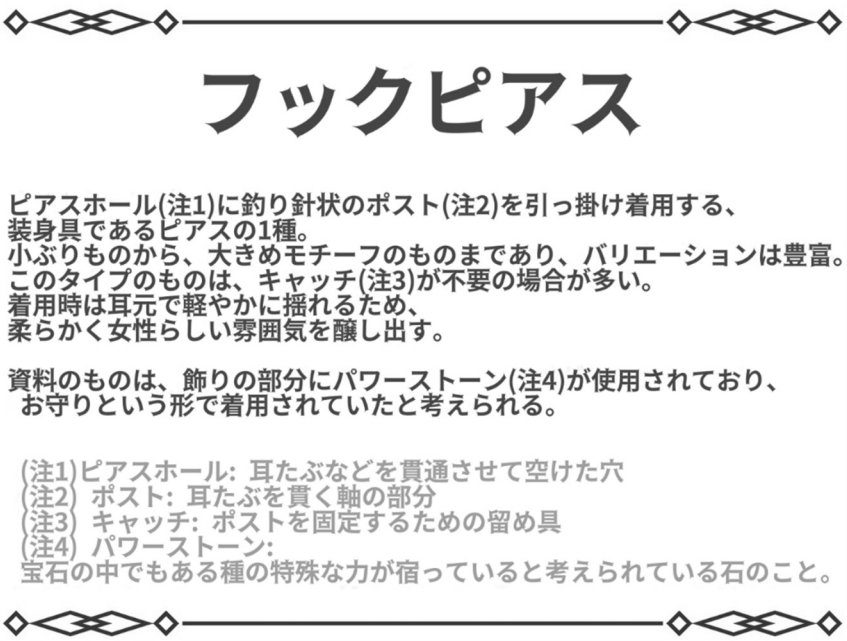


レーベルは通路側から見やすい位置に設置する。

展示ケース自体の高さは全体で 120 ㎝とし、子供でも大人でも見やすいであろう高さを想定している。110 ㎝にしても良いと考えるが、その際は土台部分の高さを低くする。

宝石の中には紫外線で劣化するものがあるため、光源は紫外線を遮断するものを使用し、最低限（可能であれば一ヵ所）とする。

レーベル（Label）



フックピアス

ピアスホール(注1)に釣り針状のポスト(注2)を引っ掛け着用する、
装身具であるピアスの1種。
小ぶりものから、大きめモチーフのものまであり、バリエーションは豊富。
このタイプのものは、キャッチ(注3)が不要の場合が多い。
着用時は耳元で軽やかに揺れるため、
柔らかく女性らしい雰囲気を醸し出す。

資料のものは、飾りの部分にパワーストーン(注4)が使用されており、
お守りという形で着用されていたと考えられる。

(注1)ピアスホール: 耳たぶなどを貫通させて空けた穴
(注2) ポスト: 耳たぶを貫く軸の部分
(注3) キャッチ: ポストを固定するための留め具
(注4) パワーストーン:
宝石の中でもある種の特殊な力が宿っていると考えられている石のこと。

博物館資料ドキュメント　『タオル（ツアーグッズ）』

工学部生命工学科１年　　楠本　玲来

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

この資料はジャガードタオルである。タオルとはタオル地で作った、西洋風の手ぬぐいのことである。ジャガード生地は、テーブルクロスやカーテン、絨毯などで見られる模様が織り込まれたものである。無地に文字やイラストを印刷するのではなく、凹凸や縦糸と横糸の色を変えるなど織り方で模様を表現している。あらかじめ染色した糸を使っているので、プリントタオルとは異なり、色褪せや色落ちがしにくいのが特徴である。

本資料は、日本のスリーピースロックバンド「おいしくるメロンパン」の 新グッズとして 2019 年のワンマンツアーより販売されたジャガードタオルである。グッズ名 は「海の仲間たち」、色は「カリブグリーン」である。

資料の裏面(文字が緑色)にあるタグによると、タオルの産地“四国今治”で染めて織られた日本製で、綿 100% の今治タオルであることが分かる。

形は一般的なフェイスタオルの形をした長方形のタオルである。サイズは、資料正面から見て縦 31.5cm、横 80.2cm、タオルの厚さ 0.2cm、縦両端は１回折り返して縫い合わせてあるので厚さ 0.4cm、縦両端折り返し幅 1.5cm である。タオル生地は毛の長いタイプで触るとモコモコと柔らかい感触で肌触りが良い。

資料表面はロゴやイラストの線がベージュで周りは深い緑色になっている。資料裏面は資料表面の色の場所と逆になっておりジャガードタオルの特徴がみられる。

タオルの海の仲間たちのイラストはおいしくるメロンパンのメンバー〔注 1〕全員で描いたものである。

タオル中央に「oisicle Melonpan」のロゴがあり、それを囲むように左上からイカ、クリオネ、マンタ、クラゲ３匹、チョウチンアンコウ、チンアナゴ、ニシキアナゴ、ウニ、イソギンチャク、ヒトデ２匹、サンゴが描かれている。誰がどの生き物を描いたかはわからない。

資料裏面の右側に右上から縦 3.2cm のところにタグがついている。タグのサイズは縦 1.6cm、横 2.1cm である。タグ表面には、青色の文字で「今治(いまばり)タオル　タオルの産地“四国今治”で染めて織りました。安心してお使いください。」赤色の文字で「日本製・綿 100%」と書かれている。タグ裏面には、黒色の文字で「はじめのうちは多少色おち羽毛落ちしますので、白いものとは別に洗濯してください。塩素系漂白剤は使用しないで下さい。(一財)日本タオル検査協会 TEL0898-22-2086 番号 2380」と記されている。

〔注 1〕Ba.峯岸翔雪、Vo.& Gt.ナカシマ、Dr.原駿太郎

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

現所有/記録者（楠本玲来）が 2019 年 10 月 22 日に北海道札幌市の cube garden〔注 2〕にて、おいしくるメロンパンのライブ物販で購入した。価格は 2,000 円であった。また、ジャガードタオル以外のグッズも購入した。タオル以外に購入したグッズは、液体と味覚トレーナークリーム(M サイズ)4,500 円、アクリルキーホルダー(押し花)500 円である。

ワンマンツアー名は、「おいしくるメロンパン flask レコ発ワンマンツアー2019～博士！これ以上はッ...！～」であり、2019 年 10 月 18 日から 12 月 18 日に開催されていた。

購入後のタオルは、数回ライブに持って行き使用し、洗濯している。また、このライブでは整理番号 A15 で最前列であったため、「おいしくるメロンパン公式インスタグラム」に投稿された写真に記録者が映りこんでいる（2019 年 10 月 24 日の投稿）。客席側はぼかしてあるので、タオルを首にかけているかはわからない。

所在は現所有者/記録者の自宅である。洗濯をした後、プラスチック製の衣装ケースに畳んで保管していた。

〔注 2〕cube garden：北海道札幌市のライブ会場　〒060-0032　北海道札幌市中央区北 2 条東 3 丁目 2-5
所有者は 2019 年札幌市中央区北 2 条東 1 丁目に住んでいたので、徒歩でライブ会場に行った。

――補足――

おいしくるメロンパンとは 2015 年 9 月、峯岸翔雪（Ba.）が大学の同級生であるナカシマ（Vo.＆Gt.）と、高校の同級生だった原駿太郎（Dr.）を誘い、3 人で「おいしくるメロンパン」を結成した。透明感のある歌声とソリッドな演奏が特徴で、甘酸っぱいメロディを奏でる 3 ピースのギターロックバンドである。「毎日を健やかに生きている」と紹介されている。

「おいしくるメロンパン」というバンド名は、ある日ナカシマがメロンパンを食べていた時に「メロンパンが美味しい状態である」ことを表す言葉として思いついた「おいしくるメロンパン」というワードが由来となっている。ただし、ナカシマ自身は「メロンパンはそんなに好きではない」とも発言している。

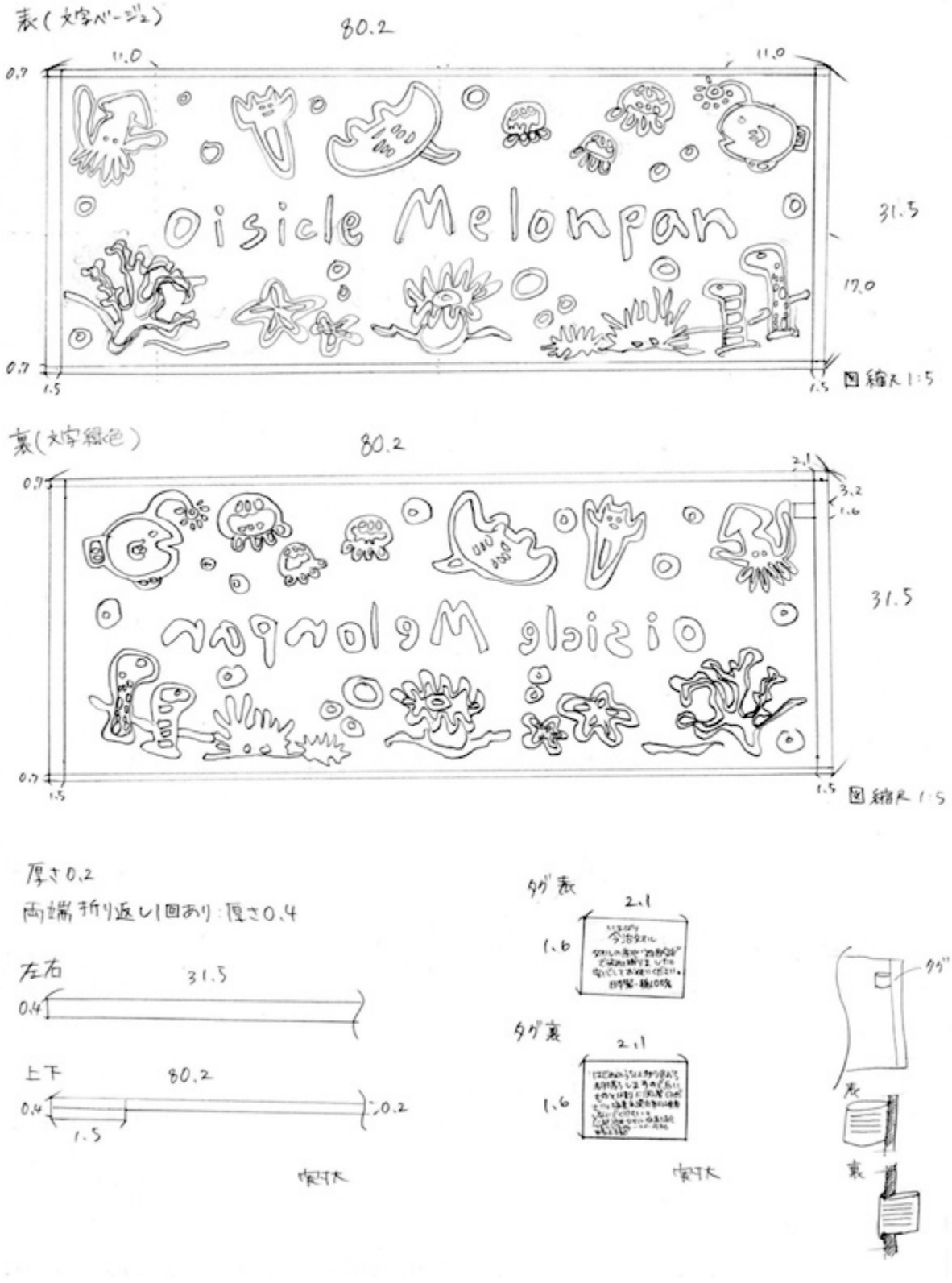
おいしくるメロンパンオフィシャルサイト：https://oisiclemelonpan.com/

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

タオルであるため多少の衝撃には耐久性がある。だだし、破れや糸のほつれが生じる可能性があるため、尖ったものや爪など引っかかるもので扱うとき、それらが周りにあるときは細心の注意を払う。取り扱う時はアクセサリーや時計ははずし、爪も短く整える。燃えやすいため火のそばでは扱わない。カビや汚れの原因となるため、手の皮脂や汚れが資料につかないよう清潔にしてから取り扱うこと。

ほつれがあるのでこれ以上悪化しないよう注意して扱うこと。また、ほつれをハサミなどで切らないこと。

イラストレーション（Illustration）



単位：cm

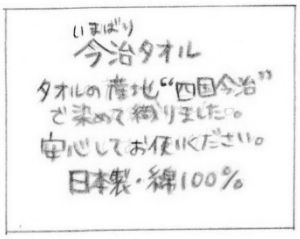
イラストレーション（Illustration） ----カラー----

表

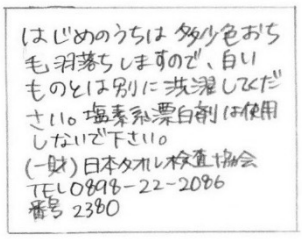
裏

タグ文字

表



裏



コンディション・レポート（Condition Report）

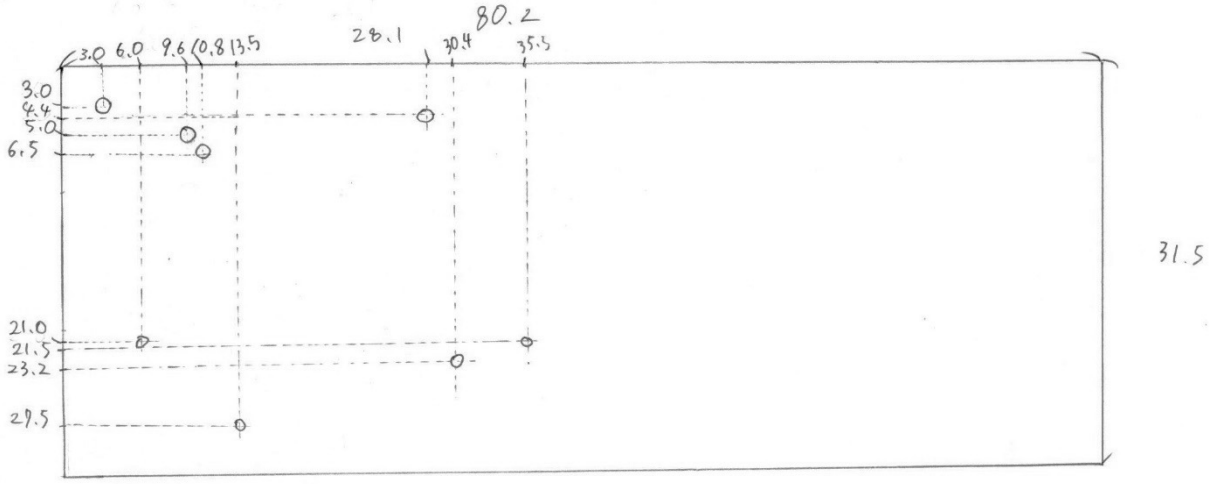
色落ちや汚れはないが資料裏表あわせて 10 か所の糸のほつれがある。ライブで使用した際に鞄に結んだことや洗濯したことでできたほつれであると思われる。また、何か尖っ

たものや爪を引っかけてほつれた可能性もある。

資料表面は８ヶ所のほつれがあり左側に集中している。裏面は２ヶ所のほつれがある。

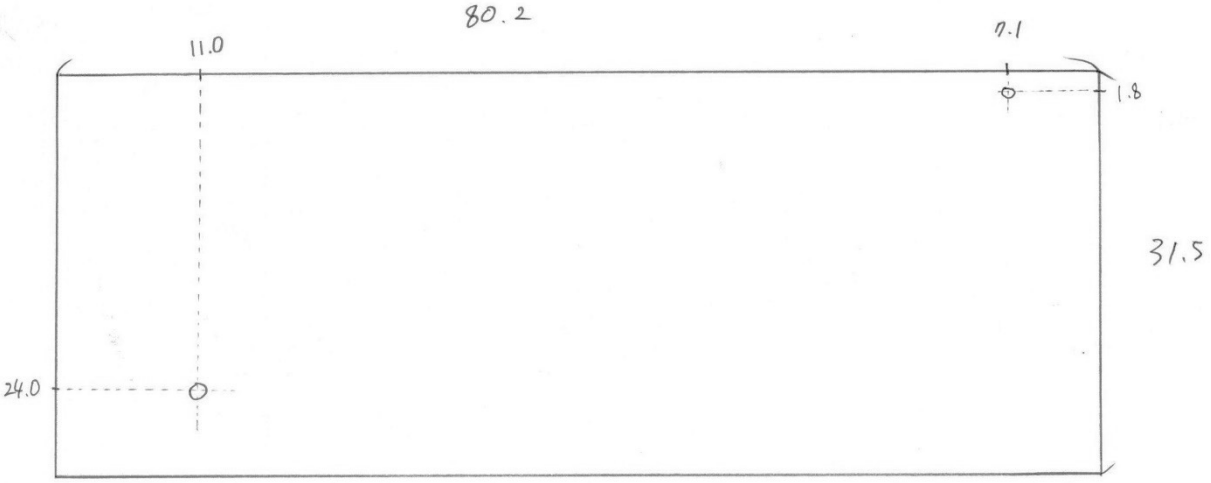
❦❦❦❦ 資料表面のほつれの箇所 ❦❦❦❦

左上から縦 3.0cm、左上から横 3.0cm、ほつれ 1.3cm
左上から縦 5.0cm、横 5.0cm、ほつれ 1.0cm
左上から縦 6.5cm、横 10.8cm、ほつれ 1.2cm
左上から縦 4.4cm、横 28.1cm、ほつれ 3.1cm
左上から縦 21.0cm、横 6.0cm、ほつれ 0.7cm
左上から縦 27.5cm、横 13.5cm、ほつれ 0.8cm
左上から縦 23.2cm、横 30.4cm、ほつれ 0.7cm
左上から縦 21.5cm、横 35.5cm、ほつれ 0.8cm



❦❦❦❦ 資料裏面のほつれの箇所 ❦❦❦❦

右上から縦 1.8cm、横 7.1cm、ほつれ 2.0cm
左上から縦 24.0cm、横 11.0cm、ほつれ 2.0cm



図の単位:cm 図の縮倍率 1/50

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

タオルであるため多少の衝撃には耐久性がある。だだし、尖ったものや爪など引っかかるようなことがあると破れや糸のほつれが生じる可能性がある。ジャガードタオルの特徴からあらかじめ糸が染色されているので色褪せや色落ちしにくいが、光による褪色や酸化による変色に気をつけなければならない。光の当たらない暗所で、高温多湿を避け、通気性の良い環境での保存が求められる。

また、汚れや虫による食害やカビの発生にも注意しなければならない。汚れやゴミ・ほこりが付着しないように通気性のある袋に入れて保管するなどの対策が必要である。

畳んで保管するとタオルや糸に折れやくせがつく場合が考えられるため、水平な所に広げて保管することが望ましい。

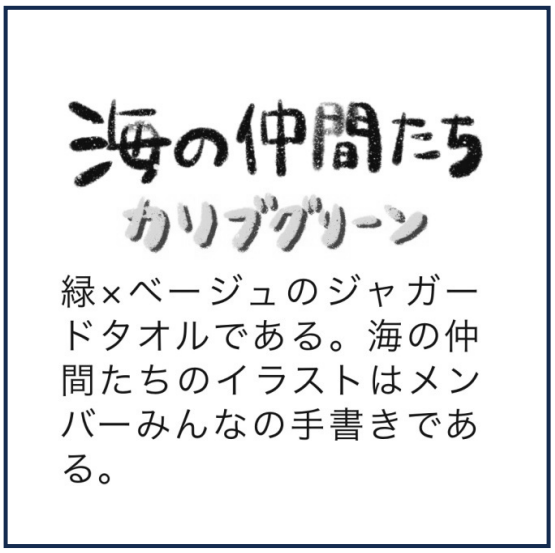
レーベル（Label）

資料ラベルのサイズは 7.0cm×7.0cm とする。

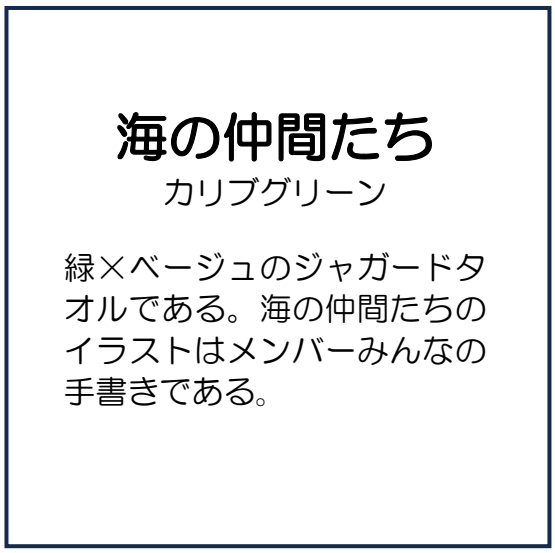
中学生の年代への説明を想定している。解説パネルやその他関連資料を展示することを考えて、文字数を 50 字以内（47 文字）に設定した。

左の手書き風 ver.は資料の雰囲気に合わせてタイトルを手書き風にしている。説明文も手書き風の雰囲気のフォントを使用してもよい。

右のパソコン風 ver.はさまざまなタイプの資料でも対応できるようシンプルなデザインを心掛けている。フォントは、HG 丸ゴシック M-PRO で統一し、フォントサイズはタイトル 20、サブタイトル 12、本文 12 である。

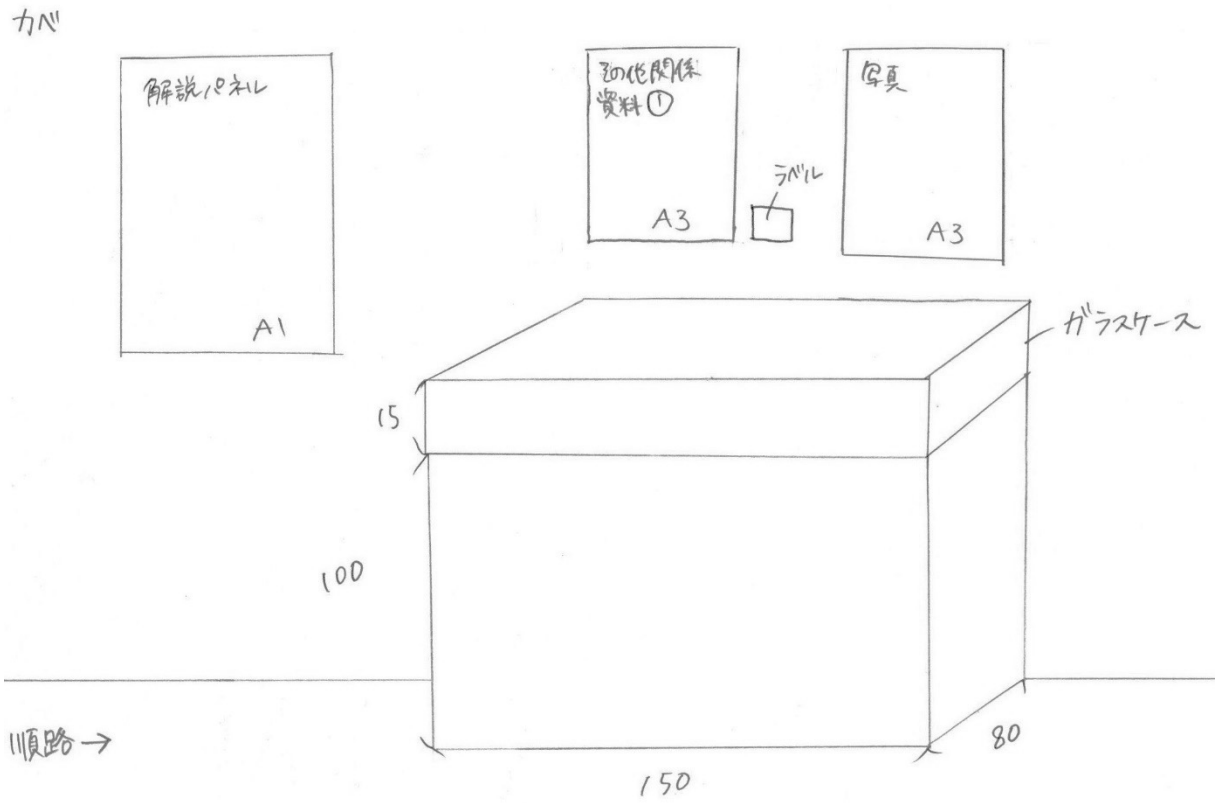


手書き風バージョン



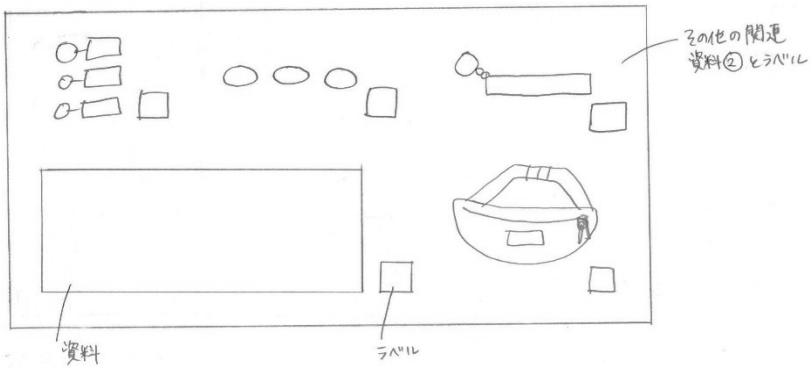
パソコン風バージョン

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）



単位：cm

ケース上部より



コンセプトは「おいしくるメロンパン」のグッズ資料として展示する。2019 年のワンマンツアーに合わせて作られ販売されたことがわかるようにする。

この資料はタオルであるため、広げて見せるのが望ましい。また、2019 年のツアーで新グッズとして販売されたのはジャガードタオルだけではないので、他の関連資料を同じ空間で展示することが効果的である。そのため、ガラスケースで覆われた水平な大きな台に展示するのが望ましい。その他の関連資料は異なる素材があり、これらが一緒に展示されることによる影響についても考慮しなければならない。展示や保存についてはすべての資料に対して適切な管理をする。同じ空間での展示が難しい場合は別の展示ケースで展示することも選択肢として考える。

解説パネルや新グッズとして公開された時の公式 SNS 告知画像も資料として展示する。この資料がどのように使われているのがわかるため実際のライブ写真を展示する。そのため、ケースの近くに壁やパネルを張り付けることができるものが必要である。

博物館資料ドキュメント　『つげ櫛』

人文学部日本文化学科１年　　田口　こずえ

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

これは櫛である。櫛は、通常、長方形に近い板状であり、長辺の片方に等間隔の切り込みがある。切り込みと切り込みの間の板の部分は歯と呼ばれる。櫛の歴史は古く、古代エジプトでは広く普及していた。櫛の役割は、当初はダニやノミ、ふけなどを除去するためにあった。しかし、次第にそのような衛生道具としての側面は消え、髪を梳くために使われることになる。材質は、動物の骨や木、竹、プラスチックがある。

日本では縄文時代にはすでに櫛が使われていたことが分かっている。櫛という音は、「霊妙なこと、不思議なこと」という「くすし」や「くしび」という音と結びつけられ、呪力のあるものとして扱われた。また、「苦死」と同じ音であるため、櫛を拾うことは縁起が悪いこととされていた。

また、日本では伝統的につげの木から作られるつげ櫛が高級品とされ、和泉櫛がつくられる和泉国近木荘のような著名な産地もあった。つげの木は乾燥させることで強度が増し、国産のつげ材で作られたものは、質感が均一で滑らかな使い心地である。つげは「柘植・黄楊」と書くこともあり、櫛だけではなく、古くから将棋の駒や印鑑などの細工物に使われてきた。また、油を吸収しやすい性質があるため、使えば使うほど髪をなめらかにする効果があり、母から娘へ、娘から孫へと代々受け継がれることも多々あった。しかし、現在はプラスチック製の櫛に取って代わられており、つげ櫛を生産している会社は少なくなってきている。

この櫛の商品名は、『美麗椿　三日月くし』というつげ櫛である。美麗椿とは、株式会社徳安が販売している『美麗椿シリーズ』というシリーズのことで、シリーズ１とシリーズ２が存在している。シリーズ１にはブラシや椿油など七種類が、シリーズ２はブラシと櫛の二種類が販売されている。この櫛はシリーズ１の商品である。

株式会社徳安はヘアケア用品以外にも、石鹸などのバスグッズやメイク用品といった女性向けの商品を販売している。

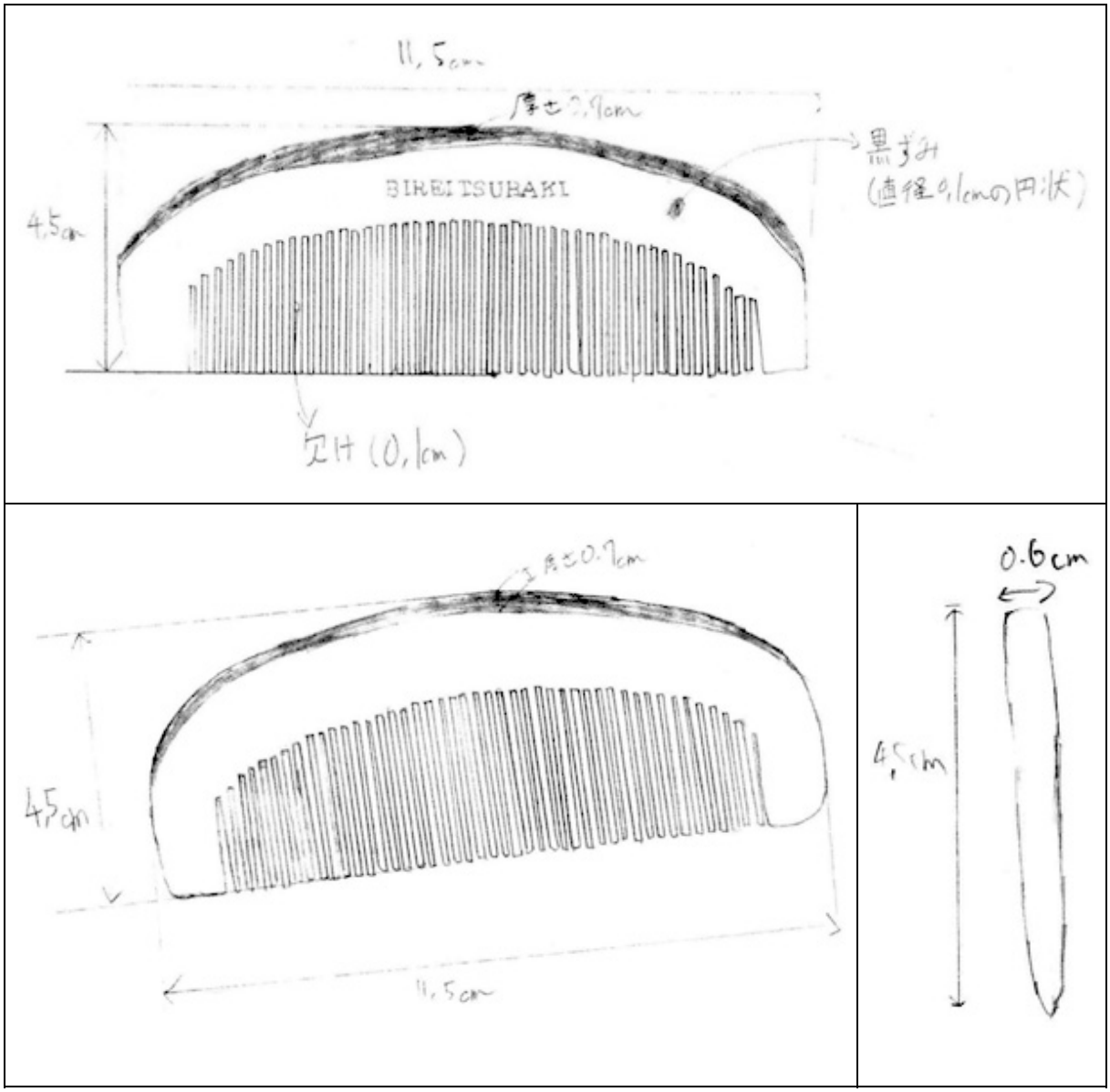
オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

この櫛は、2018 年の夏に現所有者が父方の祖母から入手したものである。父の実家に帰省した際に、祖母は、コープで間違って買ってしまったからもらってほしいと言ったが、何と間違えたのかは不明。その時、ブラシの類を自宅に忘れてしまった現所有者はとてもありがたがった。当時は、携帯用に青地に椿の模様が入った小袋もあったが、2020 年に旅行した際に紛失したために残っていない。

「つげ櫛は油分を吸収しやすいから使えば使うほど髪がさらさらになるよ」と現所有者が親から教えてもらった際に、頭の皮脂も吸収するのかと思い、気味が悪いと誤解した経緯がある。

櫛の所有者は、櫛を入手するまではヘアケアに興味がなかった。園児の頃に銭湯から持って帰ったヘアブラシを使っていたり、髪を生乾きのまま放置したりしていた。しかし、櫛をもらい、櫛は髪をとかすことで育てることが出来ると知ってからは、自分の髪に関心を持つようになった。具体的には、椿油を使ったり、髪を最後まで乾かしたりするようになった。

イラストレーション（Illustration）



コンディション・レポート（Condition Report）

この資料は、木を刃物で櫛の形に削ったものである。軽量であり、触ると滑らかな木の質感がある。2018 年以降、およそ 5 年間にわたって使用しているため、資料は欠損や着色が一部に見られるものの、髪を梳くという機能は失われていない。

歯の部分は細くなっており、一度だけ櫛の上にドライヤーを落としてしまったため、歯の部分が一部欠けている。しかし、実際に髪を梳かす際にその部分に髪が引っかかるということはなく、櫛として使用する際に支障は出ていない。

櫛上部に印刷されている「BIREI TSUBAKI」という文字の線が細い部分に消えている箇所がある。

長期間の使用により、使用時の手に持っていた部分である櫛の上部に黒い着色が見られる。素手で持っていた部分のこのような着色、汚れは、櫛を使用する際は手を洗う、濡れた手では触らないなどの工夫で防げたのではないかと思われる。

離して見ると確認できないが、近くでよく見ると表面に何かで引っ掻いたような模様がある。触ってみたところ、引っかかるような手触りはなかった。このことから、この模様は傷ではなく、ニスなどの資料表面の塗装がはがれてきていることが考えられる。

歯と歯の間には黒いものが少量付着している。これは、髪を梳かす際に付着したほこりだと思われる。この汚れは歯の根元付近に多く見られる。

材質が木であり湿気に弱いが、湿気の少ないところで保管していたため、カビや虫食いは見られない。

一時期直射日光の当たる場所で保管されていたため、売られている未開封のものと比べるとやや色が褪せている。

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

この資料は木製である。また、柘植の木を使っているため、硬い木質である。木製であるため、湿気や乾燥の少ない環境で保管する必要がある。これは、湿気によりカビが生えたり、乾燥により資料が破損したりすることを防ぐためである。カビが発生し始めるのは湿度が 80％以上であるため、50～70％くらいの湿度で管理することが望ましい。

資料であるつげ櫛は、椿油をしみこませたものであり、定期的に表面を椿油で拭くことでよりカビが生えにくくなる。椿油で拭かずに保管する場合は、特に湿度の管理に気を付ける。

また、火気にも弱いため、白熱灯などの熱を発する照明器具や暖房器具からは離れたところで保管する。

資料に染み込んでいる油が酸化すると、着色や悪臭の原因となるため、油の酸化を防ぐことも必要である。脱酸素剤等の使用を検討する際には、資料に有害な物質の発生の有無についての確認が必須である。また、脱酸素剤の中には、酸素に反応して熱を発生したり、使い方によっては発火するものもあるため、使用する際は使用法を守り、適宜交換するこ

とが望ましい。

また、菌やダニなどを持ち込まないように、保管の前にはガスによる燻蒸等で殺菌、殺虫の作業を行う。ブラシを用いてのクリーニングが必要な際は、資料に傷をつけないよう柔らかいブラシを使用する。保管の際は、印字されたロゴマークが見えるような向きで、平らな場所に置く。

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

この櫛は木で出来ており強度が弱いため、落としてしまったり上に何かを落下させたりしてしまうと、傷が出来たり割れたりする可能性がある。また、水や油を吸収しやすい性質があるため、取り扱う際は皮脂が付着しないように手袋をするか、素手で触れる場合は手をよく洗い、水気をふき取ってから触れるべきである。また、欠けている部分があり、他の資料を傷つけてしまう恐れがあるため、注意して取り扱う必要がある。

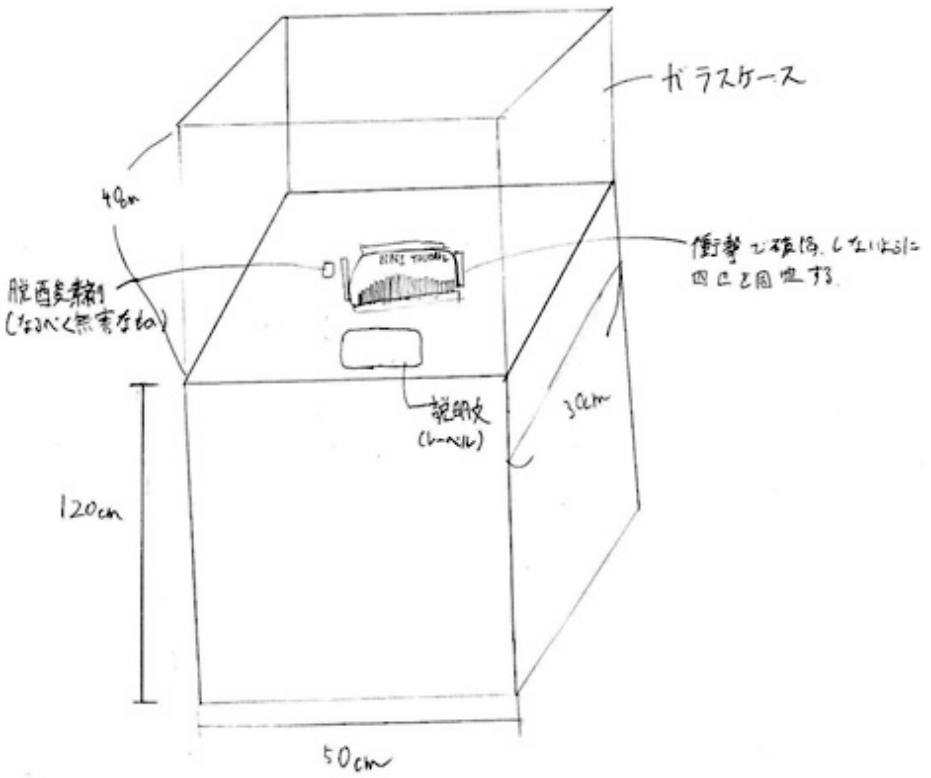
湿度の調整も必要である。湿度が低いと乾燥し、資料が割れたりひびが入ったりする。逆に湿度が高いとカビが発生する。そのため、適切な湿度を保つように心がける。また、虫食いの被害に遭う可能性があるため、注意する必要がある。防虫剤などの薬品の使用を検討する際は、資料に害を与えないものであることを確認しなければならない。展示などでケースを使用する際も、揮発性の化学物質が発生しにくい材質のものを選ぶ。

変色や劣化を防ぐため、直射日光を避け、熱の発生する照明器具からも離して保管する。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）

櫛は平べったい形をしているため、展示する際は面積の広い面を底面として設置することで安定して展示することが出来る。資料は「BIREI TSUBAKI」というロゴの面があるため、この面が見えるようにして展示する。

酸化を防ぐために脱酸素剤を用いる。



展示に使う照明は白熱電球のような熱の発生しやすいものは避け、LED のような熱が比較的発生しにくいものを用いる。

資料には傷があり、布などを用いると繊維が引っかかり、資料をより傷つけてしまう可能性があるため、板のようなものを用いる。

櫛はヘアケア用品に分類されるため、当時のヘアケア用品と一緒に展示することで、21 世紀の美容が効果的に伝えられると考えられる。そのため、この資料の近くには同年代に使われていたブラシやドライヤー、ヘアオイルなどのヘアケア用品を展示する。また、イラストやパネルを用いて当時の道具の使い方を説明する。

レーベル（Label）

櫛が丸みのある長方形であるため、丸みのある図形を用いた。資料が白に近い色の木材を使用しているため、背景を資料に近い色にした。見やすいように資料の名前は中央揃えでサイズは 18 にし、解説は左揃えで 10.5 のサイズにした。

また、櫛の中でも和櫛という日本の伝統的な櫛であるため、和風の雰囲気を出すために HG 正楷書体‐PRO を用いた。

櫛（つげ櫛）

櫛の歴史は古く、古代エジプトではすでに用いられており、日本でも縄文時代のものが発掘されている。
この櫛はつげの木を使って作られた櫛である。静電気を起こしにくく、椿油をしみこませているため、昔から日本の女性に愛されてきた。
櫛には用途によって主に四つの種類があるが、この櫛は、梳かし櫛に次いで二番目に歯の細かい梳き櫛という櫛である。

博物館資料ドキュメント　『ミニチュア三味線』

人文学部日本文化学科１年　　只石　桃花

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

これは、ミニチュアの三味線である。三味線とは、動物の革などを張った胴に、木でできた棹を貫通させたものに三本の弦を張った日本の弦楽器である。撥を使い、弦をはじくことで演奏をすることができる。

駒部分は紛失しているが、撥がついて、弦も張ってあるため実際に弾くことができるものである。台がセットとしてついているため、それを使用して飾ることもできる。また、購入時には箱に入っており、三味線の手引きという三味線についての説明、簡単な譜面がついている冊子が入っていたと考えられる。

おそらく、1956（昭和 31）年以降に有限会社日本バイオリン研究所が製造した、ミニチュア商品の中の一つであると考えられる。この三味線の他に、琴なども製造されていた。現在は、有限会社日本バイオリン研究所は大正琴を販売しており、ミニチュアの販売は行われていない。そのため当時の販売がどのように行われていたのかと、販売時の金額は現在は不明である。

ミニチュアではない大きさの三味線と同様に、天神、棹、胴は木で作られている。糸巻部分三か所はプラスチックで、上駒は金属で作られている。天神の上部の月形部分と、胴かけの部分には布がある。この布は二つとも違う柄が入っており、胴かけの部分は鳥がメインの柄で、月形部分は花のような柄が入っている。胴かけの上部には紐がついており、本来は結ばれていたと考えられるが、現在は結ばれていない。また、音緒が販売当初はきれいに結ばれていたと考えられるが、現在は形が崩れて、さらに弦が飛び出てしまっている箇所がある。このうち木の種類や、革がどのような種類なのかなどは、説明書の紛失や、販売時からかなり時間が経っていることから、いまだ調べられてはいない。

大きさは、全長が 40.0 ㎝ほど、天神が 8.0 ㎝、棹は 22.0 ㎝、胴は 10.0 ㎝となっている。横幅は、大体 4.7 ㎝ほどである。また付属している撥は、縦が 7.5 ㎝、横が最大で 4.8 ㎝である。

天神の部分は後ろ側に湾曲しており、棹の部分はまっすぐになっている。棹の胴につながる部分は後ろに湾曲している部分がある。弦は、三本のうち二本が上部で近くなっている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

これは、現在の所持者が 2018 年の夏ごろに祖母から譲り受けたものである。正式な時期は不明。譲り受けたとき、所持者は中学 2 年生であり、日本の文化について興味を持っ

ていたため、祖母が見せてくれた際にほしいと望んだ。この時には、同じミニチュアの琴、手引書などあったが、所有者は台がついており簡単に飾ることができると考えた。

駒については初めて祖母に見せてもらった時からすでになく、譲り受ける前にかなりの年月が経っていると考えられるため、その期間に紛失してしまったのではないかと考えられる。現在は箱、三味線の手引書なども紛失しているため、こちらは飾る際に捨ててしまったか、見つかりづらい場所に保管されていると考えられる。

譲り受ける以前は不明だが、譲り受けた後は観賞用として付属していた台を使用して棚の上に飾っていた。駒はないものの、はじけばしっかりと音が鳴るため、何度か引いて遊んだりもしていた。夜中に2度ほど音が勝手になったことがあった。

コンディション・レポート（Condition Report）

全体的に、色あせたような箇所が多い。

月形の部分の布の裏面にほつれ、胴かけ部分の下部の紐が通っている部分もほつれている箇所がある。

裏面は、箱にしまう際などで下につきやすい箇所であり、胴かけ部分の紐が通っている部分は、紐がこすれ、ほつれてしまったのだと考えられる。

棹部分にも正面から見て右側に、木が欠けている部分がある。こちらは持ち運びの際によく握られるためにすれてしまった、または何かによって削られたと考えられる。

他にも、胴かけ部分の上部に結ばれていたと思われる紐はおそらく変色しており、紐の上部と下部で色が抜けていると考えられる。

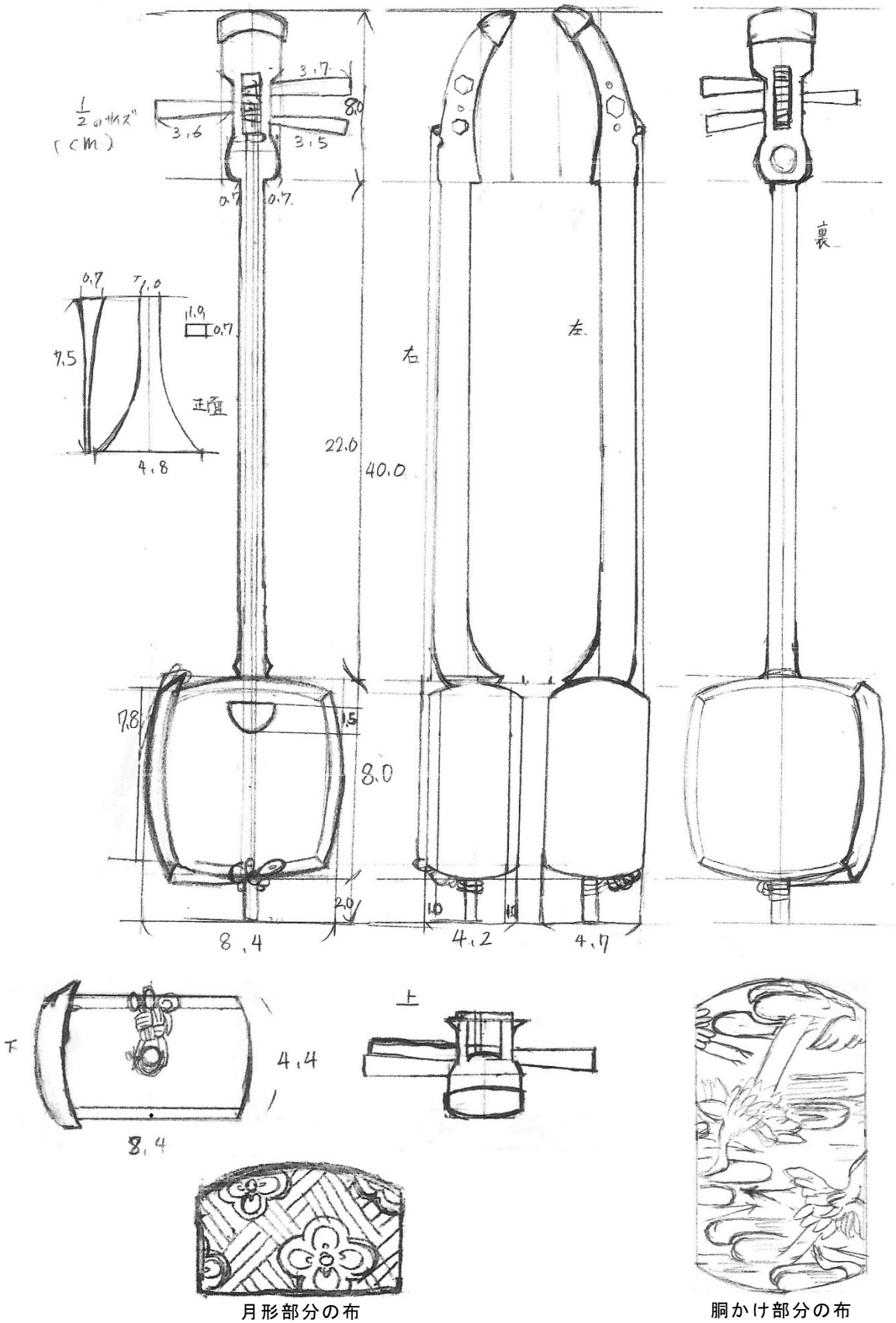
音緒は結ばれているが形が崩れており、紐自体もつぶれているように見えるため、飾る際などにつぶされてしまったのではないかと考えられる。

さらに、弦の糸巻部分がかなり雑な方法でまかれているため、劣化が激しいのではないかと考えられる。三味線をよく知らず、適当にまいてしまったことなどが原因だと考えられる。

革にも手垢のような、黒ずみが見られる。これは、弾いたりすることができるミニチュアのために、触られたことによるものが拭き取られずにたまってしまったことが原因と考えられる。しかし、これらすべては所有者が譲り受けた際にはすでについていたものであるため、推測される理由で断定することはできない。

撥については、そこまで大きな傷はないが、何かが折れたような部分がある。しかし、撥の形としてはおかしい部分ではないため、製造時などについたものではないかと考えられる。撥のはじく部分は若干削られており、ミニチュアの三味線の弦をはじく際に使われたことが原因となっていると考えられる。さらに目立つものではないが、光などに充てると、細かな傷が広い面がある部分に多く見られる。

イラストレーション（Illustration）



月形部分の布

胴かけ部分の布

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

三味線に使われている革が高温多湿の場所にとても弱く、湿気が高いと革が破れやすくなってしまう。そのため、保管時にはまず高温多湿ではない場所がよいと考えられる。さらに、温度や湿度の変化が大きいことも劣化の原因となるため、夏や冬で大きく変化が起こらないようにしなければならない。また、太陽光などで日焼けした布の部分が変色してしまっているため、これ以上変色をさせないためにも直射日光は絶対にあたらないようにする。

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

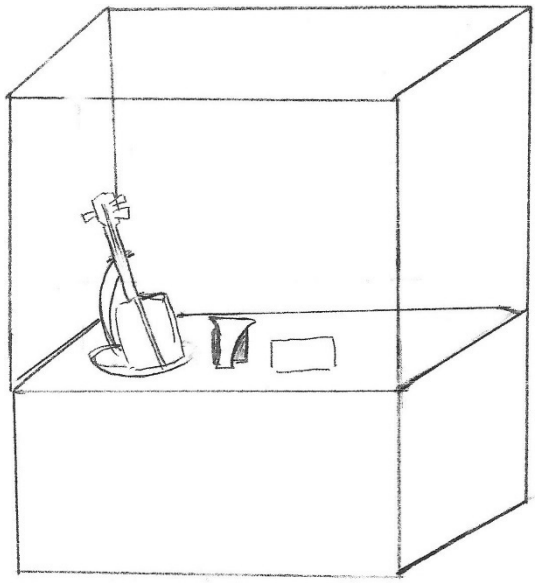
運ぶ際には、湿度温度の変化が大きく起こらないようにすべきだと考えられる。革の劣化の要因となる可能性が高いためである。湿度が高いことで革が破れやすくなってしまうため、濡れてしまうことも回避しなければならない。手が濡れている状態で触ることがないように注意する。また、革の部分は鋭いものが貫通してしまうことがあるとも考えられるため、先の鋭いものや、刺さりそうなものは革に触れないように気を付ける。ペン先なども革に触れると破れてしまう可能性があるため、近くで使用する際は気を付ける。

糸巻部分は上から２番目が緩んでおり、少しでも回して弦を張れば抜けそうになってしまうため、慎重に扱う必要がある。抜けてしまった場合は慎重に戻し、また弦が簡単に抜けてしまうこともあるためこちらも注意しなければならない。

胴かけ部分の上部に通っている紐が、結ばれていないため簡単に抜けそうになっているため、気を付けなければならない。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）

展示方法は、台の上に設置した透明の展示ケース内に、支えを使用して立てて展示する。撥は、その隣に後ろに透明な台を使用して置く。



展示資料である三味線は温度と湿度が適切でなければ簡単に劣化が進んでしまうため展示ケース内での設置としている。常設展示であれば、夏期と冬期での温度/湿度、短期間の企画展であっても昼間と夜間の温度/湿度の変化が小さくなるようにしなければ、劣化が進行しやすいため、設置環境の温度/湿度は適切な値で一定に保つ。

月形の部分の布には、日光によると思われる日焼けが起こっているため、展示の際は強い光が直接当たらないような配慮が必要である。照

明は、紫外線の影響が少ないものを使用する。

レーベル（Label）

レーベルは大人向けと子ども向けの二種類を用意した。共に資料名は 16 ポイントで太字にし、本文は 10.5 ポイントで統一している。文字の色は見やすさを重視して黒を使用している。枠線には資料にも使われている色である赤を使用し、資料と統一感を出している。

大人向けの字体は游明朝を用いて、製造した会社である有限会社日本バイオリン研究所について言及し、なぜこのミニチュアの楽器が製造されたのかについて説明する内容となっている。

子ども向けの字体はゴシック体を用いて、簡単な語句で表現し、ルビを振っている。飾るだけでなく実際に演奏もすることができるようになっているということに言及し、販売されたときには誰でも簡単に弾けるように手引書がついていたということにも言及している。

ミニチュア三味線

1956（昭和 31）年以降に日本で作られた、
有限会社日本バイオリン研究所製造のミニチュアの三味線。
有限会社日本バイオリン研究所は、まだ無名だったときに誰でも遊んで
使える玩具楽器の製造や、楽器のある家族団らんの場所を作りたい思い
により、ミニチュア楽器の製造をしていた。
この資料は、駒という部品が紛失している状態である。

大人向け

ミニチュア三味線（しゃみせん）

1956（昭和31）年以降に日本で作られた、
有限会社日本バイオリン研究所製造のミニチュアの三味線。
実際にひくことも可能で、ミニチュアながら弦一本一本が違う音の高さ
となっている。現在はなくなっているが、簡単な説明と譜面として
三味線の手引書というものがついていた。
この資料は、駒という部品がなくなっている状態である。

子ども向け

博物館資料ドキュメント　『ハリーポッター　TM ローブ（スリザリン TM)』

人文学部日本文化学科 1 年　　中山　穂乃

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

これは、「ハリーポッター　TM ローブ（スリザリン TM)」とよばれる、身に羽織ることのできる衣類である。さらに、物語内に登場するローブを模したものでもある。このローブは、ユニバーサルスタジオジャパンという大阪府大阪市此花区桜島 2 丁目 1 番 3 号にあるテーマパークのショップにて入手した。所有者は中山穂乃であり、2022 年 4 月に購入。

「ハリーポッター」とは、J.K.ローリングによって書かれたイギリスの文学作品である。この作品は 2024 年現在も人気を誇っており、日本では 2001 年 12 月 1 日に映画化〔注 1〕された。その映画内で、魔法使いの学校に通う生徒たちが着用するローブを模したものがこのローブである。また、「スリザリン」とは、ハリーポッターの作品では 4 つの寮が存在するが、そのうちの一つである。蛇に緑色のマークを特徴としており、ローブの左胸部分にはそのような紋章がワッペンとしてつけられている。映画内でもスリザリンの寮に属する生徒はこのような紋章をローブにつけていた。紋章は銀色に黒い目の蛇が大きく描かれ、「Slytherin」と下に英語での表記がある。

ローブのサイズは着丈 112cm であり、肩幅は 50 ㎝。ローブの会社は合同会社ユー・エス・ジェイ。生産国は中華人民共和国であり、素材は表地、裏地ともにポリエステル。ポリエステルは 100 パーセントとの記載がタグにある。裏地は光に当たると透けることから、薄い素材で出来ていると思われる。全体的に薄めの素材である。サイズは XS、S、M、L と四種類あり、資料は S サイズである。155 から 165ｃｍに対応するものと記載がある。色は黒であり、内側は緑色。作品内の寮をイメージした色が内側の色となっている。

ローブの上のほうにはボタンがあり、前を止めることもできる。所有者はボタンを止めて使っていた。

また、ローブにはフードがついており、このフードも映画で登場したものと同じ作りになっている。フードは、三角帽子の形になっており、魔法使いをイメージしているのではと思われる。深くかぶると顔が埋まるほどの長さである。さらに、内側には幅 20cm ほどのポケットがついており、ユニバーサルスタジオジャパンで発売されている杖を収納できるようになっている。杖はハリーポッターの映画内で使われている魔法を使うことができる杖を模造したものであり、実際にパーク内で使用することができる。

紋章は布やフェルト生地で出来ていると思われ、蛇のマークやロゴは糸を縫い付けていると思われる。

着てみると、重厚感はない軽めの素材であるため、着やすい。かつ風を通しにくい素材であるため防寒対策としても使用できる。腕の部分はかなり幅があり、ダボっと着ることができる。そのことによって魔法使いのイメージを演出することができる。

このローブは、前述したように「ハリーポッター」というイギリスの文学作品を映画にした、その映画内で登場する。ローブは「ホグワーツ」という魔法使いの学校へ通う生徒たちが着用している。映画の中において生徒たちが通う、ホグワーツ城を模した建築物があるユニバーサルスタジオジャパン内で生徒となった気分で楽しむことができ、そのような目的で販売されている。所有者はハリーポッターの世界観に浸りたいといった理由で購入した。

〔注 1〕cinemacafe.net　https://s.cinemacafe.net/movies/15345/

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

このローブの模造品は多くあり、似たような製品も 2024 年現在、通販サイトで「ハリーポッター コスチューム」として多く販売されている。しかし、この資料のローブであるユニバーサルスタジオジャパンで販売されているローブは、映画内のローブと色味やつくりを再現したものとなっている。

所有者が購入した当時（2022 年 4 月）は 19,000 円（税抜き価格不明）で販売していたと記憶していたが、2024 年購入先のオンラインストアでの情報を見ると 16,000 円（税抜き 1,454 円）と値下がりしている。このことに所有者はショックを受けた。2022 年は新型コロナウイルス（COVID-19）による旅行の自粛が促されており、ユニバーサルスタジオジャパンも閑散としていた。来場者は 2022 年、約 1,235 万人と、コロナウイルス発生前の 2019 年の約 1,450 万人よりも少ないことから物価が上がっていたのではと推測する。〔注 2〕

所有者は 2022 年、高校の修学旅行（二泊三日の関西旅行）にて資料を手に入れたという思い出の品である。

〔注 2〕CASTEL https://castel.jp/p/3029

コンディション・レポート（Condition Report）

このローブは、所有者が複数回しか着用していないため、目立った傷や汚れ、糸のほつれはローブの表も内側、裏面にもみられない。しかし、修学旅行で着用した時に、雨が降っていたため湿気による生地の傷みが見られる。当時、所有者は雨の中を一日中着用し、動き回ったので形がくずれた可能性がある。

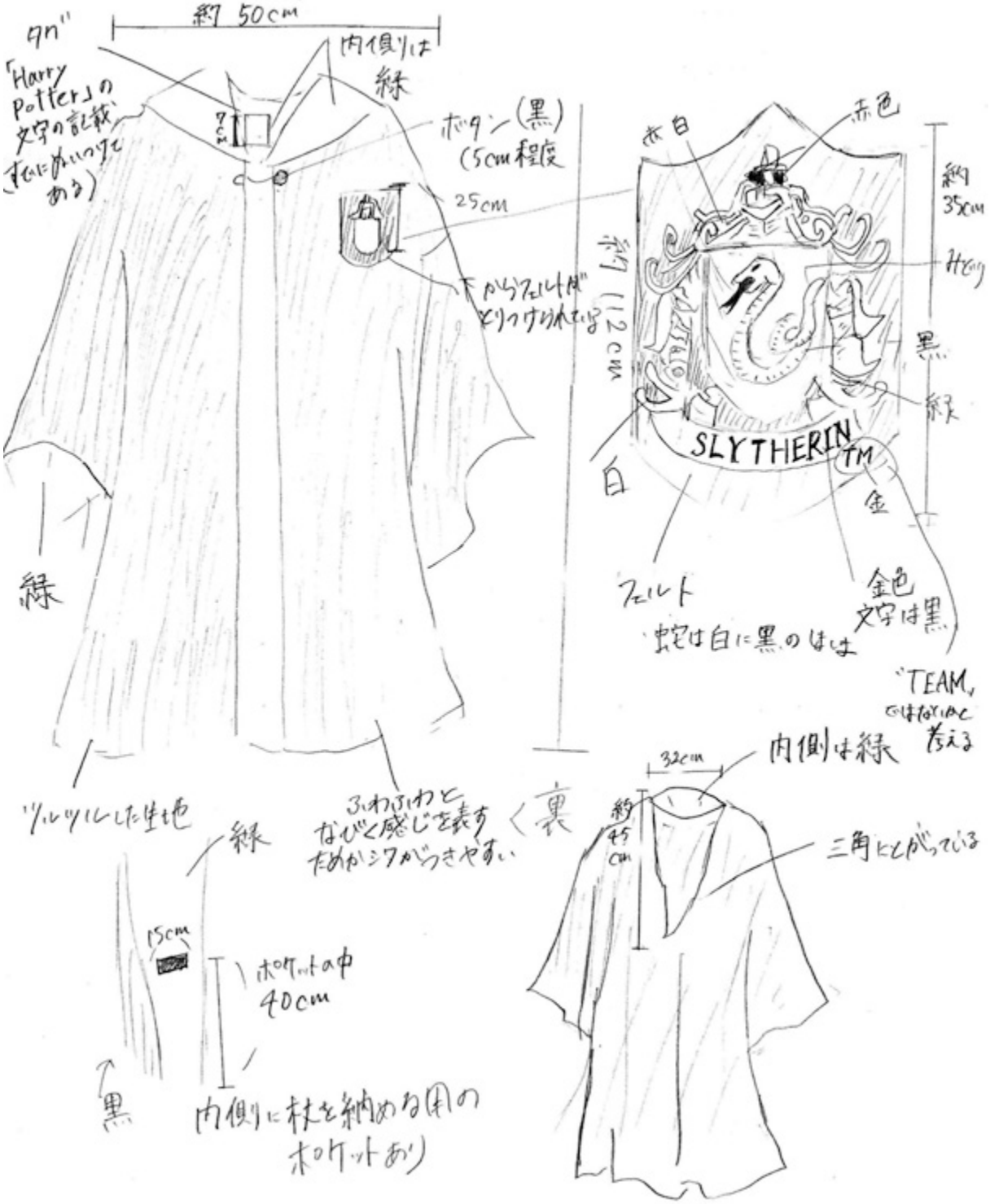
また、同時期（2022 年）の帰りに、スーツケースに入れるために所有者がローブを 4 つに折って畳んだため、形の崩れがある。また、2022 年購入時から現在 2024 年まで、ハンガーにかけて他の服と一緒にクローゼットで保管していたため、生地の傷みやしわが見られる。また、クローゼット内は換気や温度調整がされておらず、ほこりや湿気により、資料が傷んだ可能性がある。

さらに、購入した当時、ワッペンの蛇のマークの目のあたりに、数センチの糸のほつれが見られ、購入者はそのほつれを気にしたため、ハサミで切ったとのこと。糸のほつれはローブを製作した側によるものであり、はさみで切った際にワッペンに傷はつかなかった

と思われ、ワッペンに傷はみられない。

ローブの帽子から裏面の生地にかけて、かなりしわが寄っているのがみられる。帽子に関しては、他の服と一緒に保管していたためにかなり形が崩れてしまったと思われる。

イラストレーション（Illustration）



リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

保存の際は生地が傷まないよう、他の衣類の資料と一緒に保管せず、ローブ単体で広いスペースを使い、保管すべきである。

また、水による色素の変化には気を付けなければならない。ローブのタグには洗濯禁止のマークがあり、水に触れることで形崩れの危険性がある。酸素系・塩素系漂白剤を使うことの禁止のマークがあり､使った際には色が落ちてしまうと思われる｡マークに関して、乾燥やウェットクリーニングも併せて禁止ではあるが、アイロンがけと石油系溶剤によるドライクリーニングは可能とのマークがある。しかし、資料に汚れがみられないため、ドライクリーニングは避けたい。

また、光の当たる場所での保管は色褪せの危険があるため、暗い場所での保管や光の調節が重要である。保管場所では特に、空調設備に配慮するべきである。夏季の高温下では色褪せにつながり、湿気によって資料が傷んでしまう危険性がある。さらに、保管場所は清潔さを保ち、資料にほこりがつかないようにすることが重要である。繊維を食べる虫も存在するため、IPM 等の対策を取り入れる。また、ほこりや光を防ぐため、薄葉紙等を資料の上からかけておく必要がある。

ハンガーにかけての保存では、跡がついてしまったり、資料が伸びてしまったりする危険性のあることから望ましくない。資料がしわのつきやすい素材であるため、薄葉紙で挟み、皺や線が付かないよう軽く折りたたんで収蔵専用ボックスへ収納する。可能であればマネキンを使っての保管も検討する。帽子はとくに形が崩れやすく、しわがつきやすい素材のため､三角帽子の内部に型崩れ防止用に薄葉紙等を詰めるなどの対策も視野に入れる。

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

取り扱いの注意点として、資料の近くに引っ掛かる危険性のあるものはないか、注意を払うことが重要である。もし資料が何かに引っ掛かってしまうと、資料が破れてしまう危険性がある。また、資料を扱う際は清潔な手で触れなければ、手に付着していた汚れが資料についてしまうことや、ほこりやカビの発生につながるため、気を付けなければならない。

資料を持ち運ぶ際には、しわがついてしまうのを防止するため､『リクワイアド・エンバイロメント』で言及した収納ボックスに入れたまま運ぶ。マネキンを使用して保存されている場合は、畳まずにそのままの状態で運ぶことが可能である。

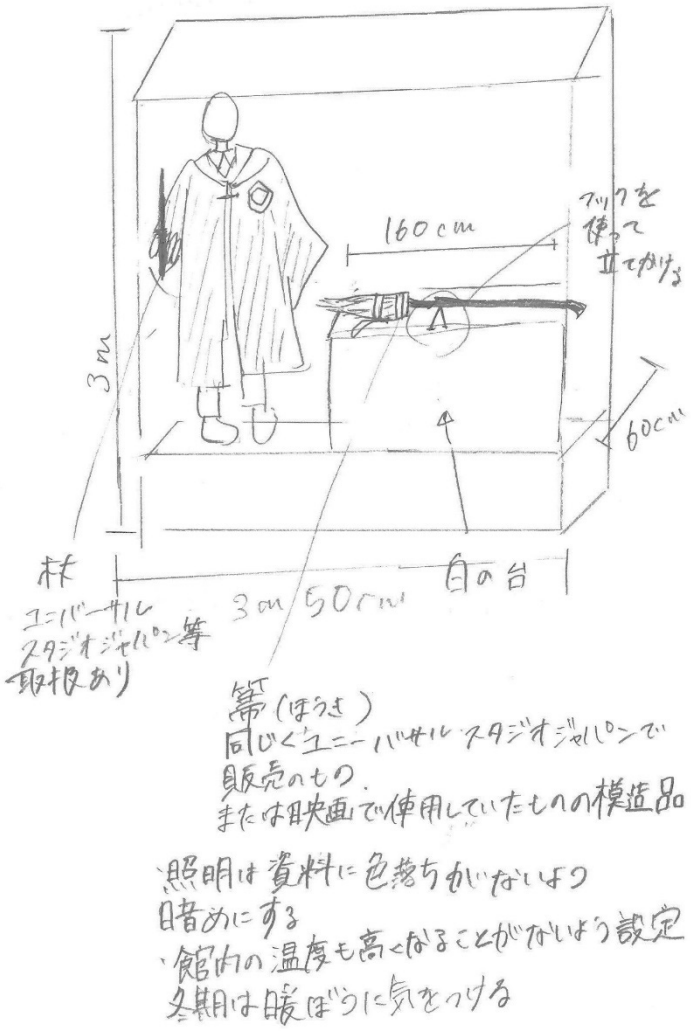
しわのつきやすい生地であることから、資料の上に物を置くことは避けるべきである。

また、アイロンや洗濯、水には注意を払うべきであり、資料の色褪せにつながるため、使用、および洗濯は避けたい。特にアイロンに関しては 110 度以下の使用であり、スチームは禁止とのマークがあり、高温での使用は資料が傷んでしまうことや色褪せにつながるため禁止する。しかし、目立ったしわがあった際の修復のため、やむを得ずアイロンを使用するという判断に至った場合には、限りなく低温でのアイロンがけとし、日時や回数を

記録する。なお、アイロンがけの際はローブの部分だけとして、ワッペンの部分にはかけないように気を付けたい。ワッペンは布で出来ており、高温での色落ちの危険性がある。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）

資料はあとがつきやすく、しわがよりやすい素材であることや、着用の様子を来場者に伝えることができる点からマネキンを使っての展示とする。ローブの黒色を際立たせるため、マネキンの色は白色とする。展示の際は、汚れや水に触れさせないために、四方向を囲み、透明ケースに入れて展示する必要がある。しかし、壁につけて展示するのではなく、三角帽子等のローブ裏面も来館者が見ることができるように設置すべきである。近くに置く資料として、ユニバーサルスタジオジャパンで販売されている杖や寮の柄のマフラー、または映画で使用された箒を置く。展示のテーマを「ハリーポッター」とし、関連する資料を集める。さらに、4 つの寮のローブがすべて集まるように、資料を収集する必要がある。



他の解釈に基づいた企画として、「魔法使い展」としても、活用することができる。

対象者はハリーポッターの作品を知っている老若男女全員であり、大人も子供も楽しめる展示としたい。そのため、多くを写真撮影が可能になる展示とし、視覚的にも、物語の世界観を楽しめる展示を目指す。

レーベル（Label）

レーベルは物語の世界観の雰囲気や重厚感を伝えるため、黒色の背景として、銀色の文字に Word の文字の反射という機能を使った。展示を見ている中で来場者が、少しでも雰囲気を味わえるようにするためである。タイトルは「HGS 明朝 E」18 ポイントであり、本文は「游明朝（本文のフォント)」11 ポイントである。こちらの書体も、魔法使いのような雰囲気の表れる文にするように心がけている。対象者は老若男女、全員であることから、子供も読みやすいような文にし、難しい漢字には振り仮名を付けている。また、来場者が読みやすい文となるよう、特に読点を打つ箇所に気を付けている。説明文は資料の見どころを伝え、その資料に浸ってもらう目的やスリザリン寮の説明のために、スリザリンとはどういった寮であるか、説明を付け加えている。

スリザリン寮（りょう）ローブ

テーマパーク内で販売されていた、ハリーポッター作品内の

４つの寮の中の一つ、スリザリン寮のローブです。

裏地は緑色であり、胸元には蛇（へび）の紋章があります。

スリザリンの生徒は野心的で狡猾（こうかつ）、

目的のためなら手段を選ばない一面があります。

しかし、多くの魅力を持つ寮（りょう）だといえるでしょう。

所有者　中山穂乃　2022 年 4 月
製作　合同会社ユー・エス・ジェイ

博物館資料ドキュメント　『ぬいぐるみ（伊野尾慧）』

人文学部日本文化学科１年　　安岡　彩奈

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

この資料は、様々な形に切り分けた布を糸で縫い合わせて作られたぬいぐるみである。付属しているタグによると、材質は、本体にポリエステル、中綿にポリプロピレン、T シャツにポリエステル・ナイロン、パンツに綿、ボールチェーンに鉄、ポンチョにポリエステル・ポリアセタール樹脂で、中国にて製造されたものである。また、対象年齢は８歳以上である。

この資料は、「Hey！Say！JUMP 15th Anniversary LIVE TOUR 2022-2023」オフィシャルグッズの一種、【伊野尾慧】ぬいぐるみである。モチーフとなった人物は、STARTO ENTERTAINMENT（旧ジャニーズ事務所）所属アイドルグループ Hey！Say！JUMP のメンバー伊野尾慧（以下、伊野尾）である。この資料は、伊野尾の髪形、顔（眉毛や目の形、唇の形・厚さなど）の特徴を捉え、デフォルメ化されてぬいぐるみとなったものである。

資料の大きさだが、ポンチョ着用時で、全長：約 19.0cm、幅：約 11.5cm、厚さ：約 6.0cm、ポンチョ脱衣時で、全長：約 17.５cm、幅：約 10.0cm、厚さ：約 5.5ｃｍである。その他は、頭・縦：約 8.0cm、頭・横：約 8.5cm、体・縦：約 9.5cm、体・横：約 10.5cm、手の長さ：約 4.0cm、脚の長さ：約 4.0cm である。構造としては、Ｔシャツとパンツを着用した伊野尾のぬいぐるみに、ポンチョを羽織らせたものとなっている。羽織っているポンチョは、同グループのメンバー八乙女光（以下、八乙女）が考案した伊野尾の公式キャラクター「いのてり」を模したデザインになっており、スナップボタンにより着脱が可能である。ポンチョを脱ぐと、Hey！Say！JUMP の公式マークである『！』が大きく印字された T シャツと黒いパンツ姿の伊野尾になる。T シャツは後方にマジックテープがついており、パンツも多少伸びる素材であるため、こちらも着脱可能である。髪の毛を表す布の色は茶色で、顔のパーツは、眉毛は髪色と同様、目は黒を基調として、瞳の色は伊野尾のメンバーカラーである青色、瞳の上部にはハイライトとして白色、口は桃色、下部の唇の厚さを表す線は肌色でそれぞれ刺繍されている。ポンチョの顔部分にも刺繍が施されており、眉毛、目、眼鏡の縁、口は黒色、眼鏡のレンズは白色、頬の線は赤色となっている。帽子とポンチョはグレーを基調とし、帽子中央には白色の円の中に「学」と書かれている。ポンチョを羽織った際の伊野尾の右手側には、日の丸が描かれた扇子がつけられている。また、資料上部にはボールチェーンがついているため、リュックなどに付けて持ち歩くことが可能である。ボールチェーンに付属しているタグには、表面に伊野尾と他メンバー7 名の同じぬいぐるみのイラストが描かれており、裏面には注意やサポートセンターへの連絡先、材質などが記載されている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

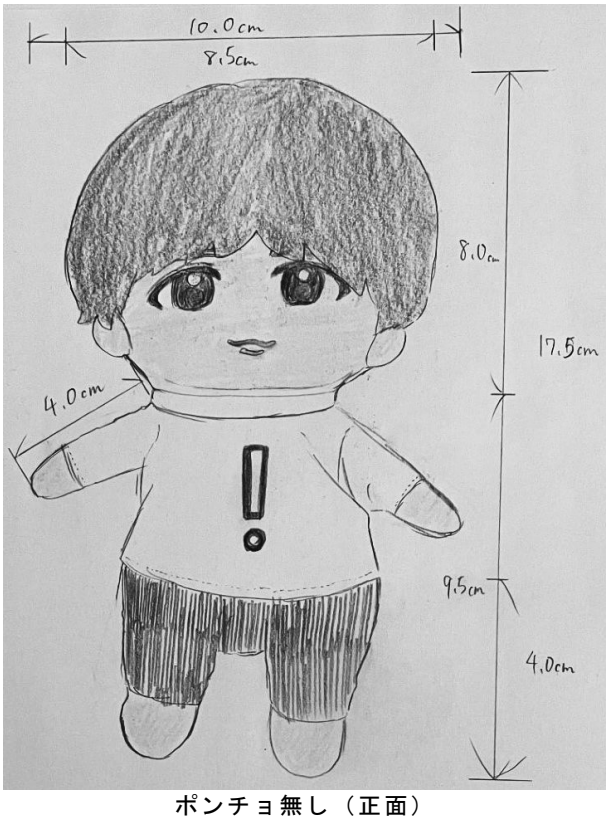
所有者は、2022 年 11 月 14 日にオンラインストアにて本資料である伊野尾のぬいぐるみと八乙女のぬいぐるみを購入した。価格は一点で 2,200 円である。この資料の販売期間は 2022 年 11 月 14 日（月）5:00 から 2022 年 11 月 20 日（日）23:00、2022 年 12 月 17 日（土）5:00 から 2023 年 2 月 15 日（水）23:00 と、すでに終了しており現在は購入することはできない。これらは、2022 年末から 2023 年始にかけて行われた、「Hey！Say！JUMP 15th Anniversary LIVE TOUR 2022-2023」のオフィシャルグッズとして販売されたものである。所有者は当時アルバイトができず、所持金に余裕がなかったため、ライブツアーの申し込みは諦めたものの、オフィシャルグッズが公開された際、これらのグッズにひとめぼれをして即決で購入した。

所有者は、2016 年秋頃にテレビで見かけた伊野尾をきっかけに一度 Hey！Say！JUMP が気になり、すぐに熱は冷めたものの、翌年の夏、フジテレビ系列ドラマ『コードブルー』に出演していたメンバー有岡大貴を見て彼らを思い出したことにより再燃し、それ以来約 7 年間彼らを応援し続けている。中でも特に応援しているメンバーが、伊野尾と八乙女の 2 名である。今まで、先述した「いのてり」や、八乙女を模したキャラクターである「ぴーたん」のぬいぐるみマスコットは販売されていたのだが、今回のようにメンバーそのものをモチーフとしたぬいぐるみは初めてであったので、お金に余裕が無いながらも迷わず購入した。所有者は現在もライブツアーに行く際などに必ず持参し、他のツアーグッズやうちわ、ペンライト、またライブ会場などと写真を撮影するなどして所有者なりに楽しんでいる。他の所有者の中には、自作の洋服や、100 円均一で販売されているぬいぐるみ専用の洋服や小物などを購入し、着用させるなどして楽しんでいる様子をよく SNS 等で見かける。所有者それぞれの楽しみ方ができるという、楽しみ方に決まりがない点が、本資料の優れている点である。

コンディション・レポート（Condition Report）

所有者は、自宅に届いた際の商品確認と、本報告書を作成する際の 2 回以外は、基本的に外袋に入れたまま保管していたため、資料の状態は大変良好なものと言える。ただ、ポンチョの顔部分（左目、右眉、眼鏡左側）の刺繍が少しほつれているが、所有者は滅多に袋から出さないため、購入時からの欠陥である可能性が高い。ぬいぐるみの布部分に目立った毛羽立ちや欠陥も無ければ、不自然に折れ曲がった部分や、足りない部品なども無い。購入して以来袋に入れて保管していたこともあり、微かな汚れや黒ずみなども見当たらない正真正銘の美品である。しかし、ぬいぐるみを保護していた外袋には少ししわができている。

イラストレーション（Illustration）

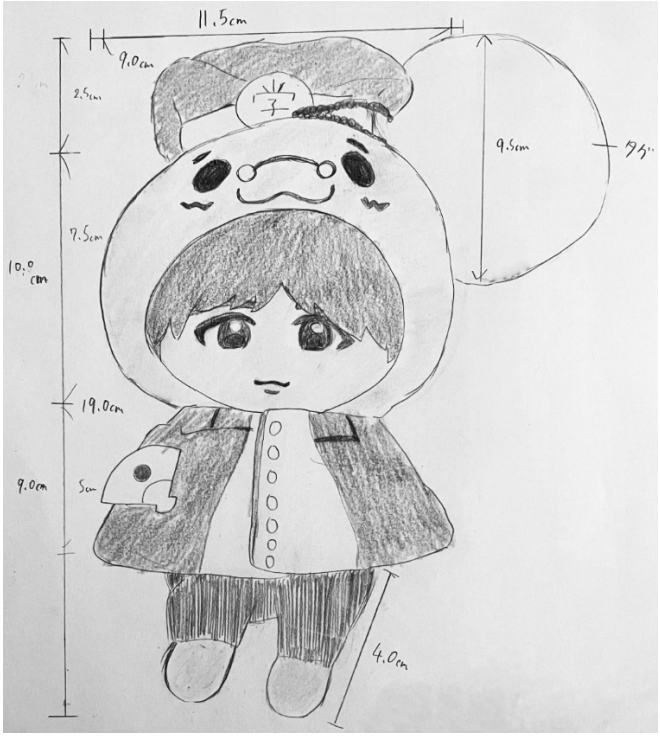


ポンチョ無し（正面）

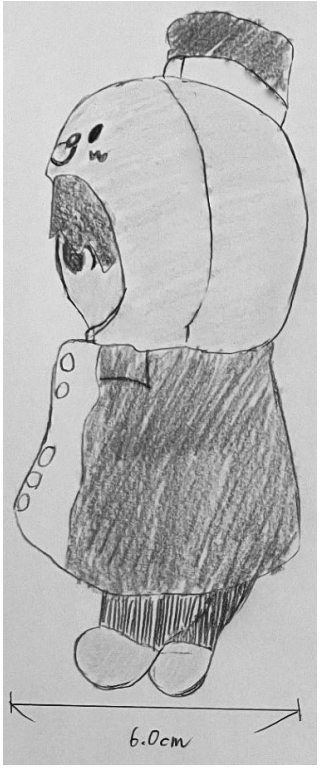
ポンチョ無し（側面）

ポンチョ無し（背面）

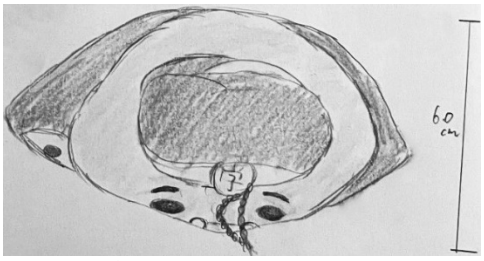
「いのてり」
ポンチョの
モチーフとなった
キャラクター



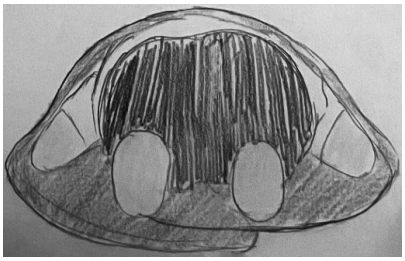
ポンチョ有り（正面）



ポンチョ有り（側面）



ポンチョ有り（上から）



ポンチョ有り（下から）

ポンチョ（正面）

ポンチョ有り（背面）

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

本資料は布製品であるため、湿気の多いところに放置してしまうと、カビが繁殖しかねない。そのようなことを防ぐため、高温多湿を避け、また水気のない場所での保管が必要である。所有者は、袋に入れたまま引き出し付きの棚に保管しているため、先述したカビや黒ずみなどの汚れはない。外袋も関連資料として、ぬいぐるみと共に保存する。

金属部分であるボールチェーンは、皮膚などに付着している脂などによって錆びやすく、また皮脂汚れによる布状態の悪化も予想できるので、金属に適した環境設定にも配慮を必要とする。

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

布製であるがゆえに、ぬいぐるみの糸のほつれにも注意する必要がある。本資料は刺繍が施されている部分が多いため、取り扱い者の爪が伸びていたりすると、何気なく触った際に、思いがけずひっかいてしまい、少し飛び出ていた糸に引っ掛かり、そのままほつれさせてしまう可能性がある。

布の毛羽立ちを防ぐには、毛流れに逆らって触らない、濡れた手で触らない、手袋をはめて触る、などといった対策が有効だと考えられる。

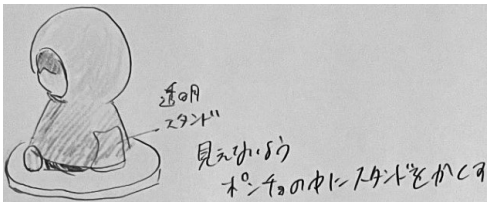
よって、本資料を扱う際には、手袋の着用が必須であり、引っかかる恐れがあるもからは遠ざけるという意識を徹底させる。

レーベル（Label）

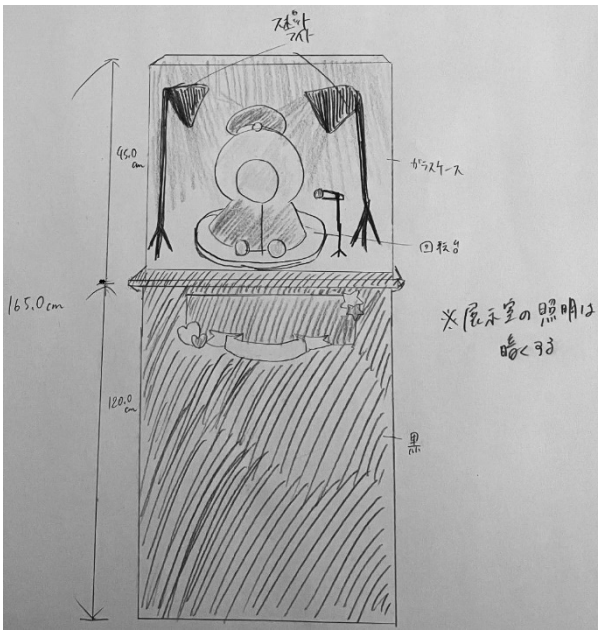
Hey！Say！JUMP のグッズとしてぬいぐるみマスコットを発売するのは 5 年ぶりであり、メンバーの、ファンに喜んでもらえるかどうかのドキドキ感、ファンの 5 年ぶりにグッズ化されたぬいぐるみを見た時の嬉しさ愛おしさを表すレーベルにしたく、そのような感情を混ぜ込んだうえで展示場の雰囲気にも合うデザインというと、やはりレーベルにもライブ感を溢れさせたい。よって、ライブと言えば“ファンサうちわ”（ファンサービスを受けるためにファンが自作する非公式うちわのこと）であるので、うちわに貼るような文字フォントを資料名に使用する。ライブ会場のワクワク感を表すためハートや星といった図形を右上部と左下部に配置、バランスをとるため下部中央にはリボンの図形を配置し、中にローマ字表記の伊野尾の名前を入れることで、レーベルさえもまるでセットの一部かのように見せる。背景色は伊野尾のイメージカラーである青色にする。説明文の最後は、伊野尾のライブでの定番のセリフである「〇〇しちゃえば、い～の？」という文言で締めることによって、伊野尾のファンは迷いなく「おっけー！」と答える。これは、まさしくライブ会場でのやり取りそのものである。今までに無い斬新なレーベルは、展示場の雰囲気も相まって一瞬でもライブに来たあの感情を思い出させる効果を狙っている。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）

本資料はライブツアーのグッズであるため、展示場の雰囲気もライブのような臨場感あるものにしたい。他メンバー7 名分のぬいぐるみも共に展示した方が、まるでライブに来ているかのような感覚が味わえそうだが、他メンバーの資料で所持しているのは八乙女のみである上に、合計 8 名分の資料の管理は難しいため、伊野尾の資料のみを、ライブ感あふれる雰囲気で展示する。



ライブ会場のアリーナ部分から伸びるリフターをイメージして、少し高い位置に展示したいため、展示台は少々背の高いものを使用する。貴重な資料なので手を触れられないようにするためにも、資料の周りは透明ケースで覆う。ライブでは、メンバーカラーを用いたスポットライトが必要不可欠であるため、左右にスタンド付きの青色のライトを用意し、上部から伊野尾のメンバーカラーである青色の光で資料を照らす。小物でスタンドマイクがあると、なお良い。資料を展示するケースの中がすでに青色に輝いているため、その光を強調するためにも展示場の照明は比較的暗めに設定すると、よりライブ会場感を演出することができると思われる。しかし資料は自立しないため、資料後方に透明なスタンドを用意する必要がある。さらに、資料を同じ視点からあらゆる角度で見てほしいため、回転台も用意する。レーベルは、ライブのセットの一部に見えるよう工夫しているため、資料のすぐ真下に設置する。



これらの設定を取り入れることにより、展示場で臨場感あふれるライブ会場を演出し、アイドルとしての伊野尾慧そのものを資料にしたかのように表現する。

編集後記

すでに大学 HP の「学生の活躍」と 3 月 15 日発行の『学報』第 137 号にも取り上げられたように、札幌市環境プラザと CISE ネットワークと連携し、2024 年 1 月 20 日に北海道大学総合博物館でミュージアムラリーを実施した。札幌市内の小学生約 20 名が、前半は写真のヒントを手がかりに展示場内の実物資料を探すという体験学習と後半は恐竜の系統樹モビール作りに挑戦し、本学の学芸員課程で受講中の学生 17 名がそのサポートを行った。この事業を成功させるために、本学で座学を 1 回、現地での事前準備とリハーサルなど 2 回を実施したこともあり、当日の事業は成功裏に終了し、小学生と保護者からも高い評価をいただくことができた（写真 1)。札幌市環境プラザとは、例年コラボ企画を継続しているところでもあり、雇用情勢や社会環境は大きく変化している中、学生のキャリア形成を支援する上でも有意義であるため、今後もこうした活動の機会を確保していきたいと考えている。

新型コロナ禍で数年間中断を余儀なくされていた日本通運スタッフによる梱包実習も数年ぶりに 2024 年 11 月 11 日（土）に学芸員課程実習室で再開することができた。のびのびと手足を動かす学生たちの満足気な様子が印象的であった。

写真 1　恐竜モビール作りにチャレンジする小学生とそれを見守る学芸員課程受講生